マルコによる福音書
連続講解説教

始・二〇〇一年七月八日

至・二〇〇三年三月三〇日

辻　幸宏

本説教集は、二〇〇一年～〇三年に上諏訪湖畔伝道所（現・教会）において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思い、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

今後順次、他の書簡の説教集を印刷していく予定にしています。

個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊　公同書簡一　ヤコブの手紙
　　二　ペトロの手紙一
　　三　ペトロの手紙二
　　四　ヨハネの手紙一・二・三・ユダの手紙
　　ヨハネの黙示録
　　ヨハネによる福音書（一～五）
　　出エジプト記（一～二〇章）

二〇二一年七月

辻　幸宏

「福音の初め」　マルコ一章一～八節、イザヤ四〇章一～一一節

二〇〇一年七月八日

今日から、マルコによる福音書を学びます。マルコは神の子イエス・キリストの福音の初めと書き始めます。今では「マルコによる福音書」とタイトルが付いていますが、当初はタイトルはありませんでした。福音書には著者名が記されていませんでした。マルコはペトロの通訳、バルナバのいとこでした（コロサイ四章一〇節）が、マルコにとっては関係ありません。マルコ福音書が「誰によって記されましたのか」ではなく、「何を伝えたいのか」、「福音を伝えたい」ことが、何よりも重要でした。

そのことを一節は端的に表れています。第一に「イエス・キリストは神の子」であるという信仰告白であり、第二に「イエス・キリストこそが福音」であることです。主イエスが十字架に架けられてから二〇数年が経ち、いろんな憶測が飛んでいました。そんな時代に、イエス・キリストこそが神の御子・救い主であり、イエス・キリストにこそ福音であることを語ります。また「福音の初め」とは、序文（一章二～八節）を示すと解釈する者と、マルコ福音書が四福音書の中で最初に記されましたこともあり、マルコ福音書が最初に人々に伝えられましたことを示していると解釈する者もいます。

マルコは九節から、早速主イエスの公生涯について語っていきます。そしてマタイやルカに記されているような主イエスの誕生のなどについては一切記しません。この当たりにもマルコらしさがあります。

しかし、最初にどうしても洗礼者ヨハネについて記しておく必要がありました。それは、イエス・キリストが、旧約聖書に預言されている救い主であることを明らかにする必要があったからであり、麻原彰晃（オウム）などのように、「私が神だ」と突然語る偽預言者でないことを確認しています。

旧約聖書は、「あなた」、つまり救い主の前に、使者・預言者が与えられると語っていました。そして洗礼者ヨハネは、預言通りに現れました。最後の預言者が現れて以来二〇

〇年近く経って、ヨハネは突然現れましたが、それは偶然でも何でもなく、神が既にモーセの時代に、救い主が現れる前に使者を遣わし、準備をさせ、真の救い主を来させると約束をなさっていたことが実現したのです。

またヨハネは救い主について語ります（七～八節）。第一に、ヨハネですら履物のひもを解く値打ちもありません。つまりヨハネは、主の御前では最も卑しい奴隷の仕事すらできない小さな存在です。そのヨハネは、人々に悔い改めを説き、人々に洗礼を授けていました。主の存在がここに語られます。

第二に救い主は、聖霊によって洗礼をお授けになります。水を全身が浸るように、私たちはキリストによって聖霊に満たされます。救い主は、私たちが困った時だけ助ける神ではなく、常に私たちと共にいてくださいます。私たちは常に聖霊に満たされており、キリストと父なる神に繋がっています。

私たちが洗礼に与ることにより、私たちの罪の汚れは聖められ、罪はキリストの十字架の故に赦されました。すでに罪が赦されていますが故に、今私たちは主の御前に立つことが許されています。罪の死に向かって歩んでいた者が、神の国に向かっての歩みを始める者とされました。一八〇度の方向転換です。ここに神の道があります。

ヨハネはそうした救い主が現れることを語り、人々に悔い改めを迫りました。悔い改めは、「反省すること」・「悪い人間であることを自覚すること」ではありません。今までの自分を捨て、一八〇度方向転換し、神の国に向かうことです。そのために御言葉に聞き、聖霊に包まれることが求められています。そして私たちを聖霊の洗礼を授けてくださったイエス・キリストにすべてをより頼むことです。そうすることにより、神の道が示され、私たちの人生そのものが変えられていきます。

「イエスの洗礼」　マルコ一章九～一一節、創世記一章一～五節

二〇〇一年七月一五日

マルコが福音書を記した目的は「神の子イエス・キリストの福音」を人々に伝えることでした(一節)。そのためマルコは、いきなり主イエスが洗礼を授かり、公生涯に入っていくことを記します。

ここを読めば「主イエスも、私たちと同じように洗礼をお受けになられたのだ」と簡単に読み過ごしてしまわれるかも知れません。しかし私たちの洗礼と主イエスの洗礼は根本的な違いがあります。私たちの洗礼には、罪への自覚とキリストの十字架による罪の赦しの確信が欠かせません。しかし主イエスは神そのものであられ、罪がなく、悔い改めの必要もありません。実際、ヨハネも主イエスが洗礼を受けられようとした時、それを阻止しようとしました(マタイ三章一四節)。しかし主イエスは洗礼を受けられました(同三章一五節)。このことは、父なる神の御心に適って、正しいことです。

確かに、主イエスが神であられることだけを考えれば洗礼を授かる必要はまったくありません。しかしながらキリストは神であられつつ、人として遜られました(フィリピ二章六～七節)。キリストが地上に遜られた目的は、罪人である私たちの罪を背負い、十字架に架かり、私たちの刑罰を担うことにあります。キリストの洗礼は、私たちに代わって罪人に数えられ、私たちに代わって真の罪の贖いを行われるためでした。つまりキリストの受洗により、公に神と罪人たる私たちとの仲保者となられたのです。

ヨハネの使者としての最大の使命は、主イエスに洗礼を授けることでした。そのため野の地にヨハネは捕らえられ(一四節)、処刑され姿を消します(六章一四節～)。

キリストが洗礼を授かると、天が裂けました(一〇節)。どういう状況か説明することはできませんが、父なる神が介在しておられることを知ることができます。これに似たことは、キリストが十字架の死を遂げられました時にも確認できます(マタイ二七章五一節)。つまり、キリストが洗礼をお受けになられることは、神が御計画された罪人の救いに関わ

る大きな出来事であり、神の御心のままに、キリストが行動されていることを物語っています。キリストの死は、神の子とされている私たちのための死であると同時に、あなたの罪の故の死でした。そのためキリストの御業が成し遂げられた時、天が裂けました。つまり神にとって、キリストの十字架の贖いによって与えられるあなたの罪の死からの救いは、貴いものなのです。そして“霊”が鳩のように降ってきました。

つまり御子イエス・キリストが洗礼を授かった時、父なる神、聖霊なる神が共に臨在されました。この場面は神の救いの御計画にとって、明らかに大きな節目の時です。キリストの洗礼は、私たちの救いの歴史の中で、極めて重大な出来事です。

また主イエスに聖霊が注がれたことは、御霊の油注ぎを意味します。洗礼とは油注ぎを意味します。つまりナザレのイエスが、メシア・キリスト(救い主)として任職したことを意味します。ここで油注がれましたキリストは、王・預言者・祭司としての働きを行われます。従ってキリストが天から御霊を受けられたことは、キリストが新しい務めに就いたことを意味します。ここから福音の宣教が始まります。キリストに与えられた職務は、罪人である私たちの救いに直結します。キリストは、王として世界を支配され、すべての国を政治的に、すべての教会を霊的に統治しておられます。またキリストは預言者として、私たちに救いに必要な御言葉を備えてくださいます。さらにキリストは祭司として、私たちの救いに必要な、罪の刑罰を、十字架において担ってくださいました。これらの具体的な働きとして、福音宣教が始まります。キリストの福音宣教は罪人を救います。福音宣教は、一方では教会の伝道活動であり信徒の働きですが、同時に神が直接聖霊を通して働かれる出来事です。この宣教活動は今も続けられ、そして私たちはこのキリストの宣教活動により救われました。

私たちは、自分自身で罪を悔い改め、信仰告白し、洗礼を受けました。しかし、そこにはキリストがなしてくださった福音宣教があり、聖霊が私たちに働いているからこそです。あなたが一人で神を信じたのではなく、あなたが信じたために、父なる神の御計画、キリス

トの御業、聖霊の働きが、すでにあり、準備されていました。神のあなたをお救いくださるためにお働きくださった愛に心から感謝しましょう。

「誘惑」　マルコ一章一二～一三節、ヨブ一章六～一二節

二〇〇一年七月二二日

私たちは、日々様々な誘惑を受け、それに相対しています。それは、信仰の戦いだけでなく、日常の生活における様々な罪への誘惑もあります。

今日の御言葉では主イエスがサタンの誘惑を受けられましたことが記されています。マタイ（四章一～一一節）・ルカ（四章一～一三節）では、サタンからの誘惑の内容が具体的に記されていますが、マルコはそれを記しません。つまりマルコはマタイ・ルカのように主イエスがサタンに勝利されましたことを記すのではなく、主イエスがサタンの誘惑に入られましたことのみを語ります。主イエスは事実、この後様々な場所で、サタンなどの誘惑に遭われます。そして主イエスは、十字架の死から勝利され復活される時まで、サタンの試練に遭われます。つまりマルコは、主イエスがサタンの力が常に働く場所に来られたことを語ります。従ってここでの荒れ野は、地形的な荒れ野であると同時に、霊的な荒れ野とも理解できます。そして主イエスは地上の生涯の間、サタンの誘惑にあり続けました。しかし、主イエスはサタンの誘惑を常に退け、阻み、克服されました。

キリストが誘惑に遭われたことは、キリストが私たちの日々の苦しみを単に御存知であるだけではなく、私たちの苦しみを御自身の体験として御存知であられ、理解し、受け止めてくださいます。

またキリストは十字架の死と復活により、サタンに勝利されました。日々の生活にあって誘惑・試練にある私たちもまたキリストの勝利の故に、勝利が約束されています。また

私たちの遭う誘惑は、ヨブ記（一章～二章）に見る如く神の許しの範囲内であり、それに耐えられないことは決してありません（Ｉコリント一〇章一三節）。

主イエスは四〇日間荒れ野に留まられました。四〇と聞けば、出エジプトにおける荒れ野での四〇年間が思い浮かびます。しかしイスラエルにとってこの四〇年は、苦しみの時であると同時に備えの時でした。彼らは神の前に大きな罪を犯しましたが、この間彼らは随分鍛えられました。そしてエジプトでのご馳走が懐かしいと言う世代はすべて死に絶え、神を信じる真の民たちが育ち、約束の地カナンの地に入っていきました。つまり四〇年は、イスラエルにとって準備と訓練の時でした。同様にキリストにとってこの四〇日間は、神の子・救い主として、新しいイスラエルの頭として、指導者としてふさわしい者として認められるために必要な訓練の期間でした。

私たちが地上の生涯での様々な誘惑は、決して四〇日間で終わるようなものではありません。地上の生涯をまっとうするまで戦いが続きます。しかしそれは神の御国への準備と訓練の時です。地上の生涯を終えると私たちは神の国における祝福が与えられます。そして、神の国の永遠性からすれば、地上の生涯は僅かな時です。

続いてマルコは、主イエスが野獣と一緒におられたことを記します。ここに相反する二つの解釈があります。一つは野獣が昼も夜も獲物を狙っており、油断した時には命が奪われる様な、緊迫した状況の中、主イエスは誘惑を遭われているとします。もう一つの解釈は、メシアの下では、野獣たりとて平和に暮らすものとなります。両方の解釈が可能かと思うが、私としては後者を考える。前者の解釈では倫理的な教えとなってしまう恐れがあるからです。またキリストがこの世に遜られましたのは罪人の救いのためであり、平和をもたらすためであるからです。

神が天地万物を創造された時、地の獣も人に支配される存在として、従順に仕える存在でした。これらの秩序が崩れたのは人が罪を犯したためです。キリストがこの世にもたらす福音とは、罪によって歪んだ秩序を立て直し、地上に平和をもたらすためです。キリス

トの福音は地上に再創造をもたらし、秩序の回復を与えます。

私たちは今も霊的な荒れ野にいます。そのためサタンの誘惑・様々な苦しみに遭います。しかし、キリストは既に荒れ野で勝利を治められました。そして、キリストを信じる私たちにも、キリストの勝利がもたらされています。キリストは、私たちのすべての苦しみ、悲しみを御存知であられ、またその心をくみ取ってくださいます。私たちは一人で苦しみ・悲しみの重荷を負っているのではなく、キリストがそれを負ってくださいます。だからこそ私たちの地上での歩みは、苦しみ・悲しみの中にあっても、キリストにある喜びに満たされ、キリストによって与えられる神の国の希望を持って歩み続けることができます。

「福音を信じる」　マルコ一章一四～二〇節、イザヤ五二章一～一二節

二〇〇一年七月二九日

福音とは「よき知らせ、良き訪れ」であり、教会では主の支配と救いの時の到来を意味します。つまり私たちにとっての良き訪れは、死に向かって歩んでいた私たちが、一八〇度進行方向を変え、神・神の国への道を歩むことです。神・福音を信じることは、神の要求であり、また神によって召された者にはそれに答え、神を信じ、従っていくものとなります。

マルコは、キリストの先駆者として預言者の働きをしていた洗礼者ヨハネが、キリストの宣教開始前に捕らえられたことを記します。このことは、ルカやヨハネとは記述の相違があります。それは洗礼者ヨハネが、キリストの先駆者であることを強調するためでした。マルコには、ヨハネの逮捕前のキリストの宣教活動について書き記す必要はありませんでした。

そしてキリストは荒れ野からガリラヤに行き宣教活動を始められます。当時ガリラヤは、

ユダヤ・エルサレムからは遠く離れ、辺鄙な田舎でした。北イスラエル（ナフタリ族、ゼブルン族）の土地であり、異邦人たちが住み着き、ユダヤ人達はこの土地を離れていました。この当時、ユダヤ人達が新天地として、希望をもって移り住んできていました。主イエスの父ヨセフもベツレヘムからナザレに移っていました。従ってエルサレム程、旧約聖書に書かれている救い主を待ち望むこともなかったと思われます。つまり福音は、人々が救い主の誕生を待ちわびている所にではなく、むしろそうした期待が乏しい場所であっても神の要求がある場所で語られ、そこに住む人々に伝えられました。福音は人間の希望ではなく、神の希望により語られ、前進します。スコットランドの宗教改革も、セント・アンドリューという僅か二〇〇〇人程度の町で発生し、エジンバラや国中に広がりました。

主イエスの言葉がそれを裏付けます。第一に時が満ちる必要があります。福音が語られるのは人の計画でなされるのではありません。神の救いに関する御計画があり、その御計画の時と場所が一致した時に、時が満ち、福音が伝えられます。

次に神の国が近づいたことが語られます。森前首相は「日本は天皇を中心とする神の国」と語りましたが、聖書は世界・宇宙は神の国であると語ります。神の国はキリストにより到来します。キリストの十字架と復活により、私たちの罪の赦しと命への救いは達成されます。一方神の国は、未だに地上に完成していません。キリストの再臨と最後の審判を、希望をもって待たなければなりません（参照・イザヤ五二章七節～）。

神の国には永遠の希望と喜びがあります。しかし私たちは罪の中、逆を向いて歩いていました。福音を神の御言葉によって聞き、自らの過ちが示され、方向転換をします。そこに悔い改めがおこります。これは神の要求であり、神を信じて、安心して与えられた道を歩んで行けば良いのです。

そして一六節以降、神が神の国に召された人について語ります。彼らは一二弟子で中心的な人たちとなります。彼らは漁師として誇りを持っていました（参照・ルカ五章一～一一節）が、旧約聖書に精通していたわけではありません。神は、エルサレムではなくガリ

ラヤに住む、一介の漁師を一番弟子として選ばれました。ペトロについては、福音書を通し、早とちりでおっちょこちょいなことが語られています。特別に神から召された使徒ですらこの有様であり、私たちは神に相応しいか相応しくないかなど、自分で判断してはなりません。今、御言葉を聞き、人生の方向転換が示されているのは私たちであり、神は私たちを召し、神の国に招いてくださっています。何かに優れているから召されたのではなく、神によって召されたからその道を歩むのです。事実ペトロは、キリストの十字架・復活・昇天の後、聖霊によって語る者としての賜物が与えられました。神が必要を満たしてくださいます。

ただ初めから福音のすべてが分かるものではありません。御言葉が語られ、聖霊の働きにより、徐々に理解を深めていくのです。つまり私たちが神を信じ、礼拝し続けるのは、私たちがクリスチャンとして相応しいからではなく、神が私たちを求めておられるからです。私たちは、福音、御言葉が語られた時、繰り返し罪の方向から神の国の方向へと方向転換をし、悔い改め、神にすべてを委ねて神の国に向かって歩み続ける必要があります。私たちにはすでにキリストによる罪の赦しが宣言されており、キリストが再臨した時に完成する神の国に入ることが許されています。

「権威ある教え」　マルコ一章二一～二八節、申命記六章一～一五節

二〇〇一年八月五日

主イエスは、宣教の初め、カファルナウムに行き、御言葉の説き証しを始められました。ここに福音があるからです。その日は安息日(第七日)で、礼拝が持たれていました。日曜日が主の日となるのはキリストの復活を待たなければなりません。

神殿礼拝から会堂(シナゴーグ)での礼拝へと変わったのは、イスラエルがバビロンに補

囚の民として遣わされた時だと言われています。神殿礼拝ができなくなったからです。その後、イスラエルが帰還しても会堂での礼拝が残りました。会堂での礼拝はこうです。①招きの言葉・申命記六章四～九節、②シナゴーグの祈り、③律法書朗読、④預言書朗読、⑤解き明かし。現在私たちが守っている礼拝は、宗教改革時代に初代教会の礼拝のあり方を探り形成されましたが、この当時の会堂礼拝が基礎となっています。

当時、説き明しは律法学者たちが行っていました。しかし、偉い先生が来られました時などは、その先生に解き明かしをしていただいていました。主イエスも、恐らく飛び込みで、説き証しを始められたと考えられます。

しかし私たちが一番知りたいこと、キリストがどの様に聖書の解き明かしをされましたかは、マルコは記しません。ただ人々はその教えに非常に驚き、律法学者たちのようにではなく、権威ある言葉を聞きました。

律法学者たちは、「昔の偉い学者は、この様なことを教えた」と、昔の人々の受け売りをしていました。しかし主イエスはその様なことを一切なさいません。主イエスはその道の専門家がこれまで語らなかった様な新しい内容の話されました。だからこそ主イエスの語られた言葉は、律法学者のようにではありませんでした。

そしてその言葉には権威がありました。現在でも権威については誤った考えを持つ人がいます。「権威ある地位にある者」＝「権威ある者」ではありません。権威ある言葉・仕事により、その人自身の権威が認められる必要があります。

主イエスの語られた言葉の権威は聖書的な権威です。律法学者たちは、聖書に縛られ一点一画までそれを追及します。しかし彼らは結果として人々を律法の内に雁字搦めにします。しかし主イエスが語られた言葉は、福音「良き知らせ」であり、神の御心・愛を明確に知らせるものでした。人々にとって語り手は、ナザレ人ヨセフの息子イエスにすぎません。しかし彼らは主イエスの言葉に権威を感じ取ったのです。

現在の日本は、不況と将来の不安が渦巻いています。そこで政治家は「構造改革」を叫

びますが、私たちが求めているのは、その言葉ではなく、中身です。それがないため不安と憤りを感じます。しかし主イエスの言葉には、闇と悲惨の中にある人間の救いに関する完全なプランが語られました。そこに人々は権威を感じたのです。

そして主イエスにある権威が二三節以降に示されます。ここに汚れた霊に取り付かれた人がいます。汚れました霊の役割は福音の前進を妨害することです。それは国家にも個人にも入り込みます。私たちに「キリスト教会の教えや聖書の教えがおかしい。そんなものは嘘だ」とささやくのが汚れた霊です。そして汚れた霊は、キリストの正体を知って攻撃をします。だからこそ汚れた霊は、イエスのことを「神の聖者だ」と、真実を語ります。

しかし主イエスはこの汚れた霊に対して、「黙れ。この人から出て行け」と、命じられます。すると汚れた霊は出ていきます。そこに神の絶対的な権威が示されました。現在でも汚れた霊は形を変え、福音宣教の邪魔をします。教会は成長するどころか、日本でも欧米でもキリスト教会が衰退しています。しかしキリストにある権威は、私たちの周囲にあるすべての汚れた霊に打ち勝つ力を持っておられます。聖書の解き明かしの言葉にはそれだけの力があります。ここにこそ、真の救い・私たちの慰めがあります。

「病人のいやし」　マルコ一章二九～三四節、詩編一〇七編一七～二二節

二〇〇一年八月一二日

主イエスは、安息日に会堂に入り説教をされました（二一～二八節）。そして礼拝後すぐに、シモンの家へ向かいました（二九節）。このことから安息日とは何かを考えていきます。

当時安息日は土曜日でした。この日を守ることは、ユダヤ人にとって最も重要な位置を占めていました。「七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない」（出エジプト二〇章七節）からです。彼らは神礼拝以上に、仕事を休むことを

強調しました。確かに旧約聖書には、たとえば火をおこす（出エジプト三五章三節）、薪を集める（民数記一五章三二～三六節）、食事を用意する（出エジプト一六章二三～三〇節）ことが禁じられています。また安息日を犯す者は殺されなければならない（出エジプト三一章一四節、民数記一五章三二～三六節）と定めています。しかしこれらは何のためであるかを考えなければなりません。律法学者たちはそれを拡大解釈して、細かな規程を作り、徹底して守りました。ところが主イエスは、安息日の午後、熱を出し寝ていたシモンの姑をいやされました。翌日にずらすこともできでしょうが、キリストは安息日にされました。

ユダヤ人たちは、律法を厳守することが目的となり、何のための安息日かを忘れていました。私たちも今公的礼拝を守っていますが、「説教を聞き、聖書知識が蓄えられました」で終わってはなりません。キリストが伝えたのは福音です。礼拝により、霊的にキリストと出会い、罪の束縛から解放され、救いに与りました。労働の休息は、神礼拝にするために、霊的肉的に整えられるために必要であるからです。

また安息日は、終末的な方向性を持ちます。牧田先生は次のように語られます。『終末における栄光の神の国においては、神が人と共に住むという事態が完全な形で実現されるのですが、主の日の公的礼拝においても御言葉の説教と聖礼典の執行を通して、キリストが聖霊によって現実に臨在されます。神と人との交わりが最もリアルに具現化されます。従って、主の日の公的礼拝においてこそ、キリストにある聖霊による命の水の流れを最も鮮やかに味わうことが許されます。もちろん、いまだ完全ではありませんから、「前味」と表現されるのですが、確かに主の日の公的礼拝は、この地上で、あの神の国の実体が最も鮮やかに現れる場所です。』（中部中会講演の講演録より）

つまり安息日は、神が私たちのために備えてくださった日であって、人を裁くために備えられました日ではありません。キリストは、このことを問われました。

シモンのしゅうとめは、キリストに出会い、病が癒されましたことにより、病という束縛から解放され、神と出会いました。そしてそれを素直に喜んだのです。そして主イエス

一行をもてなしました。ここには律法に束縛されること、人目をはばかることもありません。救われた喜びがあるだけです。

一方、周囲の人々は、夕方になり安息日が明けてからキリストの下に来ます(三二～三三節)。律法違反を恐れていたからであり、それでもなお神の恩恵に与ろうとする身勝手さがあります。これは周囲との関係や自分に縛られている私たちの姿です。しかし主イエスは、この未だに律法の束縛から抜け出せていない人々に対しても、病を癒され、悪霊を追い出され、罪を赦し、神との交わりに入れてくださいました(三四節、参照・詩編一〇七編一九～二二節)。

シモン達はすべてを捨ててキリストに従います(一八節、ルカ五章一一節)。しかしキリストは、シモンの家を訪れました。キリストに従うことは、家族との断絶ではなく、その家族も神と出会います。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」(使徒一六章三一節)。これが神の愛であり、願いです。家族が救われるには時間がかかるかもしれません。親族の宗教・周囲との関係など様々な束縛・律法があるかもしれません。しかしキリストはそのすべてから解放してくださり、救ってくださいます。

「宣教する」　マルコ一章三五～三九節、イザヤ六一章一～四節

二〇〇一年八月一九日

主イエスは、安息日に会堂において説教をされました後(二一～二八節)、シモンとアンデレの家でシモンのしゅうとめを癒されました(二九～三一節)。安息日が過ぎると、町中の人々も主イエスの所に集まり、病人の癒し等を願い、主イエスは彼らを癒されました(三二～三四節)。どれ位の人々が集まり、どの位の時間がかかったかは記されていませんが、夜遅くにまでなったと考えられます。主イエスは、肉体的・精神的な相当の疲れが溜

まったことでしょう。「主イエスは、神だから疲れることはない」とも思われるかもしれませんが、主イエスも肉体を持つ人間としての疲れを覚えられました。

私たちだと、疲れが溜まっている時、寝て疲れをとります。しかし主イエスは翌朝、暗いうちに起きて人里離れました所へ出て行かれ、祈られました(三五節)。主イエスにとって、疲れを癒す以上に大切なことが祈ることでした。主イエスにとっての祈りは、父なる神・聖霊なる神との三位一体なる神としての交わりです。主イエスの御業は、父なる神の御計画に聞き、従順に従われること以外にはあり得ません。私たちは、たとえ親子・夫婦であれ、最も親しい友人であれ、どれだけ親しく付き合っていたとしても、知らないところばかりであり、人の言うことをすべて聞くことはありません。ところが、父なる神と主イエスとの関係は、そういったズレはありません。すべてを計画され、摂理おいて歴史にあらわされる父なる神の御計画に、主イエスはすべて従われます。ゲッセマネの祈りでも分かるように、主イエスは人間として苦しみを知っておられたため、十字架を避けたかったのです。しかし、父なる神によって地上に遣わされました主イエスは、十字架の死に至るまで父なる神に従順でした(フィリピ二章六～一〇節)。そこには、父なる神に反抗する、逆らうといったことはあり得ません。主イエスは、この様に父なる神との深い交わりに入られるため、誰もいない所で一人で祈られました。

私たちはキリストの十字架による救いを信じています。そのためには私たちが神の御計画にすべてを委ねる心が必要です。今日の一日の歩みも、主に委ねるのです。それが私たちの祈りとなります。

しかし人がいる所で祈ることはできません。会話があり交わりが生じるからです。祈りは神との一対一の交わりであり、他の人がそこに介在することはできません。そのため主イエスも一人になられました。このことは個人の祈りと同様、共同体(教会)の祈りも同様です。礼拝や祈祷会での祈りは、人に聞かせる祈りではなく主への祈りであり、それを聞く者も同じ思いとなりアーメンと答えます。それはもう自分の祈りとして主に受け入れら

れたことを意味しています。真にアーメンと答えるためには、キリストによる霊的一致が求められます。「私はその様なことは思っていない」と思えば、そこに一致はなくなり、アーメンと言えません。互いに、キリストの肢体として共同体としての感謝と必要を祈ることにより、一致が必要です。そうすれば必ず教会は成長します。

しかし人々は、一人祈られる主イエスではなく、病を癒す主イエスを求めました。主イエスの救いの目的を知らず、個人的な欲望です。弟子たちも同様です。だからシモン（ペトロ）は、主イエスを迎えに来たのです。

しかし主イエスがこの世に来られた目的は、救いをもたらし福音を伝えることです。それが父なる神の御計画であり、主イエスもそれに従われました（参照・イザヤ六一章）。人々の病気を癒し、悪霊を人々から追い出す事は、キリストが神として持っておられる力が人々に示されるためには必要でした。しかし、これが本質ではありません。主イエスは、カファルナウムにいつまでも留まられることなく、いまだに福音が伝えられていない場所に行き、宣教し、悪霊を追い出し、福音を広めていきました。これこそが父なる神の御心であり、祈りの結果です。

伝道は、点に留まっていてはなりません。点から線へ、線から面への広がりが必要です。そのために、個人伝道・家族伝道があり、その必要に応じて家庭集会が生じます。そしてこの教会を中心とした面で伝道がなされていきます。私たちが、こうした一つの目標に向かって一致した祈りを行っていくことによって、福音の広がりが見られます。

「イエスと人々」　マルコ一章四〇～四五節、レビ一四章一～一三節

二〇〇一年八月二六日

日本では、つい最近までハンセン病の患者を隔離し差別していました。そして今年になってハンセン病損害賠償訴訟が和解したことは御存知の通りです。こうした差別は、皮膚病が空気感染があるとの推測から、ひどく恐れられていたからです（レビ一三章四五～四六節）。旧約の時代これらの患者は、家族・人里から離れ、ゴミ捨て場・墓場・荒れ野で、一人生活することが求められていました。彼らが悪い事をしたわけではありません。にも関わらず、たまたまこの病にかかった故に、社会的な偏見・差別を一身に受けなければなりませんでした。病気の故、本名さえ名乗ることもできませんでした。この病の惨さは言語を絶するものであり、その生活は極めて苦しい辛らつなものと言わなければなりません。こうした差別は、近年かなり少なくなってはいますが、民族・部落・身分・男女・身体障害者に対する差別などは現実に残っています。

キリストは、こうした差別されている者、社会的弱者と呼ばれている人々に手をさしのべておられます。この患者は、主イエスの噂を何らかの形で耳にしていたのか、主イエスの神としての力が聖霊によって示されたのかはこの文脈からでは分かりませんが、彼はキリストの御前に行き、清くなることを願いました。彼らは人前では「わたしは汚れた者です」と叫ばなければなりませんでしたが、彼はここでそうしませんでした。律法違反での処刑さえ、死んだも同然の生活が強いられていた者にとっては、人間的な生活を送りたい願望が優っていました。

その時主イエスは、彼を深く憐れまれました。「深く憐れむ」とは、本来「内蔵」を示す名詞に由来し、人間の感情を言い表します（岩波書店・佐藤研訳「はらわたがちぎれる想いに駆られ」）。「憐れむ」は日本語では、暖かく包むような優しさを思い浮かべますが、ギリシャ語では、全身から立ちこめる感情が露わになる言葉です。

また写本の中には、「深く憐れむ」を「怒る」と記すものもあります。この解釈も捨てがたいと言えます。キリストは怒られました。キリストは、人間が悲惨の中に置かれていることを、見過ごされる方ではありません。キリストは、人間を支配するサタン・罪に対して憤りを持っておられます。癒しは、このキリストの愛の表れです。

人々は、病気・災難などは因果応報的に考えてきました。しかしすべては神の支配の下にあります。人々はこれらにより、人間の弱さ・はかなさ・愚かさ・罪が示されます。そして罪深さと神の愛を知ります。そのために主は、病気や災難を用いられます。キリストは、重い皮膚病で苦しんでいる人を癒されました。同様にキリストは、私たちの持っている様々な苦痛・罪・死の重荷も、拭い去ってくださいます。

その後キリストは、この男に祭司に見せるように語られます。社会生活への復帰のためのキリストの愛です。しかしこの男は、主イエスの御言葉を無視し、人々に言い広めます。嬉しさのあまりの行為であり、気持ちは理解できます。しかし、皮膚病が治ったという結果のみが伝えられるのでは、何にもなりません。ただ、癒しを行なわれたイエスとして、人々の注目を集め、小泉首相の様ないわゆるミーハー的な人気を集め、主イエスの本来ある働きである福音の宣教を邪魔することです。

キリストは奇蹟の御業と御言葉により、罪に縛られ虜にされていた私たちの生活を、具体的に生きた活動あるものへと変化させてくださいます。ただ、病気が癒されましたと言う表面的なことだけではなく、その根源にある罪の赦し、死の恐怖からの解放、永遠の生命が与えられたことが伝えられる必要があります。

※新共同訳修正「らい病」→「重い皮膚病」

「罪を赦す権威」　マルコ二章一～一二節、イザヤ四三章二一～二八節

二〇〇一年九月二日

今日から二章に入ります。今回も主イエスは奇蹟を行われます。しかしキリストの御業の中心は救済であり、マルコはこれを福音をもって伝えることを第一にしている（一章一節）ことを忘れてはなりません。

主イエスは、人里離れました所へ行かざるを得なかったのですが、再びカファルナウムに戻って来られました（一節）。それを知った多くの人々が集まってきます。説教を聞いた人たち・癒しを見た人たち・またそれらのことを聞いた人たちでしょう。そこには、真に救いを求めていた者、癒しを求めていた者もいたでしょうが、時の人イエスを見に来た人たちもいたことかと思われます。そこに中風の人を運んできた四人の人もいました。彼らは主イエスに病気を癒す力があることを認め、中風の人の癒しを強く信じていました。しかし主イエスに近づけなかったため、強硬な手段に出ました（四節）。再度主イエスにお会いできないと思ったからかも知れません。主イエスは彼らの信仰を認め、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦される」と言われます（五節）。信仰は御言葉の宣教と聖霊の御業によって与えられます（ウェストミンスター信仰告白一四章一節）。彼らは罪の赦しまで信じていたかどうかは不明ですが、恐らく主イエスの説教を聞き、聖霊により信仰が与えられたのです。

一方、律法学者たちは主イエスに対して「神を冒涜している」と思います（六～七節）。これは、主イエスが神であられることに気付かなかったことを除けば、的を射ていたことです（参照・イザヤ四三章二五節）。この世にある様々な宗教の中に「病気が癒された」、「悩みが解消された」と語りつつ、「自分たちこそ真の宗教だ」と語るものが多くあります。律法学者たちの言葉は、この様な人々に対しては的を射た言葉でした。

しかし、イエス・キリストは神の御子です。これが律法学者たちの唯一の間違いです。御言葉と共に神の御霊が働いた人々には、キリストの本質が示され、信仰が与えられました。そしてその人たちが、キリストの十字架と復活の故に、罪の赦しの宣言が与えられます。律法学者には、神の御霊の働きがなかったため、信じることができませんでした。

また主イエスにとって人々の病を癒すことは、目的ではなく、神の力を示す一つの手段であり、その目的は、キリストにこそ罪の赦し、つまり救いを与える救い主である事が示されることでした。中風の人を運んできた四人は、このキリストの御力を信じたのです。

そして私たちも、御言葉と御霊の働きにより、キリストを信じることができます。

しかし私たちが神を信じるのは、「ただ信じろ」と、わけも分からないで信じるものではありません。それは危険な思想です。本当に神を信じる信仰が養われるためには、示された御言葉、語られた説教を、理解し、そこに御霊の働きにより信仰が与えられます。私たちが、主の日の礼拝を、特に御言葉の説き明かしです説教を第一にしなければならないのは、礼拝が神の招きであると同時に、私たちに神を信じる信仰が与えられ、信仰が養われていくからです。

また、私たちの信仰の養いのためには、御言葉と共に礼典(洗礼・聖餐)、祈祷があります(ウェストミンスター小教理問八八)。この後私たちは聖餐の礼典に招かれますが、聖餐により、私たちはキリストの贖いによって罪赦された者であり、神の子であること、既に神によって義が与えられ、また聖化され続けていることを確認することができます。

信仰とは、独り善がりのものではありません。私たちに永遠の生命をお与えくださる神との深い交わりにあります。私たちは、そのことを礼拝を通して確認することが許されています。また、四人の男たちは、大胆な行動に出ました。常識はずれかも知れません。しかし私たちに信仰が与えられた時、永遠の生命の希望・喜び・感謝から、行動します。そしてそれが主への奉仕へとなります。主への感謝の気持ちを持ちをもって、主に仕えていきたいものです。

「救いに招かれる人」　マルコ二章一三～一七節、イザヤ五五章一～七節

二〇〇一年九月九日

私たち人間は、今まで育ってきた環境、家族の影響を強く受け、自分の考え・生き方を変えることは難しいものです。信仰については、なおさらのことではないでしょうか。

レビの場合はどうだったでしょうか？　彼は徴税人でした。当時、徴税人は人々から嫌われていました。一つは、彼らがローマ政府に仕え、仕事をしていたからです。もう一つは、彼らが規定以上の金を取り立て、自らの懐に入れていたからです。彼らは、自由に取り立てができる分、裕福な生活をしていました。

この様な仕事をしていたレビの心境はどうだったでしょうか？　同胞のユダヤ人に嫌われ、自分の存在が認められていません。どの様な人でも、自分の生きている価値が否定される事ほどつらいことはありません。せめて家族があればよいでしょうが、そうでなければまさしく天涯孤独です。ここに寂しさ、認められたい思いが、心の底にはあります。また、同胞ユダヤ人たちから多くの金を巻き上げ、自分ばかり贅沢な生活をしていたため、人々が生活苦を余儀なくさていた罪悪感もあります。しかし、彼は自分の生活のため、徴税人の仕事から離れることはありませんでした。

その様な中、主イエスはレビの前を通りかかり、レビに「わたしに従いなさい」と言われました。レビの場合、ペトロたち漁師の場合とは異なり、大きな決心をせざるを得ませんでした。漁師の場合は、イエスの弟子をやめても、もう一度漁師に戻れました。事実、主イエスと共にいる時など、ペトロたちは魚を取っていました。しかしレビの場合、徴税人を止めキリストの弟子になることは、二度とこの職業に戻れません。自分の生き方も変えなければなりませんでした。彼にとっては一大決心です。

しかしレビは何のためらいもなくキリストに従いました。それはなぜでしょうか？　レビは、キリストの「わたしに従いなさい」との言葉に、自らの今までの行いの罪を認めたからです。キリストに従うことは、過去の自分の罪を認め、悔い改めることを意味します。さらに永遠の希望と喜びが、聖霊の働きによって示されたのです。

キリストに従うことは、今までの生き方を一八〇度方向転換をすることであり、頭で理解してできますものではありません。キリストの言葉と共に聖霊が彼自身に働いたからこそ、決断できたのです。

キリスト者となることは、ある意味では単純です。神はあなたの罪を赦しすためにキリストを十字架に架けられました。それ程、神はあなたを愛しておられます。背を向け、神から離れ自分勝手な道を歩んでいるあなたを、神は憐れんでくださり、あなたが滅びの中に沈んでしまうことを好まれず、キリストと共に歩む生活へと示してくださっています。これがキリスト教の唯一の中心的なメッセージです。

レビはこの福音を聞きました。そして受け入れました。

「自分の生き方に誤りはない、間違っているとすれば社会が間違っている」と言い張っている間は、キリストによる真の救いはありません。自分の弱さ、間違いに気付き、悔い改め、キリストの赦しに寄り頼む時、救いが与えられます。

そしてキリストにより信仰が与えられると、レビが主イエス一行を持てなしたように、罪の赦しに対する感謝から奉仕を行います。奉仕は、課せられて行うものではありません。キリストがこの地に教会をお建てくださいます。それに参与できる感謝をもって仕えることです。教会は牧師だけでは建ちません。牧師・長老・執事・伝道所委員・会員がキリストの体を形成し、奉仕していくことにより、教会が成長していきます。

「断食は必要か？」　マルコ二章一八～二二節、ホセア二章一六～二五節

二〇〇一年九月一六日

九月一一日、アメリカにおいて、悲惨なテロ事件が発生した。主の主権を祈ります。今回の事件の被害者のため、ブッシュ大統領は、金曜日（一四日）を祈りの日とし、宗教を越えて、共に祈りました。同時に多くの人々が断食をしたことでしょう。

今日は断食の必要について考えますが、主イエス自身、荒れ野の誘惑を受けられるにあたり、四〇日間断食をされました。また、私たちの教会の礼拝指針においても、断食につ

いて記されており、断食を否定するものではありません。問題は、何のために断食を行う必要があるかです。

モーセがホレブ山にて主より契約の板を授かっている間に、イスラエルの民たちが堕落し鋳造（金の子牛）を作ったことに対して、悔い改めの気持ちを表すために四〇日間断食しました（申命記九章一八節）。他にも旧約聖書には断食の例がありますが、断食は深い罪の自覚と恐れをもって神に近づく者の熱心な祈りと悔い改め（ヨエル一章一四節）を表現し、断食の時に荒布をまとったり（詩編三五編一三節）、灰をかぶったり（エステル四章一節）することにより、自分の無価値、愚かさを表現します。

ではなぜ主イエスは弟子たちと共に断食をしなかったのでしょうか？　それはファリサイ人の断食に原因があります。彼らは週に二回（ルカ一八章一二節）断食を行っていました。彼らにとって断食は、罪を悔い改めるためではなく、断食をしている行動が、人々に認められることが目的でした。

さらに主イエスが断食をしない理由は、「今花婿が一緒にいる」と主イエスは語られます（一八～一九節）。彼らの目の前におられるイエス・キリストこそ、主であり、教会・クリスチャンの花婿です（参照・ホセア二章一八～二二節）。キリストは、「インマヌエル（神が我々と共におられる）」（マタイ一章二三節）であり、今も聖霊によって我々と共にいてくださいます。そしてキリストが私たちに平和をもたらし、平安・安らぎをお与えくださいます。キリストが我々と共におられることを典型的に表れすものが主の晩餐です。

花婿が奪い去られる時（二〇節）は、十字架の死によってもたらされすが、キリストは三日目の朝に復活され、死に打ち勝たれました。キリストが今も私たちと共におられることは、罪に満ちた私たちが、断食をして、自分自身で悔い改めても償え得ない罪を、キリストの御業によって、すでに償われ、赦され、そして神の子とされていることを指し示しています。

従って私たちの罪を償ってくださったキリストが、今私たちと共におられることを忘れ

て、断食を行っても意味がありません。キリスト教信仰とは、戒律に縛られ、形式に捕らわれるものではなく、罪が赦された喜びが溢れる所に行動が伴います。信仰はどこまでも自発的なものであり、神への敬虔と行為とは、自然に心から溢れ出、湧きでてきます。

神から喜び溢れる信仰が与えられるためには、古い生活に留まっていてはなりません。新しい生活が必要です（二一～二二節）。信仰は継ぎはぎ細工では成り立ちません。戒律に縛られました古いユダヤの宗教に、真新しい喜びに満ちた自由なキリストの宗教は、継ぎはぐことはできません。見かけばかりの戒律としかめっ面した生活ち、生き生きとした自発的な信仰は両立することがありません。これまでの古い自分、古い人の考え方や生き方を引きずりながら、その延長にキリスト教を付け足すようにして、信仰は成り立ちません。キリスト教信仰は、私たちを全面的に新しくし、新しく生まれ変わらせ、新しい生き方を始めることです。

キリストにある新しい命は、古い戒律に縛られていました生活の中に閉じ込めることができず、むしろそれを内側から破ってしまう力を持っています（二二節）。だからこと新しいぶどう酒、つまりキリストにある新しい命と信仰は、新しい器・新しい生活と生き方を必要とします。それは内側から喜びが湧きあがり、力が溢れでて、自由に神への賛美と感謝と奉仕に向かわせるものです。この新しい命は、部分的なものではなく、全面的なものです。

その発酵はずっと続けられて、ついにはおいしいワインになります。年を経るごとに円熟したおいしい味を出す古いぶどう酒のように、内側から少しづつ私たちを造り変えていきます。キリスト教信仰は、そのような力と命を持っています。これが聖化の歩みです。こうして私たちの「内なる人」が日々に新たにされ、「滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られました新しい人を身に着け」（エフェソ四章二三節）るように、私たちは変えられていきます。

「安息日の主」　マルコ二章二三～二八節、サムエル記上二一章一～七節

二〇〇一年九月二三日

安息日に弟子たちは歩きながら麦の穂を摘み始めました（二三節）。並列箇所マタイ（一二章一節）・ルカ（六章一節）では、積んだ麦の穂を食べたことまで記されています。道すがら人の栽培している農作物を摘み取り食します。現在では、そのこと自体が犯罪です。しかし当時は旅人を持てなす意味で認められていました（申命記二三章二五～二六節）。ところがファリサイ人はイエスにそのことを咎めます（二四節）。それは安息日に労働を行ったと見なしたからです。ファリサイ人は、ミシュナーと呼ばれる彼らの用いていた律法によって安息日にしてはならないことを規定していました。そこに「刈り入れ」が含まれていました。

ここで私たちは、安息日が何のためにあるのかを考えなければなりません。天地創造から考えてみます。神が人を創造され、祝福されました（創世記一章二六～二八節）。そして神は仕事を完成された後、第七の日には仕事を離れ安息し、その日を祝福し聖別されました（同二章一～三節）。もちろん人は安息日に主を礼拝することが求められていますが、同時に「人が週に一度は、忙しい日々の働きから解放され、ゆっくり休む」者として、主は人間を創られました。

それは十戒において安息日の制定（第四戒）を見ても確認できます。出エジプト二〇章八～一一節では、安息日を聖別し、主を礼拝する日であることが強調されています。一方申命記五章一二～一五では、罪の奴隷からの解放、つまり週日の働きにより、私たちが肉体的に酷使され、疲れ果ている状態から、解放される日として安息日が、制定されています。

ところが主イエスは、安息日の規定について論争されることはなく、律法の持っている根本原理を問うために、ダビデの例を語られました（二五～二六節、参照・サムエル上二

一章一節～）。ダビデはサウロにねたまれ、ついに命も狙われていました。彼は命さながらサウロの下を逃げ出し、ノブの祭司アヒメレクの下に行きます。アヒメレクの親がアビアタルであり、アヒメレクをアビアタルと記されましたのは、マルコが記す時に誤った結果ではないかと言われていますが、二人が同時に祭司として務めていたからかも知れません。その時ダビデは空腹でした。ところが祭司の家にはダビデに食べさせるパンはなく、神に備えるパン（レビ二四章五～九節）のみがありました。このパンは、祭司であるアロンとその子らだけが聖所で食べることができるものです。それ以外の人は食べることができません。ところが祭司たちは、これをダビデたちに食べさせました。このことは明らかに、レビ記の律法に違反していました。しかしこのことはファリサイ人たちも認め、許されている行為です。

つまり、安息日であろうと、人が苦しんでいる時、神はそのままでほって置かれるお方ではありません。苦しみを覚えている人がいる時、それを救い助けてくださるのが神です。主は、旧約時代にイスラエルに律法をお与えくださいました。そして私たちもまた、御言葉にある律法によって生きています。律法とは、ファリサイ人のように、人の律法違反を見つけ、指摘し、罰するためにあるのではありません。律法は、私たちを生かし、主の恵みを知り、主を信じて歩むために備えられました。本末転倒してはなりません（二七節）。つまり主イエスが語っておられることは、「神の目的は、人間に律法を押しつけることではなく、罪の中にある人間を救い、生きるものとしてくださる」ことです。キリストの十字架は、まさに罪人を救うためになされました。これによって私たちは生きる者とされました。

そして最後に主イエスは「人の子は、安息日の主でもある」（二八節）とお語りくださいます。キリストが、天地創造に携わり、律法・安息日を制定してくださったお方です。つまりイエス・キリストこそ、神そのもの、私たちを罪から救い、苦しい時には助けてくださる主であられます。

「安息日に許される事」　マルコ三章一～六節、エレミヤ一七章一四～一八節

二〇〇一年九月三〇日

ファリサイ人はずっと主イエスと共に行動し、言葉・行動を監視していました。ファリサイ派とは「分離する者」という語からくるあだ名だと言われており、安息日や断食、施しを行う事・宗教的な清めに関する律法を厳格に守ることにより、守ることができない人々を分離し、罪人と定めていました。つまり、彼らが主イエスを監視していたのは、主イエスの律法違反を見つけ、宗教裁判によって罪人として定めるためでした。

主イエスは、後に彼らの頑なさについて悲しまれていますが、これこそ罪人の持っている姿です。私たちは、頑なであり、人からの忠告・指摘を素直に聞き入れ、従うことができません。自分の行いが正しいと思うと同時に、正しいことが言われていると思いつつも、それを受け入れることにより自分が否定されているように思うからです。自分の誇りがあるからです。

ファリサイ人が主イエスの問（四節）に対して答えることができませんでした。そこには三つの理由が考えられます。①主イエスの行動を認めることになる。②自らの行っている律法の不備を認めることになる。③人を救うことより、人を苦しめている自分たちの姿が明らかになるからです。

主イエスは、その時、怒りを覚えつつ悲しまれました。それは主イエスが、彼らに自らの過ちに気が付き、悔い改めることを求めていたからです。主イエスは、十字架に架かられる時まで、律法学者やファリサイ人たちと論争されましたが、主イエスとしては決して彼らを敵対視していたのではなく、常々彼らが自らの過ちに気が付き、悔い改め、キリストを受け入れ、信じることを求めておられました。そして悔い改めが求められながらも、

それに従うことができないファリサイ人たちを見て、主イエスは悲しみを覚え、彼らを支配しているサタンに対して怒りを覚えられました。

主イエスは、手の萎えた人を癒されると同時に、今なお自らの殻の中に留まっているファリサイ人たちに悲しみを覚えられました。これこそ、私たち人間を愛しておられる主イエスの姿です。私たちは、今もなお、主イエスの愛に対して耳を閉ざし、主イエスのお語りくださろうとしている言葉に耳を貸しません。しかし主イエスは、それ以上に私たちを愛してくださり、手の萎えた人を癒されたように、私たちの罪を赦してくださいます。そのために主イエスは、私たち一人ひとりの罪を赦すために、十字架にお架かりくださり、死を遂げてくださいました。

しかし、このようなキリストの愛に対して、サタンの虜とされたファリサイ人は、ヘロデ党と一緒になります(六節)。ヘロデ党とは、ローマ支配にあったユダヤにあって、ヘロデ王の統治が行われるように願い、活動していた国粋主義者です。彼らにとってユダヤの王として来られた主イエスは邪魔な存在でした。彼らはあまり律法を遵守しないため、ファリサイ人たちからは嫌われていましたが、利害が一致し手をくんだのです。

人間は、頑なになればなる程、視野が狭くなり、手段を選ばなくなります。邪魔だと思う人を、抹殺することも止むなしとします。これこそ罪を支配するサタンの力です。サタンは、人を敵対関係に置き、憎み合わせます。

嫌な人を愛することは難しいです。しかし神は私たちを愛してくださり、罪を赦し、救ってくださいました。そして主イエスは語られます。「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子ですことを、皆が知るようになります」(ヨハネ一三章三四～三五節)。

教会とは、まさしくこういう場所です。そこに様々な人がいます。気のあう人もいれば、話しづらい人もいます。しかし、教会に集うすべての人たちを、キリストは受け入れてく

ださいました。罪を赦し、救いに招いてくださいました。そして互いに愛し合うように求めておられます。互いの罪、欠点を指摘し、非難し合えば、そこには愛は生まれません。互いの罪・欠点を互いに赦しあい、フォローしあっていく所にこそ、信仰共同体が存在します。

私たちの頑なな心を、開くことはとても難しいことです。しかし、この頑なな心の扉を開き、キリストの言葉を聞くことによって、信仰は生まれ、成長します。そして、互いの欠点も認め、フォローしていくことができますようになっていきます(エレミヤ一七章一四節)。

「あなたは神の子だ」　マルコ三章七～一二節、エゼキエル二八章一～一〇節

二〇〇一年一〇月一四日

主イエスと弟子たちは、安息日の礼拝の後、人目を避け、湖の方に行かれました(一節)。しかし、主イエスたちにはおびただしい群衆が従ってきていました(七～八節)。聖書巻末の地図六で確認できるように、そこに集まってきた群衆は、広範囲から集まっていました。中には、ティルスのように、異邦人の町から来た人々もいました。つまり主イエスの噂は、遠方にまで広まっており、また主イエスが御言葉の権威は伝えられ、病気を癒されることに対して多くの人々が関心をもっていました。

しかし主イエスは、ファリサイ人・ヘロデ党の人々から離れたように、群衆からも離れました。なぜでしょうか？　主イエスを救い主として信じようとする者にとって、主イエスの行動はがっかりしてしまうからです。

これには理由があります。第一に、時が来ていなかったからです。時とは、神の御子イエス・キリストが、十字架に架けられる時です。主イエスを十字架に架けたのは誰でしょ

うか？　直接的には、ファリサイ人・ヘロデ党員、律法学者たちです（参照・三章六節）。しかし最終的に主イエスを十字架に架けるための判断を下したのは群衆でした（一五章一一～一六節）。今主イエスに病の癒しを求めてきている人々が、今度は主イエスを殺しにかかります。ここに来た人々が、そのまま主イエスを殺すことに賛成したわけではありませんが、群衆はその時の感情によって態度を一変させます。同じ自民党内閣でありながら、支持率の低かった森前首相から小泉首相になった途端に、人々から指示されるようにもなるのです。現在のブッシュ大統領や他の為政者にしろ、常に群集心理をとらえつつ、政治することが求められています。祭司長や律法学者たちもまた、この時に既に主イエスを殺そうと相談し始めたにも関わらず（三章六節）、群衆を恐れ、なかなか主イエスを捕らえ、十字架に架けることはできませんでした（一一章一八節）。

しかし主イエスは、群衆によって十字架に架けられました。群衆、それは大勢です。私たちも、ここに登場する群衆同様、主イエスに救いを求める群衆の一人です。同時に、祭司長の先導によって主イエスを十字架に架けることに賛成もした群衆の一人でもあります。私たちは、周囲の人々が、主イエスを十字架に架けることに賛成している中、一人反対する勇気すらない、罪と同時に弱さを持っている群衆の一人です。

主イエスがここで逃げられた第二の理由は、宣教は主イエスお一人では行わないからです。すぐ後（三章一三～一九節）で主イエスは一二弟子を選ばれました。これは弟子たちに宣教させるためです。宣教は、信仰を受け継いだ者たちによって、引き継がれていく必要があります。主イエスお一人で、奇蹟を行われ、力強い御言葉を語られたとしても、宣教は、一部にしか及ばず、また子々孫々にまで伝えられることはありません。神は、すべての神の民を救うために、罪人である人間をお用いになる愚かな方法をとられました。それは、全世界・未来に救いが及ぶためです。

時として、宣教大会なるものが行われます。積極さは評価されるべきでしょう。しかしそうした大会において感情的に信仰を持ったとしても、信仰は長続きしません。時が過ぎ

れば、熱は冷め、信仰もなくなります。小さな教会であっても、説教者とそこに集う民が、顔と顔を合わせつつ、繰り返し御言葉が語られます。ここに聖霊が働き、福音が伝えられます。

主イエスが群衆に対して、一人で超自然的な事をし、群衆のすべてに奇蹟をなされたとしても、人々には信仰は生まれず、もとの生活に戻るだけです。そうではなく、主イエスはここで弟子たちを立てられました。信仰は一時の感情によって生まれるものではなく、目を合わせ、膝を交えて、語り合うことにより、初めて信仰は生まれます。

牧師は、礼拝で説教すると同時に、平日に教会に訪れた人々と、話し合い、信仰を伝える働きをします。同時に、教会に集うすべての信徒が、社会生活を通して信仰を語ることにより、宣教が行われ、教会が成長していきます。

汚れた霊によって「あなたは神の子だ」と語らせるのではなく、一時的な感情によって「主イエスこそ神の御子だ」と語らせるのではなく、大勢の中のただの一人かもしれない人が、御言葉を聞き、そこに聖霊が働き、十分にそれを受け入れ信仰を持った上で「主イエスこそ神の御子、救い主です」と告白する者を、主は求めておられます。

「十二弟子」　マルコ三章一三～一九節、出エジプト一九章一～六節

二〇〇一年一一月一一日

私たちは、今、神礼拝に参加しています。信仰の告白をしている・していないの如何に関わらず、礼拝に出席していることは、神によって召されているからです。「いや、自分の意志で来た」、「家族に、友人に誘われているから出席している」と語られる方もいるかも知れありません。しかし、そこに間違いなく神の霊の働きがあるのです。

今日のテキストでは、一二使徒が召されています。一二名は主イエスが「これと思う人

々」です(一三節)。彼らが優れていたからでも、これから立派な働きを予見したからでもありません。ペトロたちは漁師でした(一章一六～二〇節)。マタイ(レビ)は徴税人でした(二章一三～一七節)。シモンは熱心党員(一八節)です。つまりここには、あまり教養のないと思われる人々から、人々から嫌われる人、過激派の様な人たちもいました。また後に主イエスイエスを裏切ったイスカリオテのユダもいました。

神を信じことは、私たちの自発的行為に思えますが、それは神が一方的に私たちの心に働いてくださった結果、与えられる恵みです。「救われる人とそうでない人がいます。それは不公平だ」との声も聞きます。しかし、主なる神と私たちの関係を見据える必要があります。神は、天地万物を創られ、今もすべてを統治され、永遠の支配者であられます。一方人間は、神によって創造された被造物です。それも罪を持ち、死に向かっています。創られた存在である私たちが、創ってくださいました方に対して口答えができますのか？それはできないことです(参照・ローマ九章一四～二三節)。

「任命する」(一四節)とは、「創造する」意味があります。主に任命されることは、主によって創造されたことを意味します。つまり、今までの罪の中にあった自分は捨て去り、神が与えてくださった存在として、新たに歩み始めるのです(新生)。神に任命されるとは、生まれ変わり、神を第一に、神のご命令に従って生きる者とされることです。これこそが、被造物である人間の最も喜びであり、同時に神の喜びです。

使徒たちの役目は、①イエスのそばに置く、②派遣して宣教させる、③悪霊を追い出す権能を持たせるためでした(一四～一五節)。①③は使徒固有の使命ですが、②宣教することは、イエスの弟子(クリスチャン)すべてに与えられている使命です。主イエス御自身が宣教されれば、すべての者を神の国に招くことが可能でしょう。しかし主イエスは、そうされませんでした。二〇〇〇年の年月を経ても、この日本・諏訪に至るまで、全世界に御言葉が宣べ伝えられるよう、人に宣教の働きを委ねてくださいました(マタイ二〇章一八～二〇節)。宣教の中心は牧師です。しかし牧師一人で宣教は不可能です。主の召しによ

る救いは、同時に宣教の義務も与えられています。宣教は、救いの喜びによって生活することから始まります。喜びは隠すことができないからであり、それが伝道となります。

主イエスは一二名をお選びになられました。そこに、いろんな賜物・個性があります。様々な個性・賜物を用いて、様々な人々が神を知り、救いに入れられました。宣教は、全世界・次の世代に語り継がれていくことが求められ、様々な個性が必要です。様々な賜物・個性があるからこそキリストの教会は広がりを見せるのです。

このことは、ここに集う者の教会に来始めた経過が様々であることからも理解できます。家族・友人などの誘われた方、個人的に困難にぶちあたり教会に救いを求めてきた方……。しかしそこにはすべて、主のお働きがあり、聖霊の導きがあります。そして罪人でありながらも、主が召してくださった人々を通して、教会へ、信仰へと導いてくださいました。今、私たちをも主は救い・永遠の生命へと働いてくださっています。感謝して、これを受け入れ、喜びをもって日々歩んでいきましょう。これこそが、キリストの弟子としての宣教の働きです。

「悪霊を追い出す力」　マルコ三章二〇～三〇節、イザヤ四九章二二～二六節

二〇〇一年一一月一八日

私たちは、当然の如くに、毎週主の日の朝に教会の礼拝に集っています。しかし教会に来たことのない人からすれば、特別のことであり、驚きに値することです。今日与えられました御言葉では、主イエス自身が、伝道生活を始めたため、「あの男は気が変になっている」と周囲に言われ、家族も気が気でなかった様子が語られています(二一節)。

マルコ書では、主イエスが洗礼を受けられた時からのことが記されており、それ以前の生活は記されていません。主イエスが洗礼を受けられたのは三〇歳(ルカ三章二三節)です。

それ以前は大工をしていたことを私たちは知ることができます（六章三節）。ナザレ人大工のイエスがカファルナウムに来て、説教をし、奇跡・癒しを行っています。そのことがイエスを知る人々にとっては驚きでした。

律法学者は、その主イエスの行為を見て「悪霊の頭で悪霊を追い出している」と語ります（二二節）。それに対し、主イエスは答えられます（二三～二六節）。教会建設にしろ、何事を成し遂げるにしても、それに携わる人々の協力無くしては完成させることはできません。小泉首相は特殊法人改革を声高々に語りますが、内閣・国会・国民の協力なしには成し遂げられません。今そのことが危惧されています。

では主イエスが、本当にサタンの頭であればどうでしょうか？　悪霊に取り付かれている人から、悪霊を追い出すことはなく、さらに他の悪霊を呼び集め、多くの人々に取り付いていくはずです。悪霊を支配するサタンは、神の支配下にありますが、自分が支配者にならんと淡々と狙っています。この世に罪がはびこるのも、私たち自身に対して様々な罪を行わせようと働きかけるのも、このサタンの故です。しかし主イエスは、サタンの支配をそのままにされることなく、悪霊を追い出され、サタンの入る余地をなくされました。こうした力は、サタンに打ち勝つ力を持っておられる方しか行うことができません。つまり主イエスは、神御自身であられます。

さらに主イエスは語られました（二七節）。悪霊につかれると、自分でその悪霊を追い出すことはできません。強力な悪の力に縛りつけられて、自分でどうすることもできません。主イエスが言われる強い人とは、武装して自分の屋敷を守っている悪霊、サタンであり、その人の家とは私たち自身・私たちの心です。サタンは私たちの心を、あたかも自分の家の如くに占領し、支配し、そこに私たちを縛りつけ、虜にしています。だからこそ私たちの心の中で、善い事をしようとする意志と、それを妨げる意志とがあり、二つがいつも葛藤します。そして多くの場合、善いことをしようと思いつつ、結局はそれをすることができません。そして、悪へと心が流されることを自覚します。善への意志はあっても無

力で、かえってしたくない悪を行ってしまう自分の弱さを覚えます。まさに罪の虜と言わざるをえない有様です（参照・ローマ七章一五～二四節）。

そうした状態から解放してくださるのが、主イエスです（二七節）。ここから解放されるには、サタンを縛りあげ、この悪の力に打ち勝ち、打ち負かす以外に道はありません。神の大きな力と働きが、今ここで悪の虜となって雁字搦めとなっている私たちのところに来てくださり、罪の鎖を打ち砕いて、解放してくださいます。それだけが私たちが罪の力から救い出される唯一の道です。それは主イエスの十字架の死と死からの復活の故です。

私たちが罪から離れ、神の国を求めるためには、主イエスを救い主として信じ、すべてを委ねていくしかありません。そのために私たちは、主の日の朝に礼拝することが求められています。もしかすれば、私たちも「あの人は気が変になっている」と言われるかも知れません。しかし真実が提示され、罪の世界から解放してくださるお方は、主イエスに他ありません。ここに被造物である人間の最大の幸福・喜びがあります。感謝して、主に仕えていきましょう。

「イエスの兄弟」　マルコ三章三一～三五節、ゼファニヤ三章一六～二〇節

二〇〇一年一一月二五日

家族と離れている方もいるでしょうが、私たちは家族と一緒にいる時、気持ちの安らぎを覚える時だと思います。主イエスの家族はどうだったでしょうか？　主イエスの母はマリアであり、その夫はヨセフでした（マタイ一章一八節～）。しかしこの当時、ヨセフは既に亡くなっており、主イエスがヨセフの仕事（大工）を継いでいたとされています。また主イエスには弟たち、妹たちがいたことが知られています（マルコ六章三節）。

この時主イエスの家族は、まだ主イエスのことを信じていませんでした。主イエスは一

人、家族から離れ、カファルナウムで宣教活動を始められていました。そのことに対して不安に思った家族もナザレからカファルナウムに出てきました(三章二一、三一節)。家族にとって主イエスの行動を理解することができなかったため、主イエスの家族は、イエスのおられる家に来ても、中に入ることができませんでした(三一節)。

初めて教会の門をくぐるには、勇気が必要です。最近では、オウム真理教や統一協会の様な宗教もあり、中で何か行われているか分からないからです。主イエスの家族にとっても同じでした(二一節)。

しかし、キリストの宣べ伝えていた信仰は、決して気が変になっていたからではなく、人々に対して危害を加えようとすることもありません。そうではなく、これは福音です(一章一、一五節)。福音とは「良き知らせ」です。私たちは生きていく上で、最終的な希望・目的が分からずにいる中、キリストが伝えようとしている福音は、それを提示します。つまり私たちは、常に死の恐怖を避けて通ることができませんが、キリストの宣べ伝えている福音を信じる者は、死んでも生きます。神の子であるイエス・キリストが、この世で誕生してくださいました。これは遜りです。そしてその目的は、十字架に架かられるためでした。罪のないキリストが、十字架における刑罰の死を遂げられました。これは、キリストが私たちに代わって、罪の刑罰を負ってくださるためでした。そのためキリストを信じる者は、もう死を遂げることはありません。

私たちは肉体の死を遂げります。しかしそれは永遠の死ではありません。キリストは今、天におられますが、再臨され、肉体の死を遂げた者にも新しい体を与え、そして神の国(天国)に導いてくださいます。そして、そこに集う者は、永遠に神と共にあります。主御自身が、私たちを救いに導いてくださいます。私たちの恐怖を取り除き、永遠の生命をお与えくださいます。これは神から与えられた恵みであり、喜びです(参照・ゼファニヤ三章一九～二〇節)。

キリストは「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか。見なさい。ここにわたしの母、わ

たしの兄弟がいます。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」(三三～三五節)と語られます。つまりキリストは、神を信じるクリスチャンすべてが、私の母、兄弟・姉妹ですとお語りくださいました(参照・ローマ八章二八～三〇節)。つまりキリストを長男として、すべてのクリスチャンが兄弟・姉妹としての神の国の家族が永遠に与えられます。

週報を見ると、「～兄」「～姉」といったように記されていますが、これは教会に集うクリスチャンが、まさしく神の国の家族であることを証ししています。

キリストの兄弟・姉妹、それは、キリストの十字架の故に罪の赦しと救いを信じる者です。と同時に、神の御心を行う者です。教会を形成するのは、キリストの家族としての歩みです。私たちがそれぞれの家族の中で安らぎが得られると同時に、それぞれが与えられた役目を果たすからこそ、家族が円満になります。同じように、キリストの兄弟・姉妹である神の家族としての教会も同じです。それぞれ与えられました賜物を用いて、助け合っていく時、そこに教会が形成され、成長を遂げていきます。

「百倍の実り」　マルコ四章一～二〇節、ダニエル四章六～一五節

二〇〇一年一二月九日

主イエスは譬え話を語られました。私たちの感覚からすれば、譬え話は物事を分かりやすくするために語るものです。しかし主イエスの時代、譬えとは「謎を解く」ことでした。つまり謎を解くための鍵が必要であり、それがわからなければ譬え話を理解することはできません。主イエスの譬えで謎を解く鍵は「神の国」です(一一節)。

また主イエスは、譬え話の最初に「よく聞きなさい」と語られ、最後に「聞く耳のある者は聞きなさい」と語られます。主イエスの語られました譬え自体は、子供でも理解でき

る事柄です。だからこそ「神の国」というキーワードにより、そこにある神の国の真理、主イエスの語っておられる言葉の深さ・重さを、私たちは理解する必要があります。つまりそれは、①人間(私)の罪、②神の救い(罪の赦し・永遠の命)が示されていることであり、このことは聖書のすべての箇所で言えることです。このことを念頭に聖書を読めば、聖書は単なる文字ではなく神の福音となります。

主イエスはここで、種を蒔く人の譬えを語られます。当時は畑を耕すことなく、素に種を蒔いてから地を耕していました。群衆も主イエスの譬えを理解したことでしょう。しかし主イエスが語られたのは、農作業の方法ではなく、神の国・人間の救いです。そしてそのことを主イエス御自身が解き明かしてくださいました(一四～二〇節)。種を蒔く人はキリスト御自身であり、種は神の御言葉です。そして土地が、御言葉を聞く私たち自身です。つまりここでは私たちの御言葉を聞く姿が問われています。

この種蒔きの譬えの話しを読んでいる時、私は一つのことを思い出しました。私が大学生の頃、大学にあった聖書研究会において、ここのテキストを取り上げ、話し合っていました。その場で、互いに自分の御言葉を読む姿を考えることにおいてはよかったのですが、同時にこう言うことを言う人たちがいました。「私の今の状況は、石だらけの地だ」「いや私は茨の地だ」と。確かに自らの聖書の読み方の誤りが示され、改めていくことでは、そう言う答えも出てくるのかも知れません。しかし私たちはそうした読み方をしてはなりません。道ばたに落ちた種は鳥が来て食べてしまいます。石だらけの土に落ちた種は枯れてしまいます。茨の中に落ちた種は実を結びません。既に語ったように、譬え話は神の国の秘密が語られています。御言葉の読み方を考えるのと同時に、神の国がどんな所かが語られています。そうすれば、種が食べられ、枯れ、実を結ばなければ、その人は神の国にないことになります。神の国は、種の実りが集められる所だからです。言い換えますと、信仰を告白した人たちは既に良い土地としての実りが神から与えられています。

すると「自分は三〇人の人を導いたのか？まだできていない。まだまだだ」と思ってしまうかも知れません。しかし三〇倍・六〇倍・一〇〇倍の実りは、教会員の数といった数的な実りだけではありません。信仰そのものの実りです。救いにいたる御言葉がまったくなかった私たちに、神は御言葉を語られ、それを聴き、自らの罪が示され、神の救いを信じました。このこと自体が大きな実りです。無から実りがもたらされたのであり、それだけの成長が、すでに私たちに与えられています。

さらに御言葉に聴き、信仰の成長が遂げられていきます。そうすれば更に神の国にある喜びが信仰生活に表れてきます。キリストの十字架による罪の赦しと救われ永遠に与えられる神の国に感謝し喜んで生活をしていくことにより、私たちの存在そのものにより、主が証しされていきます。そしてそれが結果として数的にも教会の成長へとつながります。数的なことに云々語るのではなく、私たちはまず御言葉をよく聞くものであり。そうすることにより、私たちの信仰は百倍の実りをもたらすの成長が主によって与えられ、さらに主によって教会もまた百倍の実りが与えられていきます。

「神の国の秘密」　マルコ四章一～二〇節、エレミヤ九章九～一二節

二〇〇一年一二月一六日

主イエスは、譬え話を話される時、「よく聞きなさい」と語られました(三、九節)。それは主イエスの語られることが、神の国の秘密(奥義)だからです。つまり主イエスの話し、神の御言葉である聖書は、神の国(天国)を鍵にすれば、その真理を知ることができます。主イエスは、神の国が「秘密(ミステリー・奥義、秘められました計画)だ」と語ります。なぜならば、神は無限・不変・永遠の霊であられ、有限・時間的・部分的な人間にとって、神を自ら知ることはできないからです。この原因は、人間に罪があり、神との断絶があるからです。罪人である私たちは本来であれば神の存在すら知ることができません。従って、

神の存在・御計画を私たちが知るためには、神の啓示が欠かせません。

神の啓示には様々な方法があり、旧約時代には、顕現・夢・奇蹟、また預言者を立てられることなどによってなされました。しかし新約の時代の現代では、神の御言葉である聖書（旧・新約）のみが、私たちに与えられた唯一の神の啓示です。従って、私たちは聖書を通してのみ、神について、また神の救いの御計画について知ることができます。

しかし、それは奥義です。そのためにそれを説く鍵である神の国について念頭に読まなければなりません。そうすることにより、キリストの語られた言葉、そして聖書の御言葉が私たちの福音となります。

しかし誰もがこの神の国を理解して聖書を読むことはできません（一二節、参照・イザヤ六章九、一〇節、エレミヤ九章九～一二節）。エレミヤが語ることは、約束の民として神から御言葉を賜っていたイスラエルでさえ、主の御前に罪を犯し、異教宗教バアルに従った故に、主の裁きに遭い、バビロンに補囚とされていくことの預言です。彼らは、主なる神がいくら警告されても、それを理解し受け入れることはできず、神に対する罪の故に裁きを受けます。神の国の鍵を頂くとは、まさしく罪の裁きの故の永遠の死にあった私たちに対して、神がお示しくださった一方的な恵みです。

では「神の国」という鍵をもって聖書を読むとどうなるのでしょうか？　パウロは「神は、わたしの福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることがおできになります。この福音は、世々にわたって隠されていた、秘められました計画（奥義）を啓示するものです。その計画は今や現されて、永遠の神の命令のままに、預言者たちの書き物を通して、信仰による従順に導くため、すべての異邦人に知られるようになりました」（ローマ一六章二五～二六節）と語ります。またウェストミンスター信仰告白八章（仲保者キリストについて）は、第八節で「キリストがあがないを買いとられましたすべての人々に対して、キリストはそれを確実・有効に適用し、伝達されます。それは、①彼らのために執成しをし、②救いの奥義をみ言葉において、み言葉によって、彼らに啓

示し、③みたまによって信じ従うように有効に彼らを説得し、④み言葉とみたまによって彼らの心を治め、⑤キリストの不思議な、きわめがたい配剤に最もよく調和する方途で、キリストの全能の力と知恵により、彼らのすべての敵を征服することによってです」と語ります。つまり神の国の秘密が、私たちに明らかになるには、キリストの働きと御霊の介在が欠かせません。

私たちは、アドベントを迎え、二〇〇〇年前に御降誕されたイエス・キリストを覚え、心からの喜びを覚えます。それは何故しょうか？　神の御子の御降誕により、私たちはキリストにより御言葉が与えられ、御言葉によって神を知るようになり、またキリストの十字架と復活により、私たちは罪が赦され、神との和解がもたらされ、神の国を獲得するものとされたからです。またキリストのこの世での生涯を通し、私たちは主なる神の聖・義・真実・愛に満ちた生活が、示されているからです。

そして私たちは今、聖霊なる神により、キリストと共にあります。だからこそ神の国の秘密が、御言葉として語られた時、それを解く鍵が、聖霊の働きにより、私たちに示され、私たちは神が共にいてくださり、神の恵みが与えられていることを知ることができます。神の秘められた計画が私たちに示され、私たちも神の救いに入れられ、今もなお神が共におられることに心から感謝し、日々歩み続けたい。

「あらわにされるもの」　マルコ四章二一～二五節、エゼキエル三三章一〇～一一節

二〇〇一年一二月三〇日

現代社会では、夜でもライトの明かりがあり、本当の闇夜を失ったのではないかと思われます。しかし主イエスの時代はそうではありません。夜になると闇夜でした。そのため、小さなともし火であろうとも大きな光でした。そして人々はともし火の用い方を、生

活の知恵として知っていました。できる限り部屋全体を灯せるようにともし火を置いたのです。

もちろん主イエスは、生活の知恵を教えたのではありません。主イエスの譬え話は、神の国、つまり救いに繋がることを語られています。

光と闇の存在は、周囲に光と闇の双方があって初めて理解でき、闇を失った現在では理解しにくいことであるかと思います。この日本で、キリストの救いが語られる時、本当の光・闇が提示される必要があります。

教会での礼拝は、ひっそりと隠れて行われているように思われるかもしれません。確かに、様々なメディアを通じて、神の御言葉が伝えられる必要があります。また、現代社会に、訴えていく力ある言葉を持たねばなりません。しかし同時に求められていることは、キリスト者が救いの喜びに満ちて生きることです。キリスト者は、キリストの十字架の死と復活により、すでに闇の中にある罪から解放され、罪が赦され、永遠の生命が与えられているからです。

ウェストミンスター小教理問答問一は「人間のおもな目的は、神に栄光を帰し、永遠に神を喜ぶことです」と語ります。私たちキリスト者は、主なる神により救われることにより、生きる希望が与えられました。このことに感謝をもって生きることにより、神の栄光が私たちの体を通して人々に光として照り輝きます。

伝道は義務ではなく、結果です。エホバの証人の伝道は救いを獲得するための義務であり、偽善です。私たち自身が、罪の赦しと永遠の生命の希望に生きていることで、希望の光を携えているのであり、人々に対して神を証ししていることとなります。「隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものは」ありません(一二節)。闇夜を照らす光は、たとえ小さくても目立ちます。私たちの信仰は小さくとも、神の命の光は灯し、神の栄光を表します。

そのために、私たちは御言葉に聞き続けることが求められています(一三節)。ウェストミンスター大教理問一六〇ではこのように語ります。

御言葉の説教を聞く人々に求められているのは、

[第一に] 勤勉さと準備と祈りをもって説教に耳を傾けること、

[第二に] 聞いたことを聖書によって吟味すること、

[第三に] 真理は神の言葉として、信仰・愛・謙遜・素直さをもって受け入れること、

[第四に] 神の言葉について瞑想し、語り合うこと、

[第五に] 神の言葉を心に蓄えること、

そして[第六に] 生活の中でその実を結ばせることです。

労働についている者は、疲労を抱え、礼拝に集っていることかと思います。しかし、礼拝を通して、主は私たちに霊的な力・蓄えをお与えてくださいます。

主は、未だに神のことを知らない人たちに対しても、この光である御言葉が輝き、罪の悔い改めと永遠の生命を求めることを、切に求めておられます(エゼキエル三三章一一節)。そのためにも、私たちが更に御言葉に聞き、そこで語られるキリストの十字架と復活による罪の赦しと永遠の生命の希望と喜びに満ち溢れ、神の栄光が私たちの内からほとばしるものであり続けていきたいと願います。

「著しく成長する種」　マルコ四章二六～三四節、ヨエル四章一三～二一節

二〇〇二年一月一三日

マルコ福音書では、「種蒔きの譬え」(四章一～九節)と共に、「成長する種の譬え」(二六～二九節)、「からし種の譬え」(三〇～三二節)と三つの種に関する譬えが語られています。最初の譬えでは、蒔かれる土地に目が向けられ、神の御言葉を受け入れる態度の違いについて語られていました。次は種自身の成長力に目が向け、最後はその種の成長の

著しさに目を向けています。つまり最初は、信仰が与えられ救いを獲得する私たち自身について語られ、今日の二つの譬えは神の側では、どのように私たちに救いをもたらし、神の国を完成してくださるかが語られています。

私たちは植物を育てようとする時、毎日水をやり、温度調節をし、肥料をやり、雑草や虫の駆除をするなど小まめに手入れする必要があります。そうすることにより、豊かな実りが結ぶことを確信します。しかしいくら丹念に手入れをしても、その種自身に生命力が無ければ植物は育ちません。種が腐っていては芽は出ません（成長する種の譬え（二六ｂ～二七節））。私たちの信仰も同じです。私たちは自分自身の力で信仰を獲得するのではありません。私たち自身が主役ではなく、神が主役です。信仰の種をお与えくださるのは主なる神です。私たちは雲に隠れている太陽がどこにあるのか知ることができないように、罪に隠れておられ、人は神を知ることができません。人が神を求めることもありません。そこに誘惑があり、現実に様々な罠に引きずり込まれていきます。そうした状況の中、私たちは信仰の種を、つまり神を知り神を信じようとする心を、主なる神によって聖霊を通して与えられます。そして私たちは、聖書を読み、教会に行き、神を信じるよう変えられていきます。一見それは私たちの自発的行為のように思えますが、これらの行為は、主なる神が私たちに信仰を与え、育て養ってくださる栄養によります。そして救いの喜びが与えられます（参照・ローマ八章二九～三〇節）。神が前もって私たちのことを御存知であられ、手を差し伸ばし、罪の赦しと永遠の生命に予め御計画くださっていたからです（同二九）。神からすれば、予め救いに御計画した者が信仰を持ち、神を信じて歩み、豊かな実りをもたらすことは、必然です。だからこそ私たちは、信仰や救いを疑うことなく、安心して、主なる神を信じて歩んでいくことができるのです。

からし種の譬え（三〇～三二節）で出てくるからし種は、私たちには馴染みのない植物ですが、イスラエルの人々にとっては一般的な植物でした。種はわずか一ミリ位の小さなものですが、蒔いて一年もすれば二～三ｍにもなり、すぐに鳥が巣を作ることができる位の

大きさに育つ植物です。従ってこの地域の人々は、小さなものが大きく育つものの代名詞として、からし種が用いていました。

つまり私たちの信仰が、主によって養われ、成長させられていくことと同時に、私たちの教会の成長もまた、主によって成し遂げられていくことを意味しています。イエス・キリストが十字架の死と復活を成し遂げられ、天に昇られました時、弟子たちは一二〇人ほどが一つになって祈っていました（使徒一章一五節）。小さな集団です。そこに聖霊が与えられることによってキリスト教会が成立します。ここから迫害と殉教の歴史が始まります。しかしキリスト教会は成長を続けます。上諏訪湖畔教会もその一つの枝です。人間的に見れば、小さな教会であり、伝道の難しさを覚えます。しかし私たちは、主なる神を信じて歩むことができます。この御業を行うのは、私たち自身の力ではなく、主なる神の力だからこそ、教会は成長を続けることができます。

私たち自身に与えられる信仰の成長、そして教会に与えられている大きな実りを信じて、祈り続けましょう。

「自然の支配者」　マルコ四章三五～四一節、ヨブ三八章一～一一節

二〇〇二年一月二〇日

主イエスは「向こう岸に渡ろう」とされました（三五節）。主イエスは新しい日（当時は日没で日付が変わる）に新しい場所で宣教を開始されようとされました。対岸（デカポリス地方）は異邦人の住む、宣教がいまだにされていない地です。

弟子たちは主イエスと共に舟を出しましたが、突風により行く手を阻まれます。弟子の中には、漁師のペトロたちがいました（一章一六～二〇節）。突風が発生することが分かっていたら舟は出さなかったでしょう。彼らは舟を出しましたが、この突風に対処すること

ができませんでした。災難は突然発生します。不幸や災難に遭うのは、不信仰だからではありません。先日一月一七日を迎えましたが神戸の大震災も、犠牲になられた方々が不信仰だったのではありません。震災を目の当たりにした私たちの信仰こそ問われています。

突風により、漁師である彼らの自信が失われました。彼らは自らの技術で対応できませんでした。私たちは自分の知識や技術を信じて行動することにより、問題が発生してもその範囲で解決しようとします。それは知識・技術の過信です。聖書を現代の自然科学の範囲で読むと、処女降誕・奇蹟・復活・昇天など超自然行為を否定することとなります。化は、自然科学の中で働かれるのではありません。神が天地万物を創造され、治め、自然秩序を形成されました。だからこそ奇蹟も、神だからこそ可能です。私たちは価値基準を混乱し、神の御力を過小評価してはなりません。弟子たちは、突風が吹き抜け、舟の舵取りをすることすらできなくなり、神である主イエスを忘れた状態にありました。

その中、主イエスは寝ておられました(三八節)。弟子たちには苛立ち、主イエスを起こすと、主イエスは風に命令され、風はやみ、凪になります(三九節)。自然が自然法則通りに動くには、神がそう定められたからであり、主イエスが自然に対して言葉を語られ、命令に従わせることは可能です。弟子たちは、自らの技術を確信するあまり、神であられる主イエスがそばにおられ、自然を支配しておられることを忘れていました。

ヨブは無垢で神を畏れ、悪を避けて生きていました(ヨブ一章一節)。主はサタンに、ヨブに対して試練を与えることをお許しになられます。ヨブは家族・財産をすべて失い、ヨブ自身もひどい皮膚病に陥ります(ヨブ一～二章)。ヨブ記は、三～二六章でヨブと友人たちとの論争を語り、二七～三一章でヨブの独白があります。彼自身、神を信じて忠実になっている自分を弁護し、その殻に閉じこもっていました。そのことに対して主なる神がすべての支配者であられ、ヨブであっても、主の御前には知識もなく小さい人間に過ぎないことを語られました(三八～三九章)。ヨブは自らの高慢を打ち砕かれ、自己の知識の限界を認めざるを得なくなります。そしてヨブは、神の全能性と統治能力、自分の無知を告

白するに至ります(四二章二～六節)。

私たちは、自らの知識・技術を過信してはならないように、神に対する信仰を過信してはなりません。神から与えられた恵みとしてではなく、自分で勝ち取ったものと思ってしまうからです。

私たちは今、教会で礼拝を守っている時、家庭礼拝、個人礼拝をしている時、神がそばにいてくださることを確信します。しかし、日々の働きに仕えている時、自分の技術・知識を全面的に信頼し、神のことを信じているようであって、実際には神を忘れてしまうことがあります。自らの信仰を過信している証拠です。そして対応できない事が発生した時、混乱してしまいます。弟子たちと共に主イエスが一緒におられたように、私たちと共に今ここに主イエスがおられます。私たちは、直接主イエスを見ることはできませんが、聖霊を通して、私たちを見守ってくださり、私たちの必要を満たしてくださいます。困った時の神頼みでよいのです。ただ全面的に主なる神に委ねる心が必要です。

主イエスは聖霊を通して私たちと共におられます。神は私たちが耐えられないような試練を与えられる方ではありません(Ｉコリント一〇章一三節)。御手によってお守りくださいます。試練を通して、更に信仰を強くしてくださいます。一見、時間のロス、遠回りのようにも見える時があります。しかし、主はそれを良しとしてくださいます。

「悪霊を追い出す主」　マルコ五章一～二〇節、ヨブ二一章七～一六節

二〇〇二年一月二七日

現在、経済が崩壊に向かい、秩序も乱れ、自己中心的な犯罪が多発しています。社会に対して拒否をして、引きこもる人たちも増加しています。

一方、犯罪を犯し不正な富を得ても裁かれることもなく、悠々と暮らしている人たちも

いるようです。ヨブ記の嘆きの如くに「本当に神はおられるのだろうか？神の裁きは彼らにあるのだろうか？不公平ではないか？」（ヨブ二一章七～一六節）と思ってしまいます。

主イエスたちは、カファルナウムの対岸ゲラサ人の地に到着した。着いたのは夜遅くでした（四章三五節）。カファルナウムでは、主イエスの御言葉を聞き、奇蹟に与るために多くの人たちが集まっていましたが、ここは異邦人の町であり、一人（悪霊に取り付かれた人）を除いて誰も主イエスの所には来ませんでした（五章二～五節）。現代社会で悪霊の働きを考える時、犯罪や引きこもりを行う人と一緒に語ることはできませんが、まったく別物と考えることはできないのではないでしょうか。

汚れた霊は墓場にその人を住まわせます。そして人との交わりを断ち、目の前にいるすべての人を敵対視します。そして誰も彼を鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできませんでした。彼はある意味で力持ちです。しかし、悪霊が彼にこれだけの力を与えたと言っても過言でありません。縛っておかなければ、何を破壊し、社会に混乱をもたらすか分からない状態にありました。現代社会では「自分さえよければ、他人に迷惑さえかけなければ」と言った人たちが増えていますが、本当に悪霊に取り付かれた状態に置かれれば、自分すらも顧みない状況に追い込まれ、夜昼もなく、破壊行動に走り、また叫び続けます。これは、その人自身の本質から来るものではなく、そこに、悪霊の力が働いている結果といえるでしょう。このサタンの力は、二千頭もの豚を死に向かわせる力を帯びています（一三節）。このように、サタンは人に入り込み、人を混乱させ滅びへと向かわせます。

さらに悪霊は、神を知っています（六～七節）。本当の敵である主なる神を知っています。従って神に隠れて、弱い者、つまりサタンに打ち勝つことのできない人間に対して攻撃を仕掛けてきます。

キリストは、自然を従わせられたように（四章三五～四一節）、悪霊をも従わせられます。世に満ち溢れている悪霊、社会を崩壊に向かわせ無秩序にしようとする力に打ち勝つことのできるお方はキリストだけです。現代の日本、滅びに向かっているように見えますが、

キリストは、勝利をおさめることができるお方です。

この男は正気に戻ります（一五節）。男の内にいるサタンが、キリストによって滅ぼされ、男はキリストの加護に置かれました。この時、彼は社会を破壊する者から、社会を形成する者へと変えられます。神が天地万物を創造され人間を創られた目的は、この世界において神の国を完成させるためです。彼はその目的を達成する者へと変えられたのです。

ところで私たちは、このテキストにおいて聴衆になっていないでしょうか？　人々が恐ろしくなったように、私たちもただ眺めているだけではダメです。汚れました霊に取り付かれた人こそ、キリストに出会う前の私たち自身の姿です。サタンは目に見えませんが、サタンの力は強大であり、私たち自身が勝利をおさめることなど到底できない力を持っています。サタンは巧みに私たちの内に入りこみ、善良そうにいかにも自分は神に仕えている姿をして、神への信仰を疎かにし、サタンの企みに引き入れようとします。まさしくこれは私たち自身の姿です。私たちはこのことを自覚しなければなりません。キリストによる救い、キリストによるサタンの勝利が、私たちに与えられなければ、私たちは正気に戻ることができません。

私たちは、キリストによって守られ、キリストの十字架と復活によるサタンに対する勝利が与えられているからこそ、今ここにあり続けることができます。だからこそ、社会に対して傍観者であり続けることはできません。キリストによって与えられた救いに感謝し、喜びつつ、それを携えて歩み続けることが求められています。

「あなたの信仰」　マルコ五章二一～四三節、レビ一五章二五～三三節

二〇〇二年二月一〇日

主イエスと弟子たちは、カファルナウムに戻ってきました。すると再び群衆たちが押し

迫ってきます。ここに会堂長ヤイロと出血の止まらない女が登場しますが、彼らの共通性と群衆との違いに目を留めなければなりません。

女は一二年間も出血の止まらない状態にありました。出血が止まらない病は、汚れた者とみなされていました（レビ一五章）。つまり彼女は人々から隔離されました状態にあります。さらに医者に財産もむしり取られ（二六節）、人間不信もありました。痛み・孤独・不信、さらに死の恐怖もあったでしょう。彼女は様々な油断を用いますが解決を得ず、もう何もすがることができない状態にありました。そこで最後にたどり着いたのが主イエスです。藁にもすがる思いでした。

彼女の主イエスへの思いは信仰とも言えないもでした。しかしこの熱心さが私たちの信仰にも求められています。現代日本に生きる私たちは、何の不自由もない生活が与えられています。すると自分は思ってもいなくても、「日用の糧を今日もお与えください」との祈りが、全身全霊から出てこないものとなる弱さを私たちは持っています。彼女のように神にすべてを委ね、最後の手段として神に求める心が、私たちにも必要です。

彼女は、癒していただけるのであれば主イエスでなくてもよかったことでしょう。また「主イエスの服にでも触れればいやしていただける」との思いもありました。さらに自分一人では主イエスの前に立つことはできませんでした。群衆のどさくさに紛れて、主イエスの力に与ろうとしました。先日、ホームレスの男性が中学生何人かによって暴行を受け、亡くなる事件がありました。一人ではできないことが、集団になるとできてしまいます。責任を逃れ、曖昧にする力がここにあります。現在の外務省や雪印の問題などもこの責任を曖昧にすることから起こっています。これは日本人に特に強い性質といえるかと思います。彼女も同じでした。しかし主イエスは、彼女を見つけ、そして生かし信仰をお与えくださいました。彼女は失うものはないため、主イエスへの信仰がすべてです。私たちにとっても主イエスへの信仰が最後の手段であり、他に頼るものはありません。

主イエスは、彼女を誰にも気付かれずに立ち去らせることをされず、自らの口で告白させます。群衆の中、誰も彼女には気が付きません。しかし主イエスは、彼女を知っておられ、捉えていてくださいました。その病も苦しみも孤独もです。彼女にとって主イエスが、単なる奇蹟を行い、癒してくださる素晴らしい人で終わらせることなく、全人格を捉え救いに導いてくださる主なる神であり、唯一信じることのできる方であることを、彼女は示されました。主の御前に出るのは、彼女のように、震えながら、恐る恐るで構いません。しかし主は信仰に値しない信仰を、人前で告白する揺るぎない信仰へと導いてくださいます。

神が私たちにお与えくださる信仰は、神を信じればよいのではありません。自分の心の中でのみ満たされていればよいものでもありません。もう捨て去るものはないとの思いで、すべてを神に委ねる信仰です。

信仰をお与えくださったのは主なる神です。主イエスは最後にお語りになられます。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい」（三四節）。神にすべてを委ねる信仰が与えられた時、何も恐れる必要はありません。彼女をどん底から救ってくださる神が、私たちのすべての必要を満たしてくださいます。

「死人の復活」　マルコ五章二一～四三節、サムエル上二章一～一一節

二〇〇二年二月二四日

キリストの復活は、神を信じていない人たちは信じることができず、躓きの教理です。死によって終わりだと考えているからです。仏教には輪廻の思想がありますが、輪廻は、生まれ変わることです。そこには肉体の死を迎えた者が生き返る希望はありません。そのため息子・娘・孫・子孫に生まれ変わることに慰めを求めます。つまり死んでしまえば、

何も残りません。しかしキリスト者はキリストの復活を否定しません。キリストの復活にこそ、我々の罪の赦しと永遠の命の希望があります。

今日の御言葉では、会堂長ヤイロの娘の蘇生が語られています。ヤイロは主イエスを救い主として信じていました。そして娘の死に直面して、最後の手段として主イエスに助けを求めます(二三節)。

しかし、ここに長血の女が割り込んで来ました。そして主イエスは、ヤイロのことを忘れたかのように彼女に対応しました。ヤイロにとっては一刻を争うことであり、気が気でありません。彼にとって、娘が生きていれば、主イエスによって助かるとの思いがあったかと思います。しかしこの時、娘の死の知らせが届きます(三五節)。

しかし主イエスは、その時、彼に対して「恐れることはない。ただ信じなさい」と言われます(三六節)。私たちが主イエス・キリストを救い主と信じる信仰は、ここにあります。肉体は、早かれ遅かれ死を迎えます。しかし主イエス・キリストを信じる信仰は、肉体の死によって終わるのではなく、死から救い出される希望があります。

事実主イエスは、ヤイロの家に行き、死を遂げた娘に、手を取って、「タリタ、クム」「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」と語られることにより(四一節)、娘は甦りました(四二節)。主イエス・キリストを信じるとは、眠っていた者を起こすように、死んだ肉体を生き返らせてくださり、命をお与えくださる方を信じることです。つまり、肉体の死を迎えたらすべてが終わりという考えはここにはありません。

「クリスチャンが死んだからと言って、生き返った人の話しは聞いたことがない」と言う人もいるかと思います。しかしヤイロの娘は生き返りました。さらに主イエスもまた、十字架の死から三日目の朝に甦られました。主イエスは、罪の刑罰としての肉体の死に打ち勝たれました。主イエスを信じる者は、キリストが復活されたように、最後の審判の時に復活させられ、神の国の祝福に与ります(参照・ウェストミンスター小教理問三七、問三八、Ⅱテサロニケ一章七～一〇節)。だからこそキリスト者が肉の死を遂げ、葬儀を行

う時、親しい人との別れの悲しみがありますが、地上の生涯を遂げ、神の御許に入れられ、神の祝福に入れられたこと、天国での再会の希望があるために、平安があります。

ヤイロの娘の甦りと長血の女の癒し、ここに共通点があります。彼ら自身は、ただキリストを信じて、より頼んだだけです。主イエスは自らの力では何もできず、すべてをキリストに委ねて来た二人を癒されました。

神は、まず私たちを救い、永遠の命の約束をお与えくださり、その上で私たちの貧しい信仰を、これこそあなたの信仰だと認めてくださいます。現代の私たちには、普通の生活において満ち足りており、逃げ道があります。しかし、誰も肉体の死を免れることができません。そして主なる神が、信じる者に救いをもたらしてくださいます。神はすべてを御支配になられています。私たちに与えられているすべてのものも、主からの恵みです。最後の最後の手段として、主イエスを求めたヤイロや長血の女のように、私たちもまた神にすべてを委ねる信仰が求められています。私たちにとって他に頼ることのできるものはありません。日々の生活において必要が与えられていること、罪の赦しと永遠の生命の希望が与えられていることに感謝しつつ、そこにある希望の喜びを持って、日々歩み続けていきたいものです(サムエル上二章六～一〇節)。

「失うもの、得るもの」

マルコ六章一～一三節、箴言四章一〇～二七節

二〇〇二年三月一〇日

私たちは、地域・社会・職場・学校など様々な場での交わりを行います。そしてそれらの交わりにより、交わる人たちには自分自身の長所も短所もすべてが知られています。主イエスもまた、大工ヨセフの息子としてナザレにおいて暮らしておられました。ここは小さな村です。従って村人は主イエスのことをすべて知っていました(三節)。箴言四章で語

られるように、父親が子どもを諭すように、主イエスも地域の人たちからも教育をうけて育ちになられました。

ところが村に帰って来られた主イエスは、安息日の礼拝で人々に教え始められ、奇跡を行われます。そのことに対し人々は驚きます(二節)。彼らにとっては、小さい時から知っている大工の跡継ぎイエスに過ぎず、神の御子として語られる主イエスを信じることができませんでした。そのためこの地では、主イエスは人々を癒されたりすることをほとんど行うことができませんでした。奇跡は、長血の女・ヤイロの娘で示されたように、彼ら自身の信仰します。ただごくわずかの病人が癒しただけです(五節)。五章の初めでゲラサ人の地方でもただ一人信仰が与えられました。つまりどれだけ宣教にとって困難な地であっても、主を信じる者が与えられていくことを聖書は語ります。日本も諏訪も伝道困難です。しかし不毛の土地ではありません。極僅かかもしれませんが、ここに神の民はいます。そこで宣教する使命が私たちには与えられています(参照・マタイ二八章一八～二〇節)。

また私たちは、御子イエス・キリストの遜りを覚える必要があります。神の御子が人となられ、人々と共に育たれました。このことを通してキリストは、私たちの苦しみ・悲しみ・悩みのすべてを御存知であられます。そしてキリストは、苦しみの中にある私たちを救ってくださるために、十字架と復活の御業を成し遂げてくださいました。ここにあるキリストの愛を私たちは伝えていく使命が与えられています。

一方、主イエスはその後、十二弟子を宣教に派遣されます。そして弟子たちは多くの人たちから悪霊を追い出し、病人を癒します。私たちは主イエスの言葉を信じた弟子たちに目を留める必要があります。ナザレの人々は、主イエスを大工の息子と思い、神の御子を信じることができませんでした。教会における躓きも、牧師や会員の欠点・弱さが原因となります。しかし宣教は、私たち自身を見て頂くのではなく、私たちに働かれるキリストを見て、そして信じることを伝えることです。そして人に躓くのではなく、その人の持っている弱さを認め、受け入れ、キリストが示されることが求められています。このことは

主イエスが、弟子たちを二人づつ派遣されたことからも言えます。一人であれば、もろに個性が出て、宣教は個性によって非常に左右されます。罪も前面に出ます。しかし二人であれば、そこで共通して語られるみ言葉の真理を見ることができます。そして互いの弱さを補いつつ、助け、励まし合いつつ行うことができます。

日本では、無牧の教会も増え、複数の伝道者がチームを組んで伝道することはできません。しかし私としては、こうした伝道に力があると思っています。甲信地区が一つの教会の如くに四人の教師が四つの教会を相互牧会、チーム伝道ができれば、宣教にも変化が起こるのではないかと思います。中会とは、複数牧師・複数長老であり、もっと密接な中会がなることにより、チーム伝道が可能となり、大きな力を持つものと思います。

主なる神がお与えくださる信仰、それはまさにみ言葉を語る人に注目すれば、躓きとなり、受け入れることができないこともありますが、語られたみ言葉を受け入れ、み言葉に従う者には、信仰が備えられます。み言葉を語る人を見て、躓き、信仰を失う者ではなく、語られるみ言葉に聞き、従い、主からの信仰を得る者となっていただきたいです。

「イエスは誰？」　マルコ六章一四～二九節、マラキ三章一九～二四節

二〇〇二年三月一七日

「イエスは誰か？」このことが人々の間で噂されていました(一四～一五節)。ところがヘロデ王は、主イエスを恐れました(一六節)。自らの罪が暴かれること、そして洗礼者ヨハネを殺したことを咎められることを恐れたからです。ヘロデは義兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚したため、そのことがヨハネによって咎められていた(一七～一八節)からです。

人間は自己保身します。そして、自分の罪を露わにしようとする者・自分の地位を奪お

うとする者に対して、命を奪うことを企みます。ヘロデの父ヘロデ大王は、二番目の妻マリアンメ一世を一番愛しており、彼女の二人の息子を跡継ぎにしようとしていました。しかしマリアンメ一世が自分を中傷しているとの噂がたつと、彼女を処刑しました。さらに「二人の王子が父の命と王座とを狙っている」という訴え聞くと、彼らを処刑しました。さらに主イエスがユダヤ人の王としてお生まれになられた時に、ヘロデ大王は、王位が奪われることを恐れ、ベツレヘム中の二歳以下の男の子を皆殺しにしました(マタイ二章一六～一八節)。

そしてヘロデはヨハネを殺しました。それは彼自身の思いではありませんでした(二〇節)。ところが妻ヘロディアはそうではありません。ヨハネが自分たちに対し、罪を指摘していることに、憤りを覚えていました(一九節)。彼女が勝手にヨハネを殺すことはできず、その機会を狙っていました。そしてヘロデの誕生日に、ヘロデを用いてそれを実行しました(二一～二八節)。ヘロデも自らの面子と妻・娘に対する愛の故にヨハネを殺害しました(二六～二七節)。

洗礼者ヨハネの死は、新約の時代における世の統治者がキリスト者を迫害する歴史の幕開けです。権威者は何らかの形で隠しておきたい罪が潜んでいることが多く、キリスト者はそれを指摘し続け、迫害・殉教の歴史を重ねてきました。第二次大戦中の日本政府も、日本・韓国・朝鮮のキリスト教会を迫害しました。そこで問われたのは「天皇とは誰か？」「イエスとは誰か？」です。天皇こそがすべての統治者であり、イエスはその従属者に過ぎないと認めると、信仰が許されました。そのためキリスト教会の礼拝で宮城崇拝を行い、日の丸を掲げ、讃美歌として君が代を歌いました。そして神社参拝が強要されました。イエス・キリストこそ唯一の真の神であることを主張する者に虐げが行われました。

人間とは、自らの地位・名誉・権威を守るためには、人を殺すことすら行います。ここに人間の罪があります。そして彼らが守ろうとしている地位・名誉・権威は、地上の生涯の中においてのみ有効です。だからこそ人を死に追いやれば、自らの名誉は保証されると

考えます。

そしてヨハネ・十二弟子・そして多くのキリスト者が殉教の死を遂げていきました。しかしキリスト者は敗北していません。キリストの十字架における罪の赦しと永遠の生命があるからです。そして私利私欲に富む権力者は神の裁きに遭います(マラキ三章一九～二〇節)。

「イエスとは誰か？」ナザレのイエスこそ、主なる神御自身であり、キリストー救い主です。主なる神は、地上の統治者であられ、私たちのすべてのことを御存知です。すべての者が、地上における私利私欲における罪に満ちており、すべての者が、永遠の死に値する判決を受ける存在です。しかしナザレのイエスこそ、私たちの真の救い主であることを信じ、また主イエスによって示されました神の正義を貫く者に、主は永遠の生命を約束し、神の豊かな祝福をお与えくださいます。

「主イエスの養い」　マルコ六章三〇～四四節、アモス八章九～一四節

二〇〇二年三月二四日

教会でもどこでも、何かの行事を行う場合、場所・日程の選定と共に重要になってくるのが食事の問題です。食事を出すのか、出さないのか……。私たちにとって、食事をとることは重要な事であり、食事によって心が豊かにも、貧しくもなるからです。

主イエスと使徒たちは、食事をとる時間もなく働いていたため、人里離れた所で食事をとるため出かけて行くことが求められます(三〇～三二節)。しかし多くの人たちが彼らを追いかけて来ていました。成人男子だけで五千人であり、相当な人数の人々です。それだけ多くの人たちが、飼い主のいない羊のように(三四節)、主イエスを求めざるを得ない状況にありました。羊は羊飼いがいなければ生きていくことはできません。同じように、人

々は霊的に飢え・渇き、平安・救いを求めて、主イエスの所に来たのです。現在社会も飢えと渇きを覚えています。教会は、その必要に答える使命が与えられています。この時、主イエスは深く憐れみ、教え始められました。主イエスはすべての人の心の渇望を御存知です。そしてそれを満たしてくださいます。

主イエスの恵みは、霊的なものだけではなく現実の必要であるパンにも及びます。弟子たちはパンがないことを嘆きます。しかし主イエスは、パンと魚で人々を満腹にしました(四一～四四節)。これは神の御子イエスだからこそできることです。と同時に主イエスは天を仰がれ祈られました(四一節)。つまり人々の飢えを満たし、すべての必要を整えてくださるのは、主なる神の御業であり、私たちは神からの恵みとして、食事を、そしてすべてのモノを手に取ることができます。

私たちは、主の祈りにおいて「日用の糧を今日も与え給え」と祈ります。不安定な世の中にありつつ、私たちは必要が満たされています。私たちは、神に対する感謝を忘れてはなりません。

私たちは、自分自身でできることはごく限られています。すべてを整えたとしても、五千人の男性がいる中、わずかパン五つ、魚二匹しか準備のできません。それをすべての者が満腹し、満ち足りるようにしてくださるのは、父なる神の私たちへの愛であり、恵みです。これは食べ物だけではなく、すべてのことにおいて同様であり、私たちはすべてを備えてくださる主なる神に感謝し続ける必要があります。

今の時代、モノが溢れているにも関わらず、人々は渇望しています。すべてを備えてくださる主なる神の存在が忘れ去られているからです。

また私たちは日々与えられる食卓の時、聖餐式を思い起こして頂きたいと思います。主イエスは、最後の晩餐において「言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」(マタイ二六章二九節)と語られました。主イエスを真の救い主と信じる者は、聖餐式において

パンと杯に与るように、神の国において主イエスの晩餐に与ることが許されています。主なる神は、私たちを救い、永遠の生命に与らせてくださいます。

並行記事であるヨハネ福音書六章は「ユダヤ人の祭りです過越祭が近づいていた」記します(六節)。今日から受難節を迎え、来週の主の日には復活節を迎えます。キリストが人々にパンを与えられたことは、真に御自身の体を、一回限りの生け贄として十字架に献げたことに深く関わっています。そして私たちはキリストの御業の故に、永遠に生けるパンを授かりました。ヨハネ福音書六章五一節は「わたしは、天から降って来た生きたパンです。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きます。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことです」と語ります。

私たちは、十字架の御業を通して、永遠の生命をお与えくださった主から、飢えることのパン、永遠に渇くことのない水が与えられています(アモス八章一一節)。主の養いに感謝しつつ、毎日を歩みましょう。

「安心しなさい」　マルコ六章四五～五六節、詩編一〇七編二三～三二節

二〇〇二年四月七日

現代の日本は将来が見えなくなり、老後の保証もない先の見えない社会となっています。そして「自己責任」という言葉が語るように、自分の生活のことは自分で解決しなければなりません。こうした中、私たちは安心した生活を送ることができません。私たちは、何に安心をすればよいのでしょうか？

男性だけで五千人の人たちに食事を与え満腹させた主イエスは、弟子たちを舟に乗せ、群衆を解散させられることにより一人になられました(四五節)。普段、主イエスの周囲には弟子たちと共に癒しを求める人々が集まって来ていました。そのため主イエスが一人に

なられることはありませんでした。それはご自身のことを心から話し合える者がいないということからすれば、ここに主イエス自身の孤独があったと言えます。弟子たちは、主イエスが十字架に架かられるまで、主イエスのことを理解できなかったからです。従って主イエスにとって、唯一、真の理解者であられる父なる神と祈祷により深い交わりを持つことが必要でした(四六節、参照・一章三五節、一四章三二～四二節)。

ところがその間、弟子たちは強いて舟に乗せられました(四五節)。以前突風が吹いた時には(四章三五～四一節)、主イエスが一緒に乗っておられ、主イエスの助けを借りることができました。しかし今は主イエスはおられず、彼らは不安でした。さらに逆風が吹き、彼らは漕ぎ悩みます(四八節)。漁師でしたペトロたちは、自力で目的地にたどり着こうとしました。私たちは何をするにしても、自分の希望通りにはいかないこともあります。そうした時、それを解決するために、状況を打破するために、自分で解決しようとして頑張ってしまいます。

ところが主イエスは弟子たちの所に来てくださいました(四八節)。神の御子イエス・キリストはどんな時にも私たちと共にいてくださいます。「安心しなさい」(五〇節)とは、「しっかりしなさい・勇気を出せ」と言う励ましの言葉です。主イエスが一人になられ、祈りにより父なる神との交わりに入れられましたように、私たちが孤独に怯えている時にも、主イエスは一緒にいてくださり、交わり、必要な助けをお与えくださいます。十字架に架かられました主イエスを救い主として信じるすべての者は、既に神の子とされています。これは神の国の特権をいただいているだけではなく、もう私たちは独りぼっちではないと言うことです。私たちが苦しい時・悲しい時・悩んでいる時・震え怯えている時、いつでも主イエスが私たちと共にいてくださいます。そして私たちの必要をご存じであられ、必要を満たしてくださいます。私たちはもう恐れる必要はありません。

しかし弟子たちは、湖上の主イエスを見て幽霊だと思い、大声で叫びます。私たちは、目の前に見えることしか信じることのできない弱さがあります。風は静まり、主イエスが

共にいてくださっても、弟子たちの心は、非常に騒いでいました。弟子たちは、病人の癒し・突風が静まったこと・死人を復活・五〇〇〇人養いなど、主イエスの力ある業をつぶさに見てきました。しかし弟子たちは、主イエスを神として信じることができませんでした。だから主イエスがおられない時には怯え、湖上の主イエスに驚きました。彼らはまだ霊の目が開かれていませんでした。

一方ゲネサレトの人々は、主イエスの所に病人を連れてきました。彼らは主イエスの奇跡だけが目的でした。これには信仰は伴っていません。しかし主イエスの服のすそにでも触れることにより病気が癒されることを信じていました(五六節)。信じるとは、このように主イエスにすべてを委ねることです。信仰は、聖霊が私たちに働くことによって、初めて芽生えます。そして信仰は、真の安心を私たちに与えります。もう私たちは怯える必要はありません。主イエスは今も一緒にいてくださいます。私たちの必要をご存じであられ、すべての必要を満たしてくださいます。

私たちは、聖霊の働きにより、御言葉に示された主イエスを救い主として信じる者とされました。現在、天におられる主イエスを私たちは、神の国が到来するまで直接見ることはできません。しかし主イエスは、聖霊を通して、私たちと一緒にいて、必要を満たしてくださいます。私たちは現状・未来に不安に思うのではなく、安心して、神の国の到来の喜びを持って、歩み続けていきましょう。

「律法主義」　マルコ七章一～二三節、イザヤ書二九章九～一六節

二〇〇二年四月二一日

「律法」をキリスト者は何気なしに用いていますが、本来の日本語には無く、「法律」・仏教用語では「戒律」と表される言葉です。旧約聖書、特にモーセ五書を「律法」と呼

ぶが、律法は神が私たちにお与えくださったものであり、私たちはそれに従うことが求められています。

この「律法」と言う言葉に「主義」が付くと、良い意味では用いられることはありません。本来の「律法」と「律法主義」の違いについて御言葉より聞くこととします。

律法学者は、主イエスの弟子たちが食事の前に手を洗わないことを、律法により裁きました(五節)。これは衛生的な汚れを指摘しているのではなく、祭儀(宗教)的な汚れを指摘しています。これは日本における厄払いやお宮参りと類似しており、宗教的形式主義です。

そもそも神が私たちに律法を備えてくださったのは、人を裁くための基準として、人間が律法に縛り付けられ、不自由な生活をするためではありません。もちろん律法の中心は十戒ですが、私たちは律法を守ったから救われるのではありません。神が最初に私たちを救いに導いてくださったからこそ、神の愛を知り、実践していくために律法が与えられました。神は私たちを愛してくださり、主の御前に近づき、神に望まれ、喜ばれることが何であるかを、律法によりお示してくださっています。

改革派教会の創立宣言(一九四六年)では次のように述べています。「一つ善き生活とは何ぞ。我等は律法主義者に非らず、又律法廃棄論者に非らず」。律法は必要なものですが、そこに込められている意味を考えつつ、機械的になってはなりません。律法を守るように求められているのは人間であり、そして人間は罪人です。完全な者は誰一人としていません。言葉と行いと心の中で、日々罪を犯しています(ウェストミンスター小教理問八二)。だからこそ、律法は人を裁く基準にしてはなりません。律法には三つの働きがあり、第一に善悪の基準を示し、悪を阻止することです。これは法律として非キリスト者にも同じように示されています。第二に、罪を自覚させ、悔い改め、キリストを求めるようにします。第三は、キリストの救いにあずかる者として、律法に従順になる生活を送ることです。

にも関わらず、旧約において語られている律法により、さらにはそこに書かれていないことも新たな戒律として定め、それらにより人々を罪に定め裁くのが律法主義です。そし

て彼らはこれは自らの行動の擁護のために用います。彼らは「コルバン」と語り、神に献げると語ることにより、父・母を敬うことを行わないことの口実に用います。これは明らかに十戒に反する行為です。このことはキリスト者もまた、注意しなければなりません。クリスチャンとなったのは、律法をまっとうしたからではありません。特権階級ではありません。人の誤りを諭すことは重要なことですが、律法学者のように、人を裁き、神の愛から離れはなりません。

最後にキリストは、人の口から入るものが人を汚すのではなく、人の口から出るものが人を汚すことを語ります(一四～二三節)。これは私たちの罪の姿です。私たちは、どうしても自らの失敗・人に犯した罪を、他人の責任にします。しかしキリストは、罪の根元は、私たち自身にあることをお語りくださっています。私たち自身の力では、罪を克服することはできません。二一～二二節に罪のリストがあります。これら私たち自身の持っている罪を、誰が償ってくださり、誰が赦してくださっているのでしょうか？　キリストの十字架こそが、私たち自身の罪を償ってくださいます。父なる神は、それを受け入れ、キリストの十字架の故に、私たちの罪を赦し、義とし、神の子としてくださいました。

私たちに罪を提示し、罪の赦しを与えくださり、神に従う道をお与えくださっている神に感謝し、仕えていきたいものです。

「小犬のパン屑」　マルコ七章二四～三〇節、ミカ書六章一～八節　二〇〇二年四月二八日

主イエスは、群衆から逃れるために一人旅立たれ、フェニキアの首都ティルス（口語訳・新改訳ではツロ）に来ました。地中海沿岸の町で、貿易で栄えた地です。ここはユダヤからすれば外国であり、律法学者たちからすれば「汚れた地」です。

ここでも主イエスの噂は既に広がっていました(三章八節)。そのためティルスでも主イエスの所に人々が集まってきます。しかしここでは一人の女の話しだけを取り上げます。女はユダヤ人からすれば二重・三重にも救われることから排除されていた者です。①女であること。②異邦人(ギリシャ人)であること(二六節)。③娘が汚れた霊に取り付かれていること。

主イエスは、今までと同じように女の娘を即癒されることをせず、「まず、子供たちに十分食べさせなければなりません。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」(二七節)と語られました。ここで子供とはイスラエルのことであり(出エジプト四章二二節)、小犬とは異邦人のことです。つまり主イエスは、神の民であるイスラエルの救いのために来たのであり、今は異邦人を救う時ではないと語られます。アブラハム・イサク・ヤコブとその一族へ広がった救いは、旧約の時代ではイスラエルに限られました。異邦人、そして全世界の人々に救いがもたらされるのは、主イエスの十字架の御業を待たなければなりませんでした。

なぜ主イエスはこのようなことを語られたのでしょうか？　それはここで即娘を癒されたのでは、彼女に真の生きた信仰を与えることができないからです。彼女は文句の一つも語らずに、すぐさま「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます」(二八節)と答えます。小犬なら小犬としての正当な報酬を求めたのです。これこそが彼女の信仰告白です。

彼女の信仰は主イエスにひれ伏したこと(二五節)と、「主よ」との呼びかけに現れています。マルコでは主イエスのことを通常「先生」と呼びかけ、「主よ」との呼びかけは彼女のみが語っています。つまり彼女は、主イエスのことを真の救い主として信じている遜りの姿がここにあります。

遜り、神と共に歩むこと。これは、主にすべてを委ねることであり、自分勝手な判断を下して自分勝手な要求を祈ること・主の自由を奪うことは、私たちには許されていません。

あくまで彼女は、主にすべてを委ね、語られた言葉に対しても従う思いがあります。その上で、主がお与えくださる救いを求めていこうとしています。

創世記三二章には、ヤコブが夢の中で、主と格闘したことが記されています。ヤコブは兄エサウと争い、家を出ましたが、約二〇年の年月が経ち、故郷に帰ってくる時が来ました。その時、ヤコブはヤボクの渡しに一人残ります。その時、ヤコブは一晩中、正体のわからない存在と戦いました。相撲を取り、ヤコブは腿の関節がはずれました。しかし相手が主とわかると、相手が「もう去らせてくれ」と要求したにも関わらず、「いいえ、祝福してくださるまでは離しません」と答えます。そしてヤコブは、神から祝福をいただいました。同じように、異邦人にはまだ祝福が与えられる時が来ていないにも関わらず、彼女は、主イエスから救いを勝ち取りました。

信仰とは、主なる神が私たちにお与えくださり、養ってくださり、信仰が深められていきます。だからこそ、すべてを主に委ねた信仰を持つ必要があります。そのためには、遜りと謙遜が求められます。それはまったく受け身ではなく、信仰に対して、また救いを獲得することにおいては、貪欲になることでもあります。

「開け！」　マルコ七章三一～三七節、イザヤ三五章一～一〇節

二〇〇二年五月一二日

ヘレン・ケラーは、目が見えず、耳が聞こえず、話すこともできない三重苦でした。が彼女は、サリバン先生という良き理解者が与えられ、障害を克服することができました。ところが世には様々な障害を体に持ち、苦しみを乗り越えることもできずに暮らしている人たちも多いことかと思います。「なぜこのような体で生まれてきたのだろう」と悩み、様々な闘いがそこにあります。さらに自らの意志すら人に伝えることのできない人たちも

あります。しかしそうした人たちに対しても、主イエスは奇跡により癒されました。このことは、私たちに対しても大きなチャレンジを与えています。私たちの周囲には自らの力で意志を伝えられない人たちもいます。そういう人たちに対してどのように福音を伝えたらよいのかは今日的な問題です。

四月の東部中会において、ある教会で行われました洗礼の有効性について問題があるのではと議論されました。それは奥様と子供さんがクリスチャンであり、ご主人は以前には教会の礼拝に出席しておられましたが、脳梗塞で倒れ、意識不明になられた人でした。ご家族の希望もあり、教会もその人に信仰があったことを判断して、洗礼を授けられました。しかし教会が試問において、その人の信仰を確認していなかったことが問題とされました。通常、成人洗礼を授ける場合は、試問において、本人の信仰を確認します。東部中会は、厳密に言えば憲法違反だが、故意ではなかったため、戒規にはしませんでした。

では自分で意志を表明することができない人は、地上の教会で洗礼を受けることができないのでしょうか？　いわゆる知恵遅れの人に対しては、簡単な試問で信仰を確認し、洗礼を授けることは可能です。しかし、問題は意思の確認できない人の場合です。第一には、最終的に救いをお与えくださるのは神であり、地上で必ずしも受洗しなくても、神の民として迎え入れられるのであり、無理に地上の教会で洗礼を授ける必要はないとします。しかし一方、家族の希望があっても本当に洗礼を授けられないのでしょうか？　教会では、産まれましたばかりの幼子に対して、親の信仰の故に幼児洗礼を授けます。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（使徒一六章三〇節）。「信者でない夫は、信者です妻のゆえに聖なる者とされ、信者でない妻は、信者です夫のゆえに聖なるものとされているからです。そうでなければ、あなたがたの子供たちは汚れていることになりますが、実際には聖なる者です」（Ⅰコリント七章一四節）。一人の信仰により、家族全員が聖なるものとされます。その時、自らの口で意思表明できる大人に対しては、自らの口で信仰告白する時を、信仰をもって待ちますが、意思表明できない子供たちには、

神の契約の故に幼児洗礼を授けます。同様の措置が、意志表明できない人たちにも洗礼を授けることができるように、神学的議論がなされても良いと私は思います。

主イエスは、耳が聞こえず舌の回らない人を癒されました（三三～三五節）。「深く息をつかれました」これは非常に激しい感情であり、主イエスの彼に対する愛情、サタンの力に対する戦い、父なる神に対する執りなしの思いが込められています。イザヤ書三五章五～六節に記されている通り、神の国の到来の時、地上にあって障害者とされ、様々な不自由さと、社会の偏見の中に歩んでいた者たちは、本来あるべき姿が取り戻されます。

また、耳が聞こえない、口で話せない、目で見ることができない者とは、霊的には私たち自身の姿です。目があっても、その目で神の姿を見ることはできず、耳があっても、その耳で神の御声を聞き取ることはできません。口があっても、その口で神に祈り、神を賛美することはできません（マルコ四章一〇～一一節）。だからこそ私たちも、この人のように主の御手を両耳に差し入れていただき、舌に触れていただく必要があります。そうしてどうでもいいことは耳に入らなくとも、一番聞かなければならないことを、しっかりと聞き取る耳をいただき、つまらないことをしゃべるのではなく、神を賛美し救われている喜びと感謝を語ることができますように、この心の耳と口とを主によって開いていただく必要があります。

「主の養い」　マルコ八章一～一〇節、列王記下四章四二～四四節

二〇〇二年五月一九日

今日はペンテコステです。キリストは、十字架の死から復活され、四〇日目に天の昇られ、今も神の御座におられます。主イエスに従って来た弟子たちにとって、頼りにしていた先生がいなくなりました。しかし主イエスが十字架に架かり、逃げ出した時の弟子たち

とは違います。一〇日後のペンテコステに、神は聖霊を弟子たちにお与えくださいました。目に見える形では主イエスが取り去られ、何もない状態となりましたが、聖霊の力により弟子たちは力が与えられ、迫害の中、キリストを証しし、宣べ伝える者となります。

今日の四〇〇〇人養いは、五〇〇〇人養い(六章三〇～四四節)と内容的に同じです。前者はマタイ一五章にあり、後者は四福音書で記されています。つまり新約の教会を形成した弟子たちにとってこの出来事は、とても印象的だったということです。

ここで主イエスは群衆を憐れまれました(二節)が、弟子たちは現実を見つめ、四〇〇〇人もの人たちを食べさせるだけの食料が「ない」と思います。これは目に見えるものしか見ていない物質主義であり、敗北主義です。彼らは自分たちの常識の中でしか判断できず、神の力を否定したのです。今日に生きる私たち自身も、彼らと同じです。「伝道所だから、まだ小さい教会だから、献金が少ないから、人材がいないから、賜物を持った人がいないから」こうした言葉が出てきます。「ここで何ができますか？」確かにそうです。人間的に考えれば、それは正しいでしょう。しかし、ここには信仰も、希望も、喜びもありません。

その様な状況の中、初代教会の人たちがこの奇跡を好んで読んだのです。それは初代教会の状況が、まさに困窮と迫害の中にあり、この記事を読むことにおいて、キリストによる奇跡の御業により、キリストの力・支配の下にあることを確認し、ここから生きる力を得ていたからです。

主イエスは「七つもある」とこれを肯定され、積極的に用いられます。そして四〇〇〇人に満腹になるまで食べさせ、七籠ものパンが残ります。神は、私たちに必要なものを、すべて備えてくださいます。それも私たちにとっては足らないと思っているものに対して、有り余るものをです。これは「教会が小さいからできない」ではなく、神はここに礼拝堂を備えてくださり、必要なだけの献金と中会からの援助をお与えくださり、これだけの信徒をお与えくださっています。さらに教会には、聖霊を通してキリストが臨在しておられ

ます。同じものを見ながら「これだけしかない」と思うのと「これで充分ある」と思うのでは大きな違いです。不足は不足です。しかし不足を、満ち溢れるほどの祝福に変えることができるお方の働きを信じることにより豊かな祝福が与えられます。こうした事は、教会の働きに留まらず、日々の生活や働きの中にもあります。欠乏と不足で諦めるのではなく、そこから得られる神からの祝福を数え、感謝していただきたいと思います。

そしてこの欠乏と不足の事態を、すべての人が満ち足りるほどの祝福に変えたのは、主イエスの感謝の祈りによります(六節)。私たちは小さく・無力で・貧しいですが、私たちに恵みをお与えくださる方が、私たちと共におられます。私たちは、私たちを祝福に満たしてくださる父なる神・子なるキリストと聖霊により繋がっています。私たちは自分自身の不足を覚えつつも、同時に、その不足を恵みに変えてしまうお方の働きへと目を向けていく必要があります(参照・ハイデルベルク問一二五)。

だからこそ「あれがない、これがない」と否定的に考え、消極的になっていくのではなく、主によって与えられているものに感謝し、それらを用いていくことが求められています。主はそうした私たちにすでに罪の赦しと永遠の生命という計り知れない大きな祝福をお与えくださっているのですから、私たちの日々の必要をも満たしてくださいます。

ペンテコステの日に与えられた聖霊により、私たちは今も、御子イエス・キリストにより父なる神との深い交わりに入れられています。

「しるしを欲しがる」　マルコ八章一一～二一節、イザヤ六章一～一三節

二〇〇二年五月二六日

裁判が行われる時、証言と共に、証拠の品が重要な位置づけを持ちます。それと同様、ファリサイ派の人々は、主イエスに対して、神としてのしるし(証拠)を求めました。しか

しそうした人々は、本当に主イエスの主としてのしるしを見たとしても信じることはありません。キリストは、様々な病人を癒されました。悪霊も追い出されました。キリストご自身は十字架の死から復活されました。こうした神の御業を見た人たちの多くが、主イエスを信じることはできませんでした。つまり、しるしを求める人々が求めている信仰は、自分が納得する神を信じる心です。自分が「主」で、神は「従」です。神を「主」として、神に従おうとする信仰ではありません。自分のサイズに神を合わせ、自分の物差しで神を測り、規格に合えば認めます。彼らは、自分の都合の良いことを語る神しか信じることができないのです。

そしてこのことは現在の教会にも迎合主義をもたらしています。「福音を多くの人々に伝えていくため」の大義名分のもと、人々に受けの良いことだけを語り、都合の悪いことは語らないことがあります。つまり救いのみ語り、人間の罪と悔い改めは語りません。「あなたは罪人です」と語ると、誰も教会に来ないのでしょうか？　本当の罪が示されなければ、罪の赦しと永遠の生命の喜びと感謝は、生じてきません。罪の赦しという本当の意味での感謝と喜びがあるからこそ、義務としての律法に対しても従順になることができるのです。それが、神礼拝・献金や奉仕へと繋がります。

イエス・キリストが主であり神であることは、旧約聖書において、指し示されており、福音書において奇跡と力ある御言葉において、さらに使徒たちの証言において、示されています。御言葉が語る以外に、イエス・キリストが主であり、神であるしるしはありません。私たちは、しるしを見たから信じるのではなく、御言葉に示され、聖霊によってそれを受け入れて信じる者とされることが求められています（ヨハネ二〇章二四～二九節）。

しかしながらもう一方にあって、世の中、特に為政者は、証拠・しるし・理論付けをせずに、雰囲気によって、人々を統治し、支配しようとします。これは「説明責任」であり、国の為政者は説明責任を果たすことなく、法案を作り、国民に対して、縛りをかけようとしています。パン種とはイースト菌のことであり、パン生地にわずかな量のパン種を入れ

ることにおいて、パンを焼けば、ふっくらと焼き上げることができます。このパン種と同様、為政者が神に逆らって行う政治には大きな罪は隠され、小さなことのように映りますが、ここにある小さな罪は非常に大きな罪に広がりを見せます（一五節）。私たちが「これ位は大丈夫」と思っている所に大きな罠が潜んでいます。旧約聖書で、繰り返しイスラエルの罪が語られているのは、同様の罪を私たち自身が持っているからであり、私たちはイスラエルから学ばなければなりません。イザヤ六章では、主がお語りくださる預言をイザヤがいくら語っても、人々は聞かず・理解せず・悔い改めないと語ります。それ程までに、世には罪に満ち溢れているのです。世は罪に満ち溢れていますが、隠され、我々にも罪が誘惑しています。事実、戦前・戦中の日本の教会は、天皇崇拝を行い、神の御前に大きな罪を犯しました。

しかし、私たちはキリスト者です。キリスト者は、キリストのパン種です。日本においては、非常に小さな力です。しかし私たちには、五〇〇〇人・四〇〇〇人にパンを渡してくださるお方が共にいてくださいます。クリスチャンとしての影響力は非常に小さいかもしれません。しかし、パン種がパンを膨らませるように、キリスト者には、キリストの福音を、人々に訴えていく力が与えられています。この時人々は、私たちにキリストが神であるしるしを求めます。しかし、キリストのしるしは、御言葉である旧・新約聖書以外にはありません。多くの人々はこのことに耳を貸そうとはせず、奇跡を否定し、キリストの十字架と復活を否定します。しかし、私たちが、御言葉に聞き続け、世にある罪に対して警告を発し、真理を伝えていくことにより、パン種が膨れるように、福音は広まっていく力を持っています。信じて、歩もう。

二〇〇二年六月九日

夏至が近づき、今一年の内で最も日の長い時期です。従って私たちは、朝、目を覚ますと、太陽の光が窓を通して射し込んでいるのを目にします。しかし私たちは太陽の光がなければ、ものを区別することもできず、何もできません。そして私にとって光のない生活など考えもつきません。しかし現実には心の光は閉ざされていたのです。今日の御言葉は、さましく私たちの心の目を開いてくださる主イエスの御業が語られています。

私たち人間は、生まれながらにして罪を負い、また日々罪を犯し続けています。従って、心の目は閉ざされ、実際には神がおられるのに、その存在を知ることもできなければ、神にある永遠の生命の恵みも知ることもありません（参照・ウェストミンスター小教理問一六）。そして生まれながらにして一日一日と死に向かって歩んでいます。誰一人、そこから逃れることはできません。

主イエスは盲人の目を、二段階で癒されます（二三～二五節）。このことは私たちの救いの過程にあてはめて考えることができます。最初の奇跡で、盲人は人の姿を朧気に、木のように見えるようになります。これは、神が分からず、好き勝手なものを神として偶像崇拝し、好き勝手な生活をしていた状態から、聖霊の働きにより、主なる神を求め、教会の門を叩いた時の状態と言ってもよいでしょう。ここに聖霊を通しての神の働きがあります。

その後主イエスは、この人に、もう一度両手をその目に当てられ、何でもはっきり見えるようにされました。この時に一気に、はっきりと見えるようになったのではなく、継続的な働きです。つまり、私たちの信仰で言うと、最初、教会に来た頃、神であられる主イエスも、罪に満ちた自分自身の姿も、朧気にしか見えず、はっきりと何を信じればよいのか分からない状態でした。ただここに神がおられ、神こそが信仰の対象者であることだけがぼやんと示され、教会に通い始めます。しかし主なる神は、再び私たちに聖霊の御業を通して働き続け、私たちは主なる神の存在と絶対性・私たち自身の罪深さが、次第に示されていきます。それは主の日の礼拝、つまり御言葉の説教・聖霊典・祈りによってであり、

そこに聖霊の働きがあります。そうして私たちは主なる神を信じ、朧気であった神の姿が次第に鮮明になっていきます。そして最後の時、つまり私たちが神の国（天国）に導かれる時、主なる神の存在を、私たちははっきりと見ることができますようにされます。

それは、私たちの心の目をふさいでいた曇りである罪が、既に主イエス・キリストの十字架の御業により、すでに取り除けられているからです。ただ地上の生活の中、私たちはなおも罪の中にあり、完全に聖化されることは、最終的にサタンが滅び、最後の審判の時を待たなければなりません。しかし私たちは、日々の信仰生活において信仰が養われ、確実に聖化されています。これは神の一方的な恵みです。

エレミヤ書二九章はバビロン捕囚の民に対して、エルサレムにいたエレミヤに語られた主の言葉です。バビロン捕囚は、イスラエルが主なる神を裏切り続けた結果でしたが、同時に主なる神は、平和の計画であって、将来と希望を与えられました（一〇～一一節）。

私たちは、「なぜ、死に行く姿に作られたのだろう」と考えてしまいますが、神は、バビロン捕囚の民をエルサレムに帰還させてくださったように、私たち一人ひとりに、平和の計画、将来と希望を与え、神の民として召してくださいました。

私たちは初め、暗闇の中、何も見えませんでした。それが神によって捉えられ、教会へと導かれ、信仰が与えられ、心の目が次第に見えるようになってきました。次第にはっきりと主なる神の栄光の姿が見えるようになることにおいて、喜びがこみ上げ、神に対する感謝をあらわすものへとされていきます。しかし私たちは、過去のことをすぐ忘れてしまいます。見えなかった時のことを忘れ、今ある恵みの豊かさに感謝することがありません。今、心の目が開かれていることに心から感謝しつつ、日々歩み続けていきたいと思います。

「あなたはメシアです」　マルコ八章二七～三〇節、ゼカリヤ二九章四～一四節

二〇〇二年六月一六日

今日の箇所はマルコ福音書の分岐点にあたります。今までは、主イエスの宣教について（奇跡・癒され・御言葉）語られてきました。しかし次の三一節からは、主イエスが最初の死と復活の予告を行われ、十字架に向かって歩み始めます。

ところで主イエスは弟子たちに「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と問いかけられます（二七節）。私たちは、何事においても人の評価を気にしてしまいます。しかし主イエスが問われているのは、弟子たち、そして私たちの信仰です。人々は「洗礼者ヨハネ」、「エリヤ」、「預言者の一人」と答えます。これは主イエスを神としてではなく、人として、一宗教家としてしか見ていません。しかし信仰には、人の評価は関係ありません。

今、世界中の人々がサッカーのワールドカップに目が向いています。英国国教会のある教会は、自国のチームの試合時間にあわせ、礼拝の時間を移動させました。これは本末転倒です。主なる神は、私たちに主の日を一日を聖別して、主の御前で礼拝を献げることが求められています。サッカーにあわせ、礼拝の時間を移動させることは、サッカーの方が優先された結果です。彼らにとってイエス・キリストは、自分の都合で好き勝手にその位置づけを移動させることのできる存在にすぎません。

ここで問われているのは、あなた自身の信仰です。目の前におられる主イエスはどの様なお方なのか。人々は、神としては認めず、一宗教家として捉えています。しかしあなたにとってはどうなのかです。

この時ペトロは「あなたは、メシア（キリスト、油注がれました者）です」と答えました。主なる神から油注がれ、任職された救い主です。ここで問われているのは、あなた自身の神観です。神を、相対的に考えるのか、絶対化して考えるかです。相対化すれば、自分の都合にあわせ、自分にとって必要な時だけ、神を讃美し、礼拝します。しかし、神を絶対化すれば、すべての中心に主なる神がおられます。私たちの生・救いも神からの恵みです。

キリストの十字架があるからこそです。

主イエスを「あなたは、メシアです」と信仰告白します。これは絶対的な支配者であられ、私たちの罪を救ってくださるお方であることを信じると告白することです。そして主なる神の語られる御言葉に服して生活をすることです。すると私たちの生活すべてが神を中心とした生活へと変えられていきます。主なる神は、私たちに主の日に礼拝を献げることを要求されます。そうすれば、サッカーがあるから礼拝は後回しにすることなど考えられません。礼拝は義務ですが、私たちは礼拝を通して、罪の赦しと永遠の生命にあることを確認し、神を中心とした生活に仕えていくことができます。これが恵みです。つまり言葉による告白だけではなく、信仰の実存が問われます。このために復活のキリストとの出会いが必要となります。

この時ペトロはまだ復活のキリストと出会っていませんでした。だからこそ、十字架に架けられようとしていた主イエスを三度否定しました（一四章六六節～）。口先の告白をいくらおこなっても、本当に私たちの信仰が試されるのは、危機が訪れた時です。しかしペトロはこの後、復活のキリストと出会い、教会の指導者として立てられていきます。教会が迫害される中、真の意味で「主イエスこそ、メシアです」と告白し続けて行くこととなります。

「主イエスによって救われた」と頭で考え、「主イエスを神として信じます」と口で告白しても、それは頭の中で自分中心の世界で考え出された信仰にすぎません。十字架に架けられ、死を遂げ三日目の朝に復活されたイエス・キリスト、ここにこそ私たちの罪の赦しと永遠の生命があります。このことが示されました時、信仰は口だけのものではなく、私たちの生活そのものとなります。十字架の主イエスに出会う時、私たちには、聖霊の豊かな恵みが注がれ、そして本当の意味での主なる神に対する信仰の告白をするものへとされます。

「十字架を背負う」　マルコ八章三一節～九章一節　二〇〇二年六月三〇日

現代の神学者の中には、キリストの十字架の予告を否定し、後世の付加と考える者もいます。しかしキリストの予告は、後世の付加や占いや予言の部類のものではありません。主なる神のご計画に入れられていたことが、預言されていました。神は、主イエスが乙女マリアからお生まれになられる前から、神の民の罪からの救いのために、十字架をご計画になられていました。そして神は、キリストの十字架により、罪の中にある神の民を救い、永遠の神の国における生命をお約束くださいました。つまりキリストの十字架の御業は、神の御子がこの世においてお生まれになられることの第一義的な目的でした(一〇章四五節参照)。この予告の言葉は、予言ではなく預言です。

そしてキリストは、三度も十字架について予告されました。このことを弟子たちはこの時、理解することはできませんでした。しかしキリストの復活と昇天の後、彼らの信仰の目が開けられた時、キリストの十字架の意味を、このキリストの言葉を思い出すことにおいて知り、宣べ伝えていくこととなります。従ってここでキリストが十字架の予告をすることは、神のご計画が人々に明らかにされることと、弟子たちの教育にとって必要なものでした。

しかしこの時はまだ、彼らに十字架の意味が閉ざされており、キリストの言葉を理解することができず、主イエスをいさめました。これは当時のイスラエルの終末概念が念頭にあります。つまり当時イスラエルが考えていた救い主とは、政治的にローマなどの強国をうち倒す政治的な指導者でした。だからこそ、主イエスが亡くなられることに対して、ペトロは納得がいかなかったのです。しかし主イエスはペトロを「サタン、引き下がれ」と叱られました。ペトロの言葉が、イスラエル優越・民族主義的でしたからです。民族主義は戦時中のナチスや日本軍にあり、現在でもヨーロッパ各国や日本で見受けられます。これはもとを正せば、自己中心的な罪です。しかし、キリストがこの世に来られたのは、あらゆる国民を神の国に集めるためです(黙示録七章九～一〇節)。キリストを信じる者は、すべて神の国の民として認められます。

では私たちは、どのようにしてキリストに従えばよいのでしょうか？①自分を捨て、②自分の十字架を背負い、③キリストに従うことです(三四節)。キリストの言葉は、私たちを窮地に追い込むためではなく、私たちを生かしてくださるためです。すると「自分を捨てる」とは、自分自身の姿を省み、そこにある罪が示されることです。そこに潜む自我が示され、その罪を赦してくださった神の愛が理解できるはずです。そして罪の悔い改めの心が生じてきます。このことこそ「自らの十字架を背負う」ことです。私たちの罪は、すでにキリストの十字架によって償われています。しかし私たちは、なおも罪人であることを忘れてはなりません。神の民としてふさわしくない者です。ふさわしくない者を、キリストは十字架により救ってくださいました。ここに救われた喜びと感謝が生じてきます。神の民としてふさわしくない者からふさわしくなろうとする思いが生まれてきます。それがキリストに倣うことです。私たちの信仰生活は一進一退のように見えます。しかしキリストは、私たちの信仰を確実に成長させてくださっています。それが聖化の歩みであり、聖書に示されました御言葉に聞き続けることにより与えられます。キリストの十字架の御業に感謝と喜びをもって、キリストに仕えていきたい。

「主イエスの変貌」　マルコ九章二～一三節、申命記一八章一五～二二節　二〇〇二年七月七日

主イエスの変貌は、福音書でも特異なテキストです。しかしこれも文脈を追うことによって理解できます。この直前(八章三一節～九章一節)、主イエスは十字架の予告を行いま

した。十字架によって私たちが与えられるのは、救いであり、神の国です。ここで主イエスが真っ白に輝いておられたのは、まさしく私たちに与えられようとしている神の国をお示しになるためです。この白さは、天における聖・義・真実を表す天的なしるしであり、地上においてはあり得ません。つまり、真っ白の輝きに包まれました主イエスこそ、真に神に繋がるお方です。

しかもエリヤがモーセと共に現れて、主イエスと語り合っていました(四節)。モーセは神から律法を授けられてイスラエルに制定し、「律法」を代表します。エリヤはただ一人でバアルの預言者と戦った神の人として「預言者」を代表します。つまり律法と預言者が主イエスと共に立ったことは、「律法と預言者」つまり旧約聖書がこの主イエスを証し、証拠づけ、聖書自身が主イエスをキリストとして権威づけていることを意味します。この二人は再び現われることが預言されていました(申命記一八章一五節、マラキ三章二三～二四節)。このモーセとエリヤの再来は、キリストの言葉に私たちが耳を傾けることを目的としています(七～八節)。

しかしこのような天的なしるしが示されました時、弟子たちはどのように行動したでしょうか？ペトロの答えは頓珍漢でした(五節)。「仮小屋を三つ建てる」。仮小屋とは幕屋(聖所)のことです。幕屋は、神の住まわれる場所として、民と会見される礼拝の場所としてイスラエルに与えられましたが、それはあくまで救い主の贖罪を予表しているに過ぎません。罪の赦しを求めるために、動物の犠牲が行われました。幕屋とは仮小屋です。キリストが十字架の上で死を遂げられた時、神殿の垂れ幕は裂け、神の臨在の場である至聖所と、祭司たちが儀式を執り行う聖所の境はなくなりました(一五章三七～三八節)。つまり主イエスの十字架は、仮小屋の時代の終わりを告げ、新しい時代、既に神の民に救いが成し遂げられた時代の到来を意味します。しかしペトロの言葉は、主イエスを預言者の一人にしか数えていないことを物語っています。そしてペトロは自らの信仰の告白の意味を理解していませんでした(八章二七～二九節)。

ここに、私たち自身にも繋がる人間の弱さがあります。「主イエスこそ、救い主(メシア、キリスト)です」と告白しつつも、本当にキリストの僕(＝奴隷)として、キリストを信じ、キリストの御言葉に聴従できません。私たちは日々の生活に追われ、自分勝手な御言葉の解釈を行い、自らの行動をよしと認めてしまいます。ここに弱さがあります。私自身、まさにこの弱さの中にあります。今、私たちは、イエス・キリストを真の救い主として、この方に聞き従うことが求められています。

雲の中から神が「これはわたしの愛する子。これに聞け」と語られた時、もはや誰も見えず、ただ主イエスだけが彼らと一緒におられました。預言者が消えたことにより、改めてキリストのみがここにおられることが、弟子たちに示されました。神の国において栄光に包まれていた方、そしてエリヤもモーセも旧約聖書の預言者たちが指し示していた救い主が、今弟子たちの前におられます。そして、私たちは今、この地にあっての歩みを続けていますが、イエス・キリストを救い主として信じることは、世の生活からの離脱ではありません。この世にあり、日々の生活に仕え、様々な苦しみ・悲しみの中、神がお与えくださる神の国の祝福を待ち望むことです。今の生活を、主イエスはご存じです。今は天に昇られていますが、なおも聖霊を通して我々と共にいてくださいます。そして主は、私たちの必要をご存じであられ、必要を満たしてくださいます。そして、このイエス・キリストが、十字架にお架かりくださり、私たちの罪の贖いを成し遂げてくださいました。そして私たちを神の国へと導いてくださいます。今から私たちは、聖餐の礼典に与ります。まさにこのパンと杯により、キリストの十字架に架けられました時の肉の苦しみ、流されました血を心に留め、聖霊を通して、主イエス・キリストとの交わりに入れられていることを覚えたい。

「できれば……」

マルコ九章一四～二九節、エゼキエル一三章一～七節

二〇〇二年七月一四日

今の世の中は、競争社会であり、生き残りのためには自分自身を磨き、アピールしていくことが求められます。このことにより、ある者には自信過剰になり、ある者は自信喪失に陥ります。

主イエスの弟子は、自信をもって子供を癒そうとしましたが、癒すことができませんでした（一八節）。そのことに対し、イエスはお答えになります。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか」（一九節）。つまり、弟子たちは主イエスから汚れた霊を追い出し、病人を癒す権能が与えられ、実際に行うことができました（六章七節、一二～一三節）。そのため、自信過剰とまではいわないまでも、過信していました。そして子供を癒すことができずに焦ったのです。ここに自己中心主義の不信仰があります。

しかし彼らは、なぜ霊を追い出すことができなかったのか分からず、主イエスに質問します（二八～二九節）。悪霊を追い出す力は、一度与えられたら自動的に働くようなものではありません。カルヴァンは、「人間は神の器です」と語ります。器である人間は、自分自身では何も持っていません。そこに主なる神が、魂を、そして弟子たちには悪霊を追い出す力をお与えくださいました。いつまでもそれが蓄えられているのではありません。あくまで器であり、常に補給され続けることが必要であり、それなくしては人間としては何の力も持ちません。従って、私たちは自らでは何もできない無力な人間であり、神が何もなくなった器を満たしてくださるお方であることを知ることが必要です。そのために神礼拝があり、御言葉の説教・洗礼と聖餐の礼典・祈りが必要です。特に、主にすべてを委ねることが必要なのであり、主に求め続けていくための祈りが求められています。

これは私たちキリスト者自身の姿です。私たちは毎週礼拝に出席しています。毎日聖書

を読み、個人礼拝を行っています。このように自負している人にこそ陥りやすい問題です。「私は信仰がある、信仰を持っている」というのは間違いです。むしろ信仰は、御言葉・礼典・祈りにより、主なる神が聖霊を通して、私たちにお与えくださるものです。空っぽになった器に、信仰を蓄えてくださいます。だからこそ私たちは、一度信仰を持てば、もうそれでゴールとなるのではなく、日々、信仰の渇望を覚え、御言葉に聞き、礼典に与り、祈り、礼拝に与り続けることが求められています。

一方、子の父親は主イエスに対して「おできになるなら……」（二二節）と語ります。この言葉は謙遜にも聞こえますが、主イエスは誉められません。主イエスは、この父親が主イエスを信じ切ることのできない弱さを見ます。これは単なる弱さではなく、敗北感であり、絶望感に近いものです。現代の競争社会の中、敗北感・絶望感を持っておられる方が多いかと思います。しかしここで主イエスが語ろうとしておられることは、社会に右往左往するのではなく、すべての創造者・統治者であられる主なる神に目を向けることです。社会を形成するのは人間であり、人間は皆、神の被造物に過ぎません。すべての統治者であられる神は、神を信じる者に神の子としての特権をお与えくださり、天国を約束してくださっています。神の子とされた私たちの祈りを、神は聞いてくださいます（参照・ルカ一一章九～一三節）。

この時、この父親は「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と答えました（二四節）。つまり自分自身には空の器しかなく、ここに命の水を注いでくださるお方にすべてを委ね、信じることが、今、私たちに求められています。これは敗北でも絶望でもありません。良い物をお与えくださる主なる神は、勝利者であられます。キリストは十字架の上で死を遂げられ、死にて葬られましたが、三日目の朝、死に打ち勝ち、復活を遂げられました。そしてキリストは、再臨され、最後の審判を行い、信じる者を神の国へ導いてくださいます。九章の初めのところで、山の上で変貌を遂げられた主イエスは、山の下にいるこの父親を、そして病の中にある息子を愛してくださり、憐れんでくださり、信仰を

お与えくださいました。空の器に一杯の生ける水である信仰をお与えくださいました。山の下では、なお日々、様々な苦しみ、戦いあります。しかしすべての勝利者、神の国へ導いてくださる主なる神を信じて、このお方にすべてを委ねて、日々歩んでいきたいものです。

弟子たちは自分たちは持っていると過信して病を癒すことはできませんでしたが、私たちは主がお与えくださいました信仰・賜物を用いて神に、そして人々に仕えていくことができます。

「一番偉い者」　マルコ九章三〇～三七節、箴言二九章一～二七節

二〇〇二年七月二一日

私たちは、周囲の人々を気にして生きています。クリスチャン同士であっても同じです。そして自然と相手を自分より上に立つ者か、下にいる者かを判断していることもあるかと思います。しかし主イエスは、宣教に出られてから、人を分け隔てなく、病人に対しては癒され、人々が罪人だという人たちにも分け隔てなく接してこられました。しかしここでは、人に気づかれることを好まれず、人目を避けようとされています。今までは、神の子としての御自身を人々に提示し、神の国の福音を広めてきましたが、十字架と復活の予告を行い、エルサレムへの歩みを始められたのです。このことは人々どころか、弟子たちすら理解できないことですが、主イエスはあえて人々から離れられたのです。

主イエスの二回目の十字架の予告は、前回(八章三一節)と異なり、「人々の手に」よって十字架に架けられることを語ります(三一節)。もちろん主イエスを直接十字架に架けたのは、長老・祭司長・律法学者たちですが、人々はそれを支持し、もう一人の囚人を解放しました。今まで主イエスを支持していた人たちも、間接的にしろ関わったのです。人々

は直接手を下すことはしませんが、時によって指導者を選び、自らの安全を守ることにおいて、間接的に主イエスを十字架に架けることに加わったのです。そしてこれは私たち自身の姿でもあります。現在、長野県知事選挙が行われようとしていますが、知事を選ぶように、人々は今回は主イエスを選ぶけれども、次回はどうか分からないと言うような、時と場合によって、自分にとって何が得なのかを考えて選んでいました。ここに私たち自身の姿があります。

私たちは、「私の罪のために主イエスが十字架にお架かりくださいました」とは告白しますが、「私自身が主イエスを十字架に架けた」意識が希薄です。しかし私たちもまた、主イエスを十字架に架けた責任が問われています。

主イエスの十字架について、弟子たちも理解できないでいました。そして「誰が一番偉いか」(三四節)と語っています。自己評価を求めています。そして弟子たちは、自分たちが話していたことが良いことではない事を理解し黙っていました(三四節)。彼らが十字架を理解するためには、十字架と復活そして聖霊降臨の時を待たければなりません。

私たちは勘違いをしてはなりません。主イエスは決して「一番になることを望んではならない」とは語ってはおられません。改革派教会で、有神論的人生観・世界観を語りますが、飲むにも食べるにも何をするにも神の栄光を讃えるために行います。そして天地創造における神の国の完成のために、私たちは主に仕えます。そのために、何をするにしてもその道のプロとなり、第一人者となり、人々を導いていくことすら求められています。

ただその姿勢が問われています(三五～三七節)。幼児は何もできず、人の手ばかりとらせます。できない幼児に対しても理解を示し、要求に対しても応えていきます。このような謙虚な姿勢が求められています。つまり利害も見返りも関係ない幼児に仕えることこそ、神の国に相応しい者です。

キリストは、このことを率先してくださる形で、十字架にお架かりくださいました。罪によって神から離れ、神を忘れ、自分勝手な生活をしていた私たちを、なおも愛し、捉え、

召してくださり、神の国における神の子として認めてくださいました。そして私たち自身の罪を、キリストがすべてを担って十字架にお架かりくださいました。王の王、主の主であられる方が、誰からも指示されないけれども、真の愛をお示しくださいました。私たちはそのキリストの十字架の故に、罪赦され、神の国に入ることが許されています。

日々の生活にあって、様々な人たちとの関係の中、困り、傷付けられることもあるかと思いますが、なおも相手を赦し、受け入れつつ、神の栄光を讃え、神の御国の完成に向けて歩むことが、私たちは求められています。

「つまづき」　マルコ九章三八～五〇節、民数記一一章二四～三〇節

二〇〇二年七月二八日

主イエスの弟子たちは、悪霊を追い出すことができできませんでした(九章一八節)。弟子たちの不信仰の故です。また主イエスの名を唱えた男も、悪霊を追い出すことはできませんでした(使徒一九章一三～一六節)。つまり、主イエスに対する信仰もないのに主イエスの名によって悪霊を追い出そうとしても、できません。ところがここで記されている人は、主イエスの名を語って悪霊を追い出そうとして、実際に悪霊を追い出していました(三八節)。つまり彼は、主イエスたちと一緒に行動することはない状態で、主イエスの権威を信じ、主イエスに従っていた人物と考えることができます。

しかし弟子たちは、それを止めさせようとしました。これには二つの理由が考えられます。①弟子たちが自分たちにはできなかったことに対する嫉妬。②自分たちだけが主イエスの弟子であると思う独善主義に陥っていること。しかし主イエスは「やめさせてはならない」と語られました(三九～四一節)。寛容な態度です。

ここで、キリスト教における教派の問題を考えます。日本だけでも百以上の教派があり

ます。改革派・長老派の教会から、福音派・ルーテル・聖公会・カトリック……。これらの教会では、信仰の違いから、礼拝の仕方が異なり、信仰の一致を求めていくことはできません。そのため無作為にエキュウメニカルを求めていくことはできません。しかし彼らは異端者ではありません。多少信仰的な歪みがあったとしても、同じ主イエス・キリストを信じているクリスチャンの兄弟姉妹です。排他的になってはなりません。信仰の違いを認め合いつつ、交わり、接していくことが私たちに求められています。

弟子たちは「誰が一番偉いか」(三四節)と話し合っていました。そしてこの記事が続きます。ここに弟子たちのプライドと特権意識が見られます。しかし主イエスは、幼子を受け入れ(三七節)、直接的に仲間でないが信仰がある者を受け入れ(三八節)るように語られました。これが神の国に相応しい者の姿です。私たちが問われているのは、人の行動や信仰ではなく、自分自身の姿です。私たちは、人を受け入れることができず、そのくせ人からは立派に見られたいと思います。そしてこのような者の本来の行く道は、地獄に投げ込まれる者です(四二節)。人のことをとやかく言うことはできません。本来、私たち自身が死に値する者だからです。

この死に値する者が、キリストの弟子として認められ、やがて新約の教会の指導者として立てられていきます。ここにキリストの十字架の死と復活の意味があります。罪の故の死に値する者のその刑罰を、キリストが十字架に負うてくださり、罪の償いをなしてくださいました。だからこそ、我々の罪は赦され、キリストに繋がり、キリストが再臨された時、神の御国に入れられ、神の子とされ、神の栄光を讃える者とされます。

私たちの体は、罪の故に不純物が含まれており、塩気を取り戻しているのです。この火の精錬こそ、主の日毎の御言葉の説教であり、礼拝に出席することにより、私たちはキリストによる精錬を受けているのです(四九～五〇節)。そしてキリストによって精錬されている者は、求める者に一杯の水を飲ませてあげる者へと変えられていきます。そして善きサマ

リア人(ルカ一〇章三〇～三七節)のように、まったく利害関係のない追い剥ぎに襲われました人の介護をする者へと変えられていきます。

現在の日本は、今犯罪が増え、殺伐としてきています。そして激しい競争社会です。互いに認め合い、助け合うことがなかなかできません。しかし私たちはキリストにより精錬され、塩気を帯びています。この塩気は、世に蔓延っている罪に対して、警告し、互いに寛容を持って受け入れ合い、助け合い、キリストの栄光を讃える者として、召されています。自分のメンツにこだわり、他の人たちを見下す様な者ではなく、互いに受け入れ合い、助け合うことが求められています。神の国に相応しい塩気を身に帯びて、日々火による精錬された者であり続けますよう主を求め続けていきたいものです。

「結婚と離婚」　マルコ一〇章一～一二節、創世記二章一八～二五節

二〇〇二年八月四日

主イエスが二回目の死と十字架の予告(九章三〇節～)をされ、三回目の予告(一〇章三二節～)までに挟まれている記事です。ここに三つのこと語られています。①離婚について、②子供について、③財産について。これらのことは主イエスが天に昇られた後、教会を形成していくために必要な教えです。

生活形態が多様化している今日、結婚と離婚・男女間の問題は、無秩序になっています。このままで良いのかが問われています。ところで、今の問題を二〇〇〇年前の聖書に聞くことができるのでしょうか？　聖書の語る秩序は、新しい古いで考えるものではなく、神が私たち人間に対してお与えくださった普遍の規定であることを覚えなければなりません。そのため聖書の記された社会的状況を加味しながらも、私たちは聖書の言葉に聞き従うことが求められます。

ここでファリサイ派の人々は主イエスに離婚について問いかけます(二節)。彼らは申命記二四章一節の解釈を問題としました。この問題は、彼らの間でも意見が分かれていました。シャマイ派は、「離婚以外には離婚の理由にはならない」と厳格に解釈をしていました。一方ヒルレル派は、妻が料理を焦がした・妻がきちんと化粧をしない等些細な理由で離婚の理由になると語っていました。それに対して、主イエスは創世記の秩序に照らしてお答えになられます(五～九節)。つまり①神の創造の秩序の中、神が男と女に求められました結婚の秩序と②罪に汚れた中にある状態にある男と女の関係において許される離婚との違いを覚えなければなりません。

「人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である」(七～八節)。つまり夫婦は二人で一人前であり、互いに助け合う必要があるものとして人間は創造されています。しかし人間は堕落し罪が混入しました。ここに自我が生じます。互いが自己主張をしておれば、それは夫婦としては成り立ちません。二〇〇〇年前の聖書の時代であれば、男性社会のため、先程の申命記の言葉を自分勝手に用いて、妻が何か恥ずべきことをしたら男の都合で離婚が可能でした。しかし今日では、社会が男女平等が語られるようになり、夫から妻に対する一方的な離婚だけではなく、逆の場合、あるいは両者で決める場合が出てきただけで、問題は同じです。夫婦とは、罪人と罪人がぶつかり合う場です。だからこそ互いに相手の意見を聞き、弱さを認め、譲り合うことも必要となります。一体となるとは、まさしく譲り合うことにより、始めてできることです。ここに愛があります。

モーセは申命記二四章において離縁状を書いて離縁することを許しました。これは、罪の故に離縁される女性がいた事実に基づきます。つまり離婚を正当に認めたのではなく、離縁され路頭に迷う女性たちを守り、法的結婚の関係から正式に解放し、再婚の権利を与えるものとして、律法が制定されました。従ってこの申命記の律法から、私たちは離婚が許されるかどうかを判断してはなりません。だからこそ離婚については慎重に扱わなけれ

ばなりません。改革派教会では「信徒の手引き」において、法的に許される離婚には二つしか無いことを記します。第一が相手が他の異性と姦淫を犯した場合で、第二は「故意の遺棄」です。つまり相手が不信者で、相手の方から離れていく（Ｉコリント七章一五節）場合です。

私たちは、なおも罪の中にいます。夫婦の仲にあっても、自己がぶつかり合い、自己主張を繰り返します。性格・意見の不一致も起こります。しかし、結婚とは、そもそも一人でいた人間にとって必要な助け手をお与えくださるために定められた規定であり、自分勝手な理由で、決して離婚をしてはなりません。互いに忍耐し合い、許し合い、譲り合うことが求められます。ここに愛が生じ、キリストが私たちにお与えくださった愛を理解することができる者とされていきます。

最初に語った通り、現在人々の生活・結婚観は多様化しています。しかし神は、自分勝手な理由で離婚することは許されません。意見が不一致の時、離婚ができないのは、ただ単につらいのではなく、忍耐と人を理解する信仰が養われ、キリスト者として主による豊かな祝福と成長に与っています。

さらに私たちは神の国における結婚、つまりキリストを花婿とする花嫁として私たち自身が天国に迎え入れられています。そしてキリストは私たちを受け入れてくださるために忍耐と愛を持って十字架の道を歩んでくださいました。さらに私たちは、キリストの花嫁として受け入れられていることを、聖餐式により、確認することができます。

「子供の祝福」　マルコ一〇章一三～一六節、創世記四八章一二～一六節

二〇〇二年八月一一日

主イエスは十字架に向かうにあたり、弟子たちと民衆たちに対して、様々な教えを語っ

ておられました。その様な中、イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来ました（一三節）。弟子たちに取っては、邪魔が入った思いでしたのです。

子供たちたちが黙ったまま主イエスの話しを聞き入ることはありません。騒ぎ始め、動き回る子もいたでしょう。子どもたちは、聞いても理解できず退屈です。そのため、動き回り、騒ぎ出します。弟子たちにとって、そうした子供たちが邪魔であり、叱ったのです。

これは、弟子たちが持っている自己中心的な罪そのものです。弟子たちは、主イエスが十字架の死と復活の二回目の予告を行った後に、だれがいちばん偉いかと議論し合いました（九章三五節）。また主イエスの名を使って悪霊を追い出している者に、それをやめさせました（九章三八節）。そしてここでは、子供たちを連れてきた人々を叱ります。これらはすべて共通して自己中心的な弟子たちの姿が露わにされています。

この弟子たちの態度に主イエスは憤りを露わにされました。これは非常に強い口調であり、新約聖書全体を見渡しても、他には記されていません。だれがいちばん偉いかと議論し合っていた（九章三五節）時も、主イエスの名を使って悪霊を追い出している者に、それをやめさせよう（九章三八節）とした時も、主イエスは淡々と弟子たちを言い聞かせました。ここでの主イエスの憤りは、弟子たちが礼拝行為を否定するかの行動をとったからです。

私たちも、礼拝の場では子供たちが立ち歩いたり、騒いだりすると親や周囲の人たちが注意します。弟子たちの行ったことと大差ありません。

ではなぜ、主イエスは憤りを持たれたのでしょうか？　それは誰のための礼拝かが、忘れ去られているからです。大人は、自分たちが集中して主イエスの話しを聞きたいがために、子供たちを黙らせようとします。これは自分中心の姿です。大人の論理を子供に押しつけています。神によって礼拝に招かれているのは、大人だけではなく、乳飲み子や子供たちも神によって招かれています。だからと言って、子供たちを好き放題にそのままの状態で騒がせておいて良いのではありません。主の御前に礼拝を献げていることを良く言い聞かせることは、親の責任です。子供たちが礼拝に招かれているように、他の大人たちも

礼拝に招かれているからです。しかし、礼拝に集っている子供たちが居場所がなくなるような窮屈さを与えることは、大人たちの責任となります。

そして主イエスは語られます。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（一四～一五節）。主イエスはまた、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」（九章三七節）とも語られていました。

主イエスが幼子たちを受け入れるように語られたのは、子供たちが純真無垢であり、罪がないからではありません。子供たちは、自分勝手であり、人の手を煩わしてばかりです。そういう意味では子供であっても、生まれました時から罪を背負い、大人と同じように子供たちも神の国に自動的に入ることはできません。

しかし子供たちにあり、大人が失っているものがあります。それは自分自身が弱く、何も自分一人ではできないことを理解し、大人に助けを求めることです。そして子供は、自分自身の功績や誇ることもありません。今、親による子供への虐待が深刻になっていますが、虐待されている子供でも虐待している親を頼ります。他に頼る人がいないからです。

このように自分の弱さを知り、全面的に親を頼り、神を信頼する者こそが、神の国に相応しいのです。弟子たちは、誰が一番偉いのかと論じあい、子供たちのように、無条件に神を受け入れようとはしませんでした。主イエスが語られる御言葉を自らの力で理解し、救いを獲得しようとしていました。このことに対して主イエスは憤られましたのです（参照・Ｉコリント一章二六～三〇節）。

つまり私たちは、幼子のように無力で何もできない者でしたが、神の一方的な恵みによって救われました。乳飲み子でした者が、育てられ、成長して、一人前の大人とされました。それを忘れているのが大人です。

そして主イエスは、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福されました（一六節）。祝福

とは、「救いに満ちた力を付与すること」であり、父から息子・孫に対して伝えられるものであり、重要な位置をしめていました（創世記等）。だからこそ、誰が祝福を受けるかが重要な意味を持ちます。ヤコブがヨセフの子の長男マナセではなく、次男エフライムを右手で祝福したことは、ヨセフを慌てさせたことですが、それだけ祝福を受けることが、世継ぎの意味でも重要な意味を持っていたことを示しています。

主イエスが、子供たちを祝福されました。これは無力な者に主の栄光が示され、神の国に相応しい者とされることを語っています。そして、神の国では誰も誇ることがなく、神の御力と栄光のみが示されます。

つまり、神によって選ばれた弟子たちやキリスト者とされた私たちであろうが、何一つ、自分自身には誇るものがなく、神の一方的な恵みによって、罪の赦しと救いが与えられたのです。礼拝には、乳飲み子から幼児・子供たち・青年・壮年・老人に至ります様々な人たちが招かれています。誰も完全な者などいません。この世にあっては、皆が乳飲み子のように、誰かに何かを委ねて生きています。礼拝の場にあっても同じです。互いの弱さを受け入れ、認め、許し合うことにより、そうした者たちをも神が礼拝に招いてくださっていることを、私たちは覚えることができます。そして、このすべての者を受け入れてくださり、神の国に招いてくださっている主なる神の栄光を、私たちは感謝して受け入れ、誉め讃えていく者とされています。

「金持ちと神の国」　マルコ一〇章一七～三一節、エレミヤ三二章一六～二五節

二〇〇二年八月二五日

私たちが日常生活を送るには、経済的必要が不可欠です。お金をまったく用いないで、暮らすことは不可能です。それは、教会の働きでも同じであり、聖書は決して共産主義社

会・共同生活を求めているのではありません。

しかし、人間は欲深く、金に対する執着します。日本社会が通ってきたバブルの時代とその後の失われました一〇年は、まさに金に対する執着故に生じたことです。今日は、与えられました御言葉より、人間の持っている金銭欲と神の国との関係について考えていきます。

財産を持っていた者が主イエスに対して質問します(一七節)。この時彼は、ひざまずきます。また彼は子供の時から十戒を守っていました(二〇節)。礼儀正しく、主イエスに対する尊厳を持ち、何事にも熱心だったと考えられます。彼は主イエスのことを「善い先生」とも語ります(一七節)。人間的な尊敬を表しています。しかし主イエスは、究極的な意味において「善い」お方です。主イエスは、神の御子として、罪を犯すことがありません。そして主イエスは、父なる神に服従し、父なる神の意志によって行動していました。主イエスが十字架にお架かりになられることは、まさに父なる神のご計画に従われた結果です。

こうした絶対的な基準において善であられる神の御前に立っ時、神の絶対的な善に照らし合わせて、あなたはどうかと問われています。彼は十戒を守っていると答えます。律法は、自分の意志で守ることができ、またそのことにより神の国に入ることができると彼は考えていました。これは律法主義です。しかし人間は皆、罪人であり、誰一人として律法を全うする者はいません(ウェストミンスター小教理問八二)。そして律法により、人間は自らが思いと言葉と行いによって、罪に汚れていることが示され、更に罪を憎むようになります(ウェストミンスター信仰告白一九章六節)。

主イエスは、彼を愛されました(二一節「慈しみ」)。主イエスの私たちへの愛は、一方的です。主の愛に満ちて歩む者は、すべてを主に委ねる者となります。自分の力・持っているものに頼っていてはダメです。主の愛の故の十字架により、罪の赦しと永遠の生命が与えられます。

財産のある者が神の国に入ることは難しいことです(二三節)。富んでいることが問題なのでなく、富むことにおいて、生活に余裕ができ、自分のことは自分でできるとの思いとなり、神に委ねることを忘れてしまうからです。世の富の危険が潜んでいます。私たちは何を食べ飲もうかと、悩む必要はありません。すべては主なる神がお与えくださいます。ただ神の国と神の義を求めればよいのです(マタイ六章三一～三四節)。

人間の力は有限であり、できることは限られています。しかし主の御力は限りがありません(二七節)。今日の一日を、主なる神にすべてを委ねることにより、神の豊かな恵みが示されます。このことは、出エジプトを代表とする旧約の歴史によって証しされています。だからこそ私たちは、何よりも神の国と神の義を求めればよいのです。そうすればすべての必要は満たされます。

主イエスの弟子たちはすべてを捨てて従って来ていました(二八節)。彼らには欲望も見られますが、主イエスは彼らを非難することなく、素晴らしい恵みと祝福が約束されます。神は、信じる者にはすでにキリストの十字架により罪の赦しと永遠の生命をお与えくださっています。それだけ、私たちは神に愛されています。そして私たちにとって必要なものはすべて神によって与えられます。私たちにとって必要なことは、与えられているすべてのものに対して、神に感謝し、そしてこれらのものを用いて、神の国と神の義をいかに求め、神の栄光を讃え、救いにある喜びの生活をするかです。欲望にかられることなく、与えられているものに対して、神に感謝と喜びをもって、歩み続けていきたい。

「信仰と名誉」　マルコ一〇章三二～四五節、エレミヤ一七章五～一四節

二〇〇二年九月一日

ここには主イエスが十字架と復活の三回目の予告が記されています。弟子たちの驚きと

恐れから、主イエスの十字架への並々ならぬ思いが伝わってくる(三二節)。しかしその傍らで、ゼベダイの子ヤコブとヨハネの兄弟は、自分たちの出世(名誉)のことを考えていました。そして主イエスに頼む(三五節)。何を要求するか、主イエスはご存じであられましたであろう。しかし、主イエスはその要求を断ることはなさらありません。彼らは誰が一番偉いかを議論しあい、そのことを主イエスは指摘していた(九章三三節～)。主イエスは、ここで「そのことについては、既に語ったではないか」と言われることもありません。「求めなさい。そうすれば、与えられる」(マタイ七章七節)。主イエスは、私たちが、日々、主の御前に祈り求めることを、待っておられます。そしてそれを聞いてくださいます。私たちは神に祈る時、すべてを神に委ねて祈ると、適えられる確信を持つ。

しかし私たちは祈りの内容について問われています。信仰告白において、「全能なる主なる神を信じる」と語りつつ、自己欲望達成のための祈りを聞き届けてくださらない神に対する不平不満をつぶやき、自己中心的な世俗的な事柄の要求となります。神は創造主であられ、私たちはその被造物です。そして私たちの生きる目的は、永遠に神を喜び、栄光を神に帰することです(ウ小教理一)。そしてウ小教理九八は、「祈りとは、神の御心にかなう物事を求めて、キリストの御名により、私たちの罪の告白と、神の憐れみへの心からの感謝と共に、私たちの願いを神に捧げることです」と語ります。

主イエスは二人に「このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」と語られます。これは罪に対する神の怒りの杯であり、人間の罪に対する神の怒りとしての洗礼です。しかし、彼らの目はまだ閉ざされており、十字架抜きの栄光・政治的な指導者を求めています。それは他の弟子たちとて同じです(四一)。

弟子たちが主イエスに求めている権力者です王は、権力闘争の故に立てられるのであり、そこには争い・戦争もあります。ここに人間の権力欲としての罪が潜む。先週、私は中会学生会修養会において、奉仕をした。テーマは「TheWaytothePeace～これからキリスト者として生きる為に」です。有事法案に対して、学生たちは真剣に考え、危惧しています。

そして自分たちの信仰の立場を真剣に考えています。ここで私が語ったことは、これらの前提には人間の罪(全的堕落)があり、神の国の完成と罪の除去が無い限り、戦争は無くならないと語った。

キリストが、王の王となられるのは、このような堕落した世における政治的な王ではありません。天地万物を創造されました時のように、罪のない状態にし、さらに神の国が完成して、神の御栄光が顕れる神の御支配です。そこに、キリストを信じる私たちは招かれります。ここには罪が無く、そこから生じる支配欲も権威欲もありません。神の栄光が人々に示され、そこに集う者は、神の栄光を讃えつつ、人々との交わりに満たされます。

キリストの十字架は、世にある罪が取り除かれるために避けて通ることができません。そして、私たちの罪の身代金として差し出されましたのです(四五)。そしてキリストは、死の三日目に罪に勝利され、復活されました。

神の国は、罪の中にあるこの世の秩序とは異なります。戦争も争いもありません。この神の国に、私たちも招かれています。聖餐式で私たちは、キリストの十字架を覚えると共に、やがて与えられる神の国における交わりを確認します。神の国に招かれている者は、地上にあっても、神の国が到来するために働く。そして名誉・権威を求めて、争い・戦いのある世から、キリストの恵み・神の愛・聖霊の交わりに満ちた世を求めて、歩み続けります。

「何が欲しいか」　マルコ一〇章四六～五二節、エレミヤ二九章四～一四節

二〇〇二年九月八日

主イエスたち一行は、ガリラヤからエルサレムに向けて歩まれています。エリコはエルサレムまでわずか二五kmの所です。主イエスの心は、十字架一点を見つめているといって

よいであろう(一〇章三二節)。

その様な中、一人の盲人が主イエスを呼び止めます。ティマイの子バルティマイです。彼の名は並行記事(マタイ二〇章二九～三四節、ルカ一八章三五～四三節)には記されていありません。マルコの時代には、主イエスの弟子として知られていたのかも知れありません。

このバルティマイが「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と叫び始めます。ガリラヤ中においてなされていた主イエスの奇跡や癒しの業の噂は、彼の耳にも入っていたのであろう(三章七～八節)。しかし彼は単に主イエスを病気を癒す力があるお方ですとは考えていありませんでした。ダビデの子とは、マタイの最初「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」と記されているのと同じであり、イスラエルはダビデの子孫から救い主が現れることを待っていました。

普通の人たちは、目が見え、何不自由なく暮らしていても、真に神を求め、信じる霊的な目はふさがれ、主イエスをダビデの子・救い主とは認めることができません。しかし彼は、肉の目は閉じられ、不自由な生活が強いられていたが、主なる神は、彼の霊的な目を開いてくださり、救い主を求める真理が与えられていました。「わたしがこの世に来たのは、裁くためです。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになります。」(ヨハネ九章三九節)「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」(マルコ一〇章三一節)。

私たちは、決して行いによって罪の赦しを得る者ではありません。しかし主イエスの他に救いがないことが示され、目の前にこのお方がおられるとしたら、叫び続けることとなるのです(四八)。日本社会においてキリストを信じ続けていこうとすれば、彼の様な頑固さすらも求められます。

「求めなさい。そうすれば、与えられます。探しなさい。そうすれば、見つかります。門をたたきなさい。そうすれば、開かれります。だれでも、求める者は受け、探す者は見

つけ、門をたたく者には開かれります。」(マタイ七章七～八節)

「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」(四九節)この言葉は彼に非常に勇気を与えた。彼は神によって霊的な目が開かれ、真理を求める者とされましたが、真の真理であり、偽りなきものですことを、何らかの形で返答がなければ、疑ってしまうのが人間の弱さです。しかし「安心しなさい」との言葉により、この確信こそ、真の信仰であり、真理ですことを、彼は確認することができ、信仰が強められました。そして祈りは答えられました。これが神を信じる喜びへと繋がります。私たちもまた、霊的に神によって捉えられ、信仰が与えられ、救いの喜びに満たされています。そして主の日毎に行われる礼拝こそ、霊的にキリストと出会い、キリストからの豊かな福音が示される場として、私たちに与えられています。だからこそ礼拝は、喜びと感謝に満ちたものです。

イエス・キリストを救い主として信じります。これは、これからなされる救いに対しても、不安や疑問もなく信じる事です。この方が、全知全能なる神だから可能です。私たちの救いは、イエス・キリストの十字架により既に成し遂げられています。未だ見ることのできない神の国を、すでに与えられました十字架により確信を持つことができます。

キリストによって捉えられキリストに繋がる者は、キリストの福音に満たされ、世へと遣わされていく(五一)。そして与えられました御言葉の福音に満たされ、御言葉を証しし、神の国の完成のための働きをなしていきます。

礼拝の最後に、祝祷を祈ります。これは神の御前に集められ福音が示されました者たちを、世に送り出し、一週の時、神の守りの内に、それぞれの働きが守られ、またそこから神を証しする者とされるようになされる祈りです。キリストは、今日も私たちに「行きなさい。わたしがあなたを今日も明日も守っている」とお語りくださっています。弟子とは、キリストに従い、キリストの道、つまり神の完成なさる神の国を目指して、歩み続けることであり、そのためには、礼拝において御言葉に聞き従うことと同時に、世にあって神を証しし、社会に仕えていく者として召されています。

「エルサレム入城」　マルコ一一章一～一一節、詩編一一八編一～二九節

二〇〇二年九月一五日

いよいよ主イエスは、エルサレムに入られます。この日から受難週が始まる（ヨハネ一二章一、一二節）。まさしく主イエスは、十字架を一点見つめていたのです（一〇章三二節）。ベタニヤはエルサレムから約三kmの距離であり、主イエスたちは、ここに拠点を置き、毎日エルサレムに通われました。

その時主イエスは二人の弟子を使いに出されます。主イエスは一二弟子を伝道に派遣されました時（六章七節）、他の七二人を任命して派遣されました時（ルカ一二章一節）、二人一組にして派遣されました。また最後の晩餐となります過越祭の準備をするためにも、主イエスは二人の弟子を使いに出される（一四章一二～一三節）。

二人が遣わされるとは、大切なことです。これは、人間の罪・愚かさとの関係があります。一人で仕事をすることにより、神の栄光のための働きですことが忘れ去られ、自らの功績としたり、さぼったりするからです。しかし二人でその働きを行うことにより、一人の功績にはなりにくく、また互いに監視しあい手を抜くことも行わなくなります。

改革派教会が長老主義を採用しているのも、まさしくこのような理由からです。もし優秀でやり手の牧師がいると、伝道が進み、テキパキと物事がなされていくことであろう。しかしこの時、「〇〇牧師の教会」となる恐れもあります。しかし一つの教会に牧師と共に、信徒の代表として長老が立てられることは、牧師が個人的は能力において教会の働きを行うのではなく、神の働きですことを牧師自身が戒めることができます。更に信徒の代表として選ばれました長老自身、さらには長老を選び出した信徒自身が、主の働きの為に仕えていることを覚えることができます。

牧師にしろ、信徒にしろ、主のために働く者がいます。しかしそこに人間的な感情が持ち込まれると、功績となります。キリストの教会です以上、そうした人間的な感情が持ち込まれることを排除する必要があります。教会は、キリストの栄光が讃えられる場所です。主イエスが、二人の弟子たちを使いに出されました時、主イエスが語られました通りに子ろばが繋がれており、主イエスの働きのために用いられることとなった。

私はある教会の牧師から、こういうことを聞いました。その牧師は、教会の一人の長老から、「私たちは週日、働き、疲れて教会に来るのだから、慰めの言葉だけを語ってくれれば良い」と言われましたと。この言葉は、十分に心に留めなければならないが、一つ大きなことが忘れられています。それは私たちは主イエスを礼拝しに来ているのであり、この主イエスは、私たちの王として君臨されていることです。主イエスがエルサレムに入ろうとされました時、弟子たちは自分の服を子ろばにかけ、また他の弟子たちは自分の服を道に敷いたりしたのです（七～八）。王として迎えるのに相応しいことです。この時私たちは、主イエスの御前に、自ら今来ている服を差し出すことが求められます。礼拝とは、霊的に神・キリストとの出会いの場であり、罪の赦しと永遠の生命を宣言していただく場です。その場に集う私たちの姿勢が今問われています。私たちに霊的にお会いしてくださるキリストは、王であられます。

しかし私たちの王であられるキリストの凱旋は、戦う軍馬に乗っての凱旋ではなく、子ろばに乗ってです。勇ましい武将の姿ではありません。ろばでは戦うことはできません。しかしこのお方が軍馬を絶ち、諸国の民に平和が告げられる（ゼカリヤ九章九節）。この方こそ、王の王、主の主であられ、世界に平和をもたらす方です。十字架の死と死からの復活により、サタンに打ち勝たれります。そしてキリストが再臨されました時に、完全にサタンを滅ぼされ、平和な世界です神の国をもたらしてくださいます。

アメリカは今、テロの根絶を名目として、アフガニスタンと戦い、またこれからイラクとの戦いを起こそうとしています。ブッシュ大統領は、まさしく自らが武将となり、子ロ

バに乗り、エルサレムに入城されるキリストの姿を見ていありません。ここに正義はありません。

私たちは今「ホサナ(九、主よ私たちに救いを(詩一一八章二五節))」と叫び、すべてを統治しておられ、罪を滅ぼし、世界に平和をもたらしてくださる主イエス・キリストにすべてを明け渡し、委ね、ひれ伏す事です。そしてこの方の栄光を誉め讃えることです。

「信じて祈れ！」　マルコ一一章一二～二五節、イザヤ五六章一～八節

二〇〇二年九月二二日

ここは、いちじくの木を呪う話しとその解説の間に、神殿から商人を追い出す話しが挿入されています。一部だけ読んでいても理解できないことが、すべてを読むことにおいて見えてくります。

主イエスがエルサレムに入城したのは、受難週の最初の日であり、その翌日です。つまり過越祭が近づき、神殿は参拝者で満ちていました。当時、三大祭りの時、神殿参拝が求められており、子羊や鳩を献げる必要がありました。また年に一度は神殿にお金を献げる事も求められました。商人たちは彼らに対して、鳩を売ったり神殿に献げるユダヤのお金への両替を行っていました。そして参拝者にとっても便利なものでした。

しかしそうした商人を主イエスは見て、憤りを覚えられました。それは神殿を真に礼拝する姿から遠かったからです。元来、神殿は幕屋に由来するが、幕屋は神の民ですイスラエルが、主なる神との出会いの場として設けられました。主なる神が、イスラエルをお選びくださり、神の民としてくださいました。そしてエジプトの奴隷の民でした時、主なる神によって助け出されました。そして四〇年の荒れ野の旅においても、すべての必要が満たされ、約束の地カナンに導かれました。神殿とは、主なる神の救いの内にあることを、

心から感謝して、参る場です。罪の赦しの宣言を受けるために鳩を献げ、神の赦しにあることを感謝を込めて献金します。形さえ整えば良いのではありません。

ここでは神殿参拝者の姿勢が問われるが、主イエスはそれ以前の問題として、聖なる神殿において商売をしている人たちを問題にしておられます。商売を行うことは、営利目的です。「どのようにして、どれだけ儲けてやろうか」と思惑する者の方が多かったであろう。人の心を支配するのは、神かサタンかのどちらかしかない(イザヤ五六章七節参照)。自らの儲けのために全勢力を傾けることは、サタンの虜になっている姿です。もちろん神からの恵みと祝福の内に、必要が満たされることはあるが、「祈りの家」を求めつつ「強盗の巣」たる贅沢を求めることはできません。

一方で主イエスは、いちじくの木を呪われます。これはエレミヤ書八章、ユダ・エルサレムの罪の預言から考えることができます。ここで語られるぶどうやいちじくは、ユダやエルサレムの象徴です(エレ八章一三節)。

いちじくは、秋に収穫をもたらす秋いちじくと、夏に収穫をもたらす夏いちじくがあります。夏いちじくは六～七月に収穫をもたらすが、過越祭の時期(三～四月)には、すでに青い実をつけります。その青い実を見つけるためには、葉の生い茂った木の中に見つけるため、近くに行って見つける必要がありました。しかし実を見つけることができず、主イエスは、エルサレムの信仰と重ね合わせて、呪われました。

ここで主イエスが、私たち自身の信仰の姿を問うておられます。旧約の時代、神の宮としての神殿において創造主・救い主との出会いと罪の赦しを行っていたが、現在では、聖霊を通して私たち自身に神が宿ってくださっている(一コリント六章一九～二〇節)。キリストの十字架という私たち自身の罪の償いの代価は、すでに支払われ、私たちは神によって買い取られました。主なる神は、一〇〇％私たちを守り、必要をお与えくださいます。

だからこそ、「十字架に架けられましたイエス・キリストを、私の救い主として信じる」この私たちの信仰告白の真の意味が、今問われています。「神を信じます」と語りつ

つも、自分自身の欲望のままに、自分自身の功績を求めて生きている私たち自身がここにあります。私たちは、勝手に状況判断をしてしまい、「祈ってのダメだ」と考えてしまう。しかし主イエスは、すべてを委ね、信じて祈れば、聞き届けてくださる(二二)。

私たちは、今日の午後、会員総会を開きます。私の辞職と共に、招聘委員の選挙を行っていただく。後任牧師に来ていただくことは、現在の改革派教会の状況から考えれば、簡単なことではありません。しかし私自身が、辞職を決意した一つの理由は、新しい牧師を迎えることにおいて、さらなる教会の成長が、主によってもたらされるとの確信からです。主を信じて、すべてを委ねて祈り続けよう。

「イエスの権威」　マルコ一一章二七～三三節、イザヤ八章二三節～九章六節

二〇〇二年九月二九日

世には様々な権威があります。首相・国会議員・社長…。時には、それらの人は権威を持つと、人々を服従させ、権威を振りかざすこともあります。聖書は権威についてどのように語っているだろうか？

主イエスは、十字架に架かられるためにエルサレムに上られています。そして主イエスは、神殿が礼拝の場・祈りの場ではなく、商売の場となっていることをご覧になられると、すぐに商人たちを追い出しになられました。それ故祭司長たちは、イエスを殺そうと謀った(一一章一八節)。彼らに取って、神殿は自分たちに管理の権限が与えられ、統治している場です。その神殿に、イエスが勝手に入って来て、商人たちを追い出し始めたからです。従って彼らがイエスに向かっての問いかけは、質問ではなく、殺すための証拠を見つけようとする目論見からです(二八)。

しかし問題は、本来神から与えられていた神殿を治める権威を彼らが用いていなかった

ことにあります。神殿は、主を礼拝し、祈り、贖罪の献げ物がなされ、主との出会いの場です。そして彼らは神の御用のために召されていたのです。ところが彼らは、本来の職務・権威を忘れ、自らの地位自身に権威があり、力があると思いこみ、またその結果、傲慢になり、人を裁き、自己中心へとなっていった。

その彼らに対して、主イエスは逆に質問をされました(二九～三〇)。しかし彼らは答えられなかった(三一～三三)。ここに彼らの正体が見えてくります。真の権威とは、真実・真理を追究し、質問や問題に対する答えを導き出す。

そもそもヨハネの働きは何か？当時イスラエルは、出エジプトにおける神の救い、そして罪の赦しの感謝と喜びとしての神礼拝を忘れ、エルサレムには立派な神殿が建てられているにも関わらず、信仰的には荒れ果てていました。そのことを、主イエスは神殿から商人を追い出すことにおいてお示しになられました。その様な信仰的には真っ暗な中にあった時、このヨハネが現れ、ヨルダン川のほとりにおいて、人々に悔い改めを迫り、光として現れになられる救い主イエス・キリストを預言した（参照・イザヤ九章、マルコ一章一～八節）。

祭司長たちは真理を追究することなく、自らの権威・立場を守ることだけに必死になり、本来自分たちが仕えている主なる神が何を求め、何が真理ですかを忘れていました。このように人は、自らの地位・立場のみを守ろうとする時、形・身なりばかりを気にして、自らの力を誇示するあまり強圧的になります。真理という中身がないから、外見ばかり繕う。しかし、そうした外見だけの権威は、いずれは見破られます。

その時主イエスは、御自身についても何も語られなかった(三三)。あえて何も語らなかったと言った方がよい。語らなくても、御自身の内に真理があるからです。そしてそれは、旧約聖書の預言が成就し、ヨハネが語った真理があることに裏付けされています。

世にある様々な権威、それらはどの権威にしろ、そこに内容が伴ってこそ、真の権威が与えられるのであり、何もない所に権威だけが与えられると、そこには人々への服従・強

制へと繋がります。戦前の教育勅語・宮城遙拝、そして現在における日の丸・君が代がまさしくそれです。

真の権威、それは形ではなく、中身からその真理が示されます。聖書に記されている神の権威、つまりイエス・キリストこそ、私たちの救い主であられることは、教会が伝えるのではなく、聖霊御自身が、まさしく証ししつつ、福音が伝えられていきます。私たちキリスト者は、この神の権威により、イエス・キリストの十字架によって罪が赦され、永遠の生命の約束にあることを、心から喜び、感謝して生きていくことにおいて、この聖霊御自身が私たちに働き、私たち自身の体を通して、主を証しする者へと変えられていきます。

「捨てた石」　マルコ一二章一～一二節、詩編一一八編一九～二九節

二〇〇二年一〇月六日

主イエスは今までに三回弟子たちに十字架と復活の予告(八章三一節、九章三一節、一〇章四五節)をされましたが、ここでは主イエスを十字架に架ける者たちを前にして、たとえを用いて語られます。このたとえでは、農園主が、ぶどう園を農夫たちに貸し、任せります。これは、天地万物の創造主であられすべてを統治しておられる主なる神と、被造物であり世界の管理を任されている人間との関係です(創世一章二八節)。私たち人間は、神が今なおすべてを統治しておられ、人間がこの世界の管理を神から委ねられていることを忘れていますが、そのことを思い起こさせるたとえです。

農園主は何人もの僕を遣わしたが、皆殴られましたり殺されましたりした(二～五)。これは、主イエスが来られる前に、イスラエルに遣わされました預言者についてです。彼らはイスラエルに対して悔い改めを迫り、主なる神の御言葉に聞き従うことを求めて預言したが、イスラエルの民は彼らの声に耳を傾けることなく、捕まえ殴ったり、殺したりした。

そしてたとえで出てくる愛する息子が、主イエスです(六)。ここで愛する息子が殺される、これはまさしく主イエスがイスラエルの人々によって十字架に架けられることを語っているのです。

イスラエルの人々は、直接的に主イエスを捕らえ、十字架に架けたが、主人です神を忘れ、神のものを自分たちのモノとして扱い、自分勝手・好き勝手しているのは、私たち自身の姿です。

彼らは、主イエスが語られましたことをどこまで理解していたが分からないが、当てつけに語られましたと気づき、主イエスを捕らえようとした(一二)。しかし彼らは群衆を恐れ、主イエスを捕らえることはしありませんでした。彼らが恐れましたのは、主なる神ではなく、群衆でした。主に召されました者として、主に仕え、主を畏れることはありませんでした。今、この時さえ、自分たちが非難されず、乗り切ることができれば、自分たちの勝手に政治を行って良いと考えていました。だからこそ、神の御子であろうと捨てて、十字架に架けることができたのです。

『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった』(一〇節)。ここはイザヤ書二八章一六～一八節を読むことにより、理解することができます。イスラエルが捨てた主イエスは、シオン、つまり神の国に据えられました隅の親石です。イスラエルは群衆を見て、神の正義を忘れていました。家を建てる時に、基本となるものさしが歪んでいては立派な家は建たありません。雹が降り、洪水が溢れました時、つまり主の最後の審判がなされました時、これらの歪んだ計りによって建てられました家は、すべて流され踏みにじられます。

『わたしたちの目には不思議に見えります。』(一一)と語るように、捨てられました石であり十字架に架けられましたキリストを信じる者は、最後の審判という洪水にあっても、キリストという親石の上に立っていますが故に、流されることはない(参照・マタイ六章二四～二五節)。

十字架に架けられ死を遂げられましたイエス・キリスト、これは完全なる敗北に見えります。しかし主イエスは、死から復活され、今なお神の御国におられます。このお方を救い主として信じることは、弱い者が、逃げの手段として信じているようなものではありません。ここにこそ、勝利があります。

キリストの十字架こそ、私たちに勝利をもたらす(詩編一一八章二二～二九節)。喜びをもたらす。今日、この後、聖餐式に与ろるが、この聖餐式は、キリストの十字架において流されました血と裂かれました体とを、私たち自身の罪の赦しのために、私たちに代わってなされました罪の償いです。だからこそ、感謝をもって、この聖餐式に与りたい。そして私たちは今、私たちが主と共に生き、神の子として神の国に招かれる者として、さらにはこの世において神から統治が任されている者として、喜びと感謝をもって、主なる神に従って歩み続けたい。

「税金」　マルコ一二章一三～一七節、コヘレト五章一～六節

二〇〇二年一〇月一三日

「教会が政治的なことに対して発言すべきではない」と語られます。では聖書には政治に対してどのように対処すべきと記されているだろうか。今日のテキストは、そのヒントを与えています。主イエスは、十字架に架かられるためにエルサレムに入られ、祭司長・律法学者・長老たちと共に議論をしてきた。彼らの多くは、ファリサイ派に属していました。ファリサイ派は、イスラエル人としての誇りを持ち、律法に忠実であり、俗人とは区別されました者ですことから「分離者＝ファリサイ」としてファリサイ人と呼ばれていました。つまり彼らは世俗的なものを排除し、ましてやローマ皇帝に対しての税金を払うことを拒絶していました。一方、ここではヘロデ派の人々も一緒でした。彼らはヘロデ王朝

を指示するユダヤ人の団体であり、ローマの支配の元、ヘロデ王朝が保たれることを望み、政治的色彩の濃い団体でした。従って、ヘロデ派の人々は、税金に対しては、賛成していました。つまり、彼らは本来犬猿の仲でしたが、今は主イエスを十字架に架けると言うことで、一致し手を組んでいました。

彼らの狙いは、この質問から主イエスを十字架に架ける口実を見いだすことです。これは下心(偽善)です。もし「皇帝に税金を納めるのは律法に適っている」と答えれば、主イエスはローマに服従した者としてイスラエルの人々の反感を買うことになります。「律法に適っていない」と答えると、ローマ皇帝に対する反逆罪として、訴えられ捕らえられます。

こうした彼らの下心を主イエスは見抜かれました。主なる神の御子です主イエスは全知全能であられる(参照・マルコ一二章八節、ヨハネ二章二五節)。人を嘘を突き通しても、主なる神にはすべてが見透かされるのです。

そして主イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と答えられました。これは非常に簡潔でありつつ、明瞭な答えです。ただここで「政教分離」つまり「人間生活の物質的・政治的な面は為政者に属し、精神的・信仰的な面は神に属する」と解釈してはなりません。二つの異なる領域があり、神が信仰的な面のみを扱うのであれば、政治的な分野には、神の支配は及ばないのか？決してそうではありません。神は天地万物を創造され、地上のすべてのものを統治しておられます。それは精神的な面のみだけでなく、肉体的・物質的な面に関しても、神がご支配になられていることであり、二元論にしてはなりません。

そして神の御支配の下に、神は特別恩恵・霊的な支配を教会に託され、一般恩恵・政治的なことを為政者に託されました。だからこそ、ローマ皇帝やアメリカ大統領・日本の首相であっても、神の御支配に服さなければならない(ローマ一三章一～二節)。つまり「皇帝のものは皇帝に返す」ことは、「神のものは神に返しなさい」との大前提の下で成り立

つ。

従って税金を納めることの是非は、税金を納めるための法律が神の律法に従った正しい法律かどうかが問われてくります。たとえ嫌であっても、悪法と呼ばれる法律によって作られましたとしても、正しい法律にそって定められましたのであれば、信仰者としてそれに従うべきです。

しかし国家が、神のものを神に返さなければ、国家そのものが神になります。国家は、神の法に従い、国を治め、国民の福祉のため、国民の安全を守るのであり、その必要のために税金を取ります。この境界線をどのように定めるのかは、非常に難しい。国家が信仰的な面にまで支配を広げようとする時、つまり靖国神社を国有化・国教化しようとする時は、すぐに「否」を語る事ができます。しかし、今の有事法制やアメリカのイラクへの攻撃に対して、「殺すなかれ」と神が律法から即「否」を語ることができますのか、それとも教会による国家への介入となるのか、これは微妙な問題であり、各々の信仰の問題として考えなければなりません。

ただ神のものとは何か？すべてが神のものであり、キリスト者とされました私たち自身、神の像です。「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心ですか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことですかをわきまえるようになりなさい。」（ローマ一二章一～二節）。

「生きている者の神」　マルコ一二章一八～二七節、出エジプト三章一～一五節

二〇〇二年一〇月二〇日

サドカイ派の人々は、死者の復活を否定していました。そして彼らはモーセ五書しか信

じていありませんでした。逆に語れば、モーセ五書しか信じていないからこそ、そこで語られていない復活・死後の生命についても信じていありませんでした。そして復活や死後の生命を信じないからこそ、信仰が世的なものでした。こうしたことは新約の教会でも起こっていたことです（Ⅰコリ一五章一二～一四節）。そして今日でも同様です。今、日本でも欧米諸国でも教会から人々が遠ざかっていますが、その原因の一つが死後の世界・復活について考えなくなっていることであろう。これは、今の生活が満足の行くものであればある程、復活により与えられる神の国のリアリティ～が薄れていくためです。日本や欧米諸国のクリスチャンたちも、物質的には非常に恵まれています。そして信仰も世的になり、日々の信仰生活、さらには主日の礼拝が疎かになります。そして信仰は、苦しい時・自分が必要を求める時だけ神を求める、自分勝手なものとなります。

サドカイ人は主イエスに質問した（一九～二三）。女が夫と死別した後、次々と七人の兄弟と結婚したが、天国では誰の妻となるかということです（参照・申命記二五章五節）。彼らは天国を否定していますが故に、主イエスを試そうとした仮定の話です。しかし主イエスは、厳しくサドカイ人を咎められる（二四、二七）。復活を否定することは、人間の常識から外れ、考えの及ばないことをすべて否定することから始まっており、それは同時に天地万物を創造され、今なおすべてを統治しておられる主なる神を否定することです。つまり主なる神を、自分の頭の中に閉じこめてしまっていることに対する非難です。

そして主イエスは語られました。二五「死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。」つまり天国は、神とあなたとの霊的な関係があるだけであり、この世における肉の関係とはまったく異なるのです（参照・Ⅰコリント一五章三五～四九節）。

そして続けて主イエスが語られました（二六～二七）。これは出エジプト記三章から語られていますが「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神です」であり、「アブラハムの神でした、イサクの神でした、ヤコブの神でした」ではありません。父祖たちは、神の国

において霊的に神との繋がりの中に今なお生きています。そして更に神はモーセに語れています。出エ三章一四節「わたしはあるという者だ」。これは神の権威の確認であり、時代を超えて変ることのない神の存在を宣言しています。天地万物を創造されました神は、アブラハムを召し約束をお与えになられ、モーセを通して、その約束を成就してエジプトから救われました神が、とこしえに世々にわたり、「わたしは今ある」と語られています。従って私たちが「主なる神を信じる」と語る時、今だけ働いておられる神を信じているのではなく、今もこれから永久におられ、すべてを治めてくださっている神を信じているのです。神の御力は、全納であられます。

主イエスは、御自身が十字架に架けられ、死を遂げられました後、三日目に復活を遂げられます。その時まで数日と迫った今、復活を信じないサドカイ人に対して語られています。イエス・キリストの十字架の死、それは私たちが抱えている世的なしがらみ、強いてはそこに絡みついている罪のすべてを、キリストが十字架に抱えていってくださり、私たちはそうしたしがらみや罪から解放してくださるためです(参照・Ⅰコリ一五章一三～二一節)。

人々は様々な屁理屈を語り、神を否定します。しかし、主なる神は、今もあなたと共におられます。明日も、そして永久に…。主なる神の御支配と救いに感謝したい。

「一番大切なもの」　マルコ一二章二八～三四節、申命記六章一～九節

二〇〇二年一一月三日

私たちは長い間信仰生活を続けていると、様々な誘惑の故に信仰の本質を失う場合があります。当時の律法学者たちも同様でしたと言えます。旧約の時代、主から律法が与えられ、信仰の規範とされてきた。しかし時間が経ち、世代が代わることにより、律法は本

質が失われ、単に人を裁く判断基準となっていました。このことは、私たちが信仰規準としてウェストミンスター信仰規準や教会規定を用いる時にも同様のことが言えります。常に歴史的意義を確認していなければ信仰の本質は失われることとなります。

律法学者たちは、毎日申命記六章四～五節を唱えていました。しかしそこに生きて働いておられる主なる神が忘れ去られていました。そしてこの律法学者は、真の信仰が自らの内に失われていることに気が付き、主イエスに質問をした(二八)。そして主イエスはお答えになられました(二九)。私たちの全人格、つまり肉の体を支配しているすべてで、神を愛することです。ここに忘れてはならないことは、罪の虜にあり、そこから救ってくださいました神がおられ、今なお働いてくださっているという事実です。十戒の助言にあるが、まさしく私たちは罪の奴隷の家から救い出されましたのです。このために主イエスは十字架に架かられましたのです。救いのリアリティが、信仰を豊かにし、主なる神に従う心が日々整えられていきます。

そして本当の意味で、神を全身全霊で愛しているならば、行動が伴う。それは、私たちが主なる神を礼拝することから、主なる神の愛を私たちが人々に伝える者とされていきます。それが第二の掟です(三一)。この律法学者は、主イエスのお答えに同意した(三二～三三)。「どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れている」(三四)とは、礼拝を守ることは、形を整えることではなく、私たちを救ってくださいました主なる神を愛し、感謝と喜びを持って主に仕えていくことです。そしてこの律法学者の信仰に対して、主イエスは「あなたは、神の国から遠くない」(三四)、つまり、もうあなたは神の国の一員ですことを宣言してくださいます。主イエスは、律法学者だからダメだとは語られることなく、律法学者であってもその信仰の故に良しと受け入れてくださいます。

そしてこの第一・第二の戒めは、十戒の要約です(ウェストミンスター小教理四二)。十戒やこれらの掟は、律法学者たちが語っていた細かな律法とは異なり簡潔です。しかし、ここにある本質が失われ、ただ唱えるだけ、あるいはこの規定によって人を裁く基準にし

てしまっては、これすら律法主義に陥ります。私たちは創立宣言が語る通り、律法主義でも律法廃棄論者でもありません。私たちが律法（十戒）を重視するのは、これすら日毎に思いと言葉と行いにおいて破っている自らの罪を知るためです（ウ小教理八二）。そしてこれらの罪は上の怒りと呪いに値することを知る事です（同八四）。私たちは義なる神の御前で、不義なる者です。私たちは、ただキリストの十字架の故に、罪を赦し、義と認めていただき、神の子とされ、神の国に相応しいものとされています。ここにある主なる神の愛に感謝と喜びを持って、主に仕えていく必要があります。神の義に従い得ない自分が示され、それでもなお神に従っていくためにその基準として律法が与えられており、その柱が今日の掟です。

私たちを愛し、救ってくださいました神の愛を忘れ、人を裁く道具にした時に、律法主義や形式主義となります。だからこそ私たちは、真に神のお示しくださいました律法を全うできない者ですことを認めつつ、キリストの十字架による救いに導かれており、罪の赦しと義認、子とされることが宣言されていることを信じることです。今なお、主なる神は、私たちに対して働き続け、愛し、救いへと導いてくださっています。

与えられました聖餐の礼典のパンと杯により、キリストにある救いを確認しつつ、さらに主に従った歩みを続けていきたい。

「真理と見せかけ」　マルコ一二章三五～四〇節、サムエル上二三章一～七節

二〇〇二年一一月一〇日

今日のテキストには、二つの話しがあります。後ろの段落を含めて三つがワンセットですと言った方が良い。ここでは、主なる神の存在が現実のものですのか、それとも隠れました過去の存在としてしまっているかの違いが問われているのです。

主イエスは、「どうして律法学者たちは、『メシアはダビデの子だ』と言うのか」と問いかけられました（三五節）。肉的に言えば、メシアです主イエスは、ダビデの子（子孫）です（マタイ一章一節）。そしてこのことは、サムエル記下七章一二～一三節の預言の成就です。しかし主イエスが「メシアはダビデの子」ですことを否定されましたのは、肉的なことではありません。律法学者（ユダヤ人）が持っていたメシア像に関係します。ユダヤ人はバビロン捕囚以来、異邦人によって支配を受けていました。この時代もローマの属国でした。そのため彼らにとってのメシアは、ダビデの様な政治的指導者が現れ、イスラエルを再興することでした。主イエスは、そうした政治的指導者としてのメシアを否定されましたのです。旧約聖書によって預言されていたメシアは、霊的な指導者であり、サタンを滅ぼす者です。そうしたことを彼らは忘れ去っていたのです。

そして主イエスは続けてお語りになられました（三六、詩編一一〇章一節）。最初の『主は、わたしの主にお告げになった。』とは、「主なる神がダビデの子、神によって新しく王とされましたソロモンに、告げられました約束」ということであり、同時にダビデの子としてのメシアについて語られています。ダビデの子としてお生まれになられましたメシアは、主の右の座にお着きになられます。つまり主イエスは、十字架の死から復活を遂げられ、天に召されることを宣言されましたのです。そして、サタンを屈服させ、十字架の死からの復活によって、サタンに打ち勝たれることを宣言されました。つまり主イエスは、単にダビデの子孫として、政治的な指導者として立たれるのではなく、神に等しい方であられることを宣言されましたのです。しかし、律法学者たちは神を過去（ダビデ）の存在にしてしまい、自分たち自身が裁き主になり、神として働いていたのです。

さらに主イエスは、律法学者たちの本質を語り、その姿勢を否定されました（三八～四〇）。神に仕える者は、自らが人から尊敬されることよりも、自らの働きにおいて、主が誉め讃えられることが必要です。だからこそ主イエスは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神です主を愛しなさい」と語られましたのです

（三〇）。しかし律法学者はそれを行っていありませんでした。そもそも長い衣は、高い身分を表し、人にそれを認めされる働きがあります。

律法学者の地位が、神の御言葉を取り次ぐ働きをなさしているのではなく、主なる神が召しとそれに必要な賜物が与えられているからこそ、その働きができますのです。主の御前に立てば、律法学者とて一人の罪人に過ぎないのです。牧師を含め先生と呼ばれる者は常にそうした謙虚さが求められている（ヤコブ三章一～二節）。

この二つの段落は一見、異なったことを語っているように思われるが、実はまったく一つに繋がっています。それは主なる神の存在です。律法学者たちは、神を信じていても、神を過去の存在として否定し、自分自身が神としての行動を行っていたのです。しかし主なる神は、今なお私たちと共におられます。そして主イエスは、御自身がその神の御子メシアであられることを、律法学者たちに伝え、また十字架に架かられることにより、そのことを示し、サタンに打ち勝たれ、今なお主なる神の右に座しておられます。だからこそ私たちは、今なお主なる神が生きておられ、働いておられることを確認をし、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神です主を愛すること、隣人を自分のように愛することを行っていきたい。

「真の献げ物」　マルコ一二章四一～四四節、レビ二二章一八～二五節

二〇〇二年一一月二四日

教会に集う一人ひとりは、神の働きのために献金を献げるが、今日与えられました御言葉では、私たちが献金を献げる姿勢が問われています。

主イエスは、人々が献金を入れる様子を見ておられました。賽銭箱は、神社に置かれている様な物だったのかも知れありません。私が昨年イギリスに行った時、礼拝中に献金を

集めることはありませんでした。入口に半円盤の賽銭箱が置いてあり、礼拝出席者は、各々献金を入れるようになっていました。その様な賽銭箱でしたかも知れありません。いずれにしても主イエスは人々がどの様な思いで、どれだけの献金をささげていたのかを、知っておられます。

その様な中、金持ちは沢山献金を入れていました。実際に、多額の献金をしてくださる人が教会にいてくだされば、教会は非常に助かります。しかし主イエスは、多くの献金を献げたからそれで良しとはされてはおられありません。

一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚を入れました（四二）。レプトン銅貨は最小貨幣単位であり、日本で言えば一円です。また一デナリオン（一日の賃金）の一／一二八であり、百円位と考えてもよい。いずれにしても他の誰よりも金額としては少ありません。生活のことを考えれば、レプトン銅貨一枚を生活費のために置くこともできた。しかしこの女性は惜しみなくすべてを献げた。このことに対し主イエスは「この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れました。皆は有り余る中から入れましたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れましたからです。」（四三～四四）と語られました。

では私たちは実際に、どれだけ主の御前に献げたら良いか？レビ記には十分の一と記され、これが月定献金の一つの基準とされている（レビ二七章三〇～三三節）。パウロも「各自収入に応じて、幾らかずつでも手元に取って置きなさい」と語る（Ⅰコリント一六章二節）。しかしここでは、献金の多い・少ないを議論しているのではありません。献金を献げる人の心が問題です。

出エジプト記三五章は、エジプトにおける奴隷の状態から救い出されましたイスラエルが、モーセがシナイ山に登っている間に、再び罪を犯し、偶像崇拝をした後の出来事です。主はモーセを通して、幕屋を建設することをお命じになられました。幕屋は、罪の悔い改めを祭壇で行い、さらに主の臨在を確認し、礼拝する場です。つまり主は、イスラエルの

罪にもかかわらず、それを赦し、最初の契約を果たしてくださいます。主なる神のイスラエルに対する愛がここにあります。「あなたたちの持ち物のうちから、主のもとに献納物を持って来なさい。すべて進んで心からささげようとする物は、それを主への献納物として携えなさい」(五)。聖所としての幕屋が作られるために、主はイスラエルの人々から献納物と奉仕を求められました。これはあくまでも自発的な献げ物・奉仕です。強制ではありません。自発的に献げることは、主が生きておられ、主による救いに与っている喜びと感謝がなければ、行うことはできません。

主なる神を信じるとは、主が私たちの必要をすべて満たしてくださることを信じることです。この世は様々な苦しみもあるが、なおも主は私たちの必要を満たしてくださいます。そして私たちの罪を赦し、永遠の生命を約束してくださっています。厳しい言い方をすれば、生活にまったく響かない献金は献金ではありません。自ら必要以上の物があり、その余分を献金としているに過ぎないからです。もしかすると足らないかも知れありません。しかしそれでもなお主が必要を満たしてくださる信仰に立ち、喜んで献げる献金こそ、主が喜んでくださる献金となります。教会に献品を献げるのも同じです。家庭にある不要品を献品することは、神を侮辱しています。不要品は友愛セールなどの機会を利用すればよい。教会で本当に必要な物を必要な時に献げることこそ真の献げものです。主に献げる献げ物は、傷のない牛、羊、山羊です(レビ二二章一九節)。不要なもの、有り余っているものから献げるのではなく、自分が持っているもののなかの最良のものを選び出し献げります。それが、私たちを生かし、必要を満たし、救いに導いてくださっている主なる神に献げる献金です。

「終末の徴」　マルコ一三章一～一三節、ダニエル一二章一～一三節

二〇〇二年一二月一日

今日から待降節に入ります。私たちは、御子の御降誕の意味を考え、罪の赦しと救いにあることを感謝と喜びをもって過ごしたい。そして、マルコ書一三章は「小黙示録」と呼ばれる終末に関する事柄が語られています。

主イエスと弟子たちは、エルサレム神殿に来ていますが、弟子たちはこの神殿の素晴らしさに見とれていました。この神殿は、ヘロデ大王によって作られ始め、すでに五五年近く作り続けられていました。しかし完成は、なおも先のAD六四年です。人間の心理は、立派な建物があれば、永遠にあり続けるものと考えります。だからこそ立派な建物・鉄道・道路等を作り、後世に残したいと考えてしまう。しかしこれは人間の愚かさ・傲慢です。この神殿はAD七〇年にはローマ帝国に滅ぼされました。栄華を極めたローマ帝国も亡びた。そして昨年、ツイン・タワーも、一瞬にして崩れ去った。

しかし主イエスの言葉(二)は、単に神殿の崩壊を預言されましたのではなく、主の御支配の時が来る時には、どの様な人間の作った素晴らしいものであっても、崩れ去ることをお示しになられています。

終末には四つの徴があります。①主イエスの再臨として「私がそれだ」と語り、人を惑わす者が現れる(六)。②戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞く(七)。③地震や飢饉(八)。④キリスト者に対する迫害(九)。そして新約の時代(今)＝終末の時代であり、「そういうことは(今)起こるに決まっている」(七)。主イエスは④について詳しく述べられます。これはマルコ書が記されました当時(AD五〇年代)、ローマによる迫害を受けていたキリスト者にとって励ましに満ちた言葉でした。彼らは迫害の中、信仰を捨てありませんでした。それは「最後まで堪え忍ぶ者は救われる」(一三)からです。

終末の時代、人々は創造主・統治者であられる神を忘れ、自らの力を誇ります。その中、キリスト者は、戦いがあり、信仰を保ち続けることは困難です。しかしキリスト者には救いの希望があります。救いの希望は、キリストの十字架の故に与えられています。キリス

トは、既に罪に打ち勝たれました。そして十字架を信じるキリスト者は、永遠の生命と神の国における祝福が約束されています。しかも信仰は自分が勝ち取るものではなく、主がお与えくださり、主によって守られるのです。

日本の占領下の韓国で、神社参拝が強いられましたが、それを拒否し続け、信仰を貫き通されました趙寿玉（チョー・スオク）さんがおられました。彼女は、先日一〇月二八日に八七歳で天に召されました。形ばかりでも神社参拝をし、警察の言うことに聞き従えば、捕まり厳しい取り締まりにあうことはありませんでした。しかし彼女は、そうせず信仰を貫き通されました。彼女は証言されています。自分で何が何でも「頑張るのだ」ではなく、「聖書にはこのように記されている」、との信仰により、すべてを神に委ね、投獄中も語る言葉を聖霊に委ねていたからこそ、信仰を貫き通すことができたのです。

「聖徒の堅忍」と言う言葉がある（参照・ウェストミンスター信仰告白一七章）。「信仰を貫くことができます」のは、まさしく神の愛の故であり、与えられている祝福です。肩肘張って、信仰を貫く必要はなく、すべてを主に、聖霊に委ねる心が必要です。信仰が、主によって守られ、支えられているのであれば、信仰生活もまた主に委ねればよい。教会の成長も主に委ねれば良い。私たちは、主の御前で、御言葉に聞き従い、聖霊の働きに従えば良い。つまり牧師任せではなく、主の霊に委ねることです。そして主の霊にあなたも従うことです。そして主の御前に能動的にすべてを委ね、考え、教会の建設に向け、歩み出すことです。これはバラバラになるのではなく、一人ひとりの信仰が伝道所委員会に持ち込まれ、教会の方向性が示されていきます。主の御意志であれば、教会は自ずと一つの方向性を向いていきます。

私たちは終末の時代を生きています。今、私たちに求められているのは、クリスマスに御降誕くださいました御子イエス・キリストによる罪の赦しと救いにあることを確認し、感謝と喜びを持って歩むことであり、さらにはこの主にすべてを委ね、主の御言葉、主の聖霊に従って歩むことです。

「偽メシア」　マルコ一三章一四～二三節、ダニエル九章二四～二七節

二〇〇二年一二月八日

「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つ」（一四）。これは、ダニエル書九章二六～二七節の成就です。そして同時に、マルコ福音書を読んでいる当時の人々は、一つの出来事を思い浮かべた。それはAD四〇年にローマ皇帝カリグラが、エルサレム神殿に自分自身の像を建て、これを礼拝するように強要したことです。結果としては、この像が建てられる直前に、皇帝カリグラが病死したため、像は建てられなかったが、イスラエルの人々の心は傷ついていました。主イエスは、このカリグラ帝のように神殿やキリストの教会に現れ、破壊する時が来ると語られます。

同ように、日本に住むキリスト者としては、戦時中、キリストの教会に破壊者が立ったことを忘れてはなりません。戦時中、日本の教会では、神棚を置くことが強要させられ、そして礼拝の最初に宮城崇拝を行うことが求められました。さらに神社参拝も求められました。また礼拝に毎回、私服警察が出席し、牧師が語る説教を監視していました。これは明らかに、主なる神に代わる者が、神となり、キリストの教会を破壊する行為です。

そうした中、～読者は悟れ～（一四）とマルコは語ります。終末＝新約の時代に生きるキリスト者は、偶像を強要する人々に対して、敏感に受け止め、偶像を判別しなければなりません。彼らは巧みにキリスト者の心を揺さぶり、破壊者の言いなりになるようし向けて来ります。戦時中の日本の教会は、「父なる神の他に、なにものをも神としてはならない」とする戒めを守ることができず、信仰が骨抜きにされ、信仰の戦いを行うことができなくした。だからこそキリスト者は、社会から目をそらしていてはなりません。そして敏感に感じ取り、対応することが求められています。

なぜならこのような迫害は、天地創造から今までなかったような苦難ですからです(一九)。つまりキリスト教会を破壊しようとする者たちの行為は、限界がありません。なぜなら破壊者たちは、本当に畏れるお方を知らないからです。事実、歴史は繰り返し、非道な迫害を刻んできています。そして「主がその期間を縮めてくださなければ、だれ一人救われありません。」(二〇)のです。それ程まで人間の罪は大きく、限界を知らありません。

さらに偽メシア・偽預言者が現れる(二一)。破壊者が、キリストの教会に対する直接的な攻撃ですが、偽メシアは、キリスト教をカモフラ〜ジュして来ります。私たちは気をつけていなければならない(二三)。偽メシアは、キリスト教を名乗りつつも、キリスト教とはまったく異質のものです。統一協会の文鮮明は偽メシアそのものです。また、同ように「異端」とされるエホバの証人やモルモン教もそうです。

では、私たちは、どのようにして、これらの偽メシアを見極めればよいのか？「一切の事を前もって言っておく」(二三)と、主イエスはお語りくださいました。これは完了形です。主イエスは、既に、旧約聖書を通して、そして新約聖書で既にすべてを、お語りくださっています。つまり、「自分こそキリストの再臨だ」と語りつつ、「新たな教理が啓示されました」ことを語るものは、一切、偽物です。統一協会における統一原理、モルモン教におけるモルモン経典、キリストの神性を否定するエホバの証人の新世界訳聖書などは、すべて偽物です。

御子イエス・キリストは、旧約聖書の預言に従って、クリスマスに御降誕されました。そして三回にわたり十字架の死と復活について預言され、成就してくださいました。私たちの持っている罪の赦しと永遠の生命の約束は、このイエス・キリストの十字架によってすでに私たちに与えられています。私たちは、キリストの御言葉に聞き従えば良い。すべてを主に委ね、聖霊が満たしてくださることを信じていれば良い。自分自身で、あれやこれやと慌てふためく必要はありません。御言葉によって示されました主なる神を追い求めていれば、私たちは、破壊者にも偽メシアにも、惑わされることはありません。終末だからと、怖れ怯えるのではなく、すべてを支配し、私たちの必要を満たし、守ってくださる主なる神にすべてを委ね、主の日を待ちわびつつ、日々歩み続けていきたい。

「人の子が来る時」　マルコ一三章二四〜三七節、イザヤ一三章六〜一三節

二〇〇二年一二月一五日

アドベント(待降節)は、御子イエス・キリストの御降誕を覚える時ですが、それは同時にキリストが再臨される時を待ち覚える時でもあります。

世紀末、人々は「いつ終末が来るか？」と騒いだ。そこで語られる終末は、ただ恐怖心を人々に駆り立て、希望も慰めもありませんでした。今は姿を消したが、人々の生活を見れば、終末的な生活そのものです。終末的な生活について、パウロは語ります。

「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」(Ｉコリント一五章三二節)

これは神を忘れ、どうせ自分の生命、死ねばそれで終わりですとの考えが、自分勝手、自分中心へと変化を遂げります。自分の生命の終わりを、終末にしてしまっているに過ぎありません。そして日本社会では、こうした自分勝手主義のことを個人主義だと語り、肯定しようとします。

一方にあって、キリスト者としての生き方はどうあるべきか。ウェストミンスター小教理問答問一では語ります。「人間の第一の目的は、神に栄光を帰し、永遠に神を喜びとすることです。」証拠聖句・Ｉコリント一〇章三一節「あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」。個人主義は、神に栄光を帰す生活において、神から与えられました律法に従順でありつつ、神から与えられまし

たそれぞれの賜物を豊かに用いていく生活のことです。これは、主なる神と私という一対一の関係に成立します。しかし神との繋がりがなく、律法がない所では、単なる自分勝手主義になります。

終末の時代に生きる私たちに取って、主なる神が今おられることを信じる・信じないかは、大きな違いとなります。それは、今が終末の時ですことを、意識する・しないに関わらず、終末に生きており、さらには、終末後に与えられる世界に対する希望がある・ないの違いともなります。

人々は、全世界を統治しておられる神の存在を信じないからこそ、自然界の秩序が崩れ、終末が来れば、世界が崩壊し、滅びてしまうことを意識します。滅びてしまうからこそ、今を自分勝手に生きます。

しかし全世界を統治しておられる主なる神は存在します。そして終末は神の定められました時に来る(二六)。使徒一章一一節で天使が語った通りです。

そしてさらにその時、すべての神の民が集められる(二七)。ここに集められるキリスト者は、アダムの時代から今日に至るまで、そしてこの時に生きている者たちまで、全世界に散らばっているキリスト者です。つまり終末の時、それは世界が崩壊する時ではなく、神の国が完成し、神の国が完成する時です(参照・黙示録七章九～一二節)。

終末は必ず来ります。そしてその徴は四つあった(五～一三)。①人を惑わす者。②戦争の騒ぎと戦争の噂。③地震、飢饉。④迫害。このことをキリスト者は敏感に覚えておく必要がある(二八～三一)。終末の徴が様々な形で示されている現在は、新約の時代でありかつ終末の時代です。人の子たるキリストは、戸口に近づいておられます。しかし、私たちが忘れてはならないことは、終末によって世界が崩壊するのではありません。天地が滅びても、わたしの言葉、神の言葉は滅びることはなく、神の国が与えられ、新天新地が与えられます。私たちは滅びるものにうろたえるのではなく、天地が滅びてもいつまでも残る神の御言葉に聞き従うことにおいて、主からの豊かな恵みと祝福に入れられます。

ただ、人々は、それがいつなのかばかりを気にします。しかしそれは神の定められました時であり、それがいつになるのかは語られていない(三二)。ただ主イエスは、繰り返して語られています。「目を覚ましていなさい」(三三、三四、三五、三七)と。待降節の今、キリストの御降誕を覚えると同時に、キリストの再臨を希望をもって待ち望みつつ、あり続けたい。

「ナルドの壺」　マルコ一四章一～九節、雅歌一章一二～一四節

二〇〇二年一二月二九日

マルコ福音書は、一四章から、最後の晩餐・ゲッセマネの祈り・逮捕・裁判、十字架・死・復活と福音書の中心的課題が語られていきます。

「さて、過越祭と除酵祭の二日前になった」(一)とあります。金曜日が過越祭の日・キリストの十字架の日となるため、今日の暦からすれば水曜日と考えてしまう。しかしこの当時の暦は、その日を第一日と考えます。つまり二日前は、前日の木曜日です。そしてユダヤ暦では、日が暮れました時に新しい日となるため、今はもう祭りの直前、準備で慌ただしい最中です。

その様な中、祭司長や律法学者たちは、どのようにしてイエスを殺そうかと考えていました。そして、主イエスの弟子の一人ですイスカリオテのユダもまた、主イエスを祭司長たちに引き渡そうとしていた(一〇～一一)。

過越祭は、エジプトにおいて、イスラエルが、主の裁きにより初子が殺される時に、主が過越てくださるように家門に血を塗ったことに始まり、出エジプトを覚える祭りです。そして除酵祭も農作物の収穫祭です。つまり主が命を守り、支えてくださっていることを覚える祭りが始まろうとしている時に、祭司長たちは、主イエスを殺そうと狙っていまし

た。主に対する信仰が失われ、救われていることに対する感謝と喜びが、ここにはまったく失われ、主なる神に敵対する者となっています。

一方ベタニアのシモンの家では、一人の女が純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、イエスの頭に注ぎかけた(三)。一デナリオンとは一日の賃金であり、三〇〇デナリオンはほぼ一年の労働賃金にあたります。そうしたものを惜しみなく、この女性は主イエスの葬りの準備として献げた。彼女が主イエスの十字架について、理解していたとは語られていありません。ただ主イエスの三度の預言と聖霊の働きにより、彼女をこの働きをする者としたのであろう。神に従うとは、祭司長たちのように、自分の都合に合わせて感情を露わにして、何かを行おうことではなく、この女のように、主がお語りになられましたことを聞く者であり、聞き従う者となることです。主の言葉を聞くために、心の準備を行い、聖霊の働きかけに対して、聞き従う者となる必要があります。私たちは、主なる神を主人とするしもべ(奴隷)であり、創造主・統治主であられる方の御言葉に耳を傾けることを、第一にしなければなりません。

彼女の行為を、その場にいた人たちは憤慨した(四～五)。一見正しいように伺えります。しかしこれは世の中を支配している価値観であり、物質的な価値観・効率主義です。そして問われることは、彼ら自身が日頃からこのような生活を行っていたかです。律法学者たちは、人々の罪を見つけては、それを裁いていました。貧しい人々に施すどころか、そういう人々の生活を苦しめていました。主イエスはそのことを語られました(七～八)。

つまり彼女が主の御言葉を聞き続け、今主に最も必要なことを成したことに対して、彼らは主の御言葉を聞こうとしなかったことと共に、隣人に対する愛も備わっていなかったことが、露わにされました(マタイ二二章三七、三九節)。

しかし彼女は、主の御言葉を聞き、愛の業として、主の葬りの準備を行い、キリストの十字架による救いに与るものとされましたのです。そして、イスラエルの民が、出エジプトにおける救いに与ったことを感謝し喜ぶ祭りが、今キリストの十字架によるすべての神

の民のいのちの祭りへとなろうとしています。世の中が、主から離れ、慌ただしい中にあっても、この女は、主の御言葉に聞き、主の必要に答える働きを行う者、つまり最もこの祭りの本質を知り、感謝をもって喜むものとされました。

私たちは、年の瀬を迎え、慌ただしい中歩んでいます。こうした時、私たちは、第一に必要なものを見失ってしまう。準備に追われ、新年の雰囲気に飲まれてしまう。その様な状況の中にあっても、私たちに今必要なものは、主の御言葉に聞き、御霊の働きにより私たちの心を主に向かわせていただき、主の御心に従った歩みを行っていくことです。だからこそ私たちは、過越祭の祭りの直前の慌ただしい中にあっても、主の御言葉に聞き従い、主イエスの葬りの準備を行っていたこの女性のことを覚え、語り伝えていくように、主イエスも語られるのです(九)。

「過越と裏切り」　マルコ一四章一〇～二一節、出エジプト一二章一～一一節

二〇〇三年一月五日

今、私たちは、陶国薫姉の転入式を行い、主に感謝して私たちの教会の会員としての受け入れましたが、キリスト者が教会に籍を置くことは、非常に重要なことです。プロテスタントでは、カトリックのように、洗礼を授かれば自動的に天国における永遠の生命に与るとは言わありません。主の選びにありながら、幼くして信仰告白する前に召される場合があるからです。また逆に一時的な感情により、教会に来て信仰を告白したけれども、結局のところ後から教会から離れるケ～スもあるからです。しかし通常は、地上の教会を通して、救いがもたらされます。そして御言葉と礼典・祈祷により、私たちは主からの養いと霊的成長がなされていきます。

ところが現実の問題として、私たちは弱く、信仰的に苦しみ、悩み、迷う。そして私た

ちは、ユダの裏切りを通して、主がお与えくださる信仰とはどういったものですかを、一緒に考えていくことができます。

主イエスと弟子たちの一行は、過越祭の食事を取ることとした。過越祭では屠られました小羊を食することが求められていますが、この小羊を屠ることは、エルサレム神殿において祭司のみが許されていました。そのため、過越祭の度毎に、イスラエルの人々がエルサレムに集まってきたのです。主イエスたちも、エルサレムでこの過越の食事をするための部屋を借りることとした。そして主イエスは弟子たちに語られました（一二～一五）。当時、水がめを運ぶのは女性であり、男性が運ぶ場合、革袋を用いていました。そのため、男の人が水がめを運ぶことは稀でした。従って、多くの人々が集まってきておりひしめき合っているエルサレムの街の中でも、その男を見つけることができた。そして主イエスたちは、出エジプトを覚え、神による選びを確認する食事を行ったのです。

ところが、救いを確認する食事の場で、主イエスはユダの裏切りを予告されましたのです（一八）。このことは弟子たちに取って予想もしない言葉でしたであろう。そして、「まさかわたしのことでは」との思いもあった（一九）。ここに弟子たちの弱さがあります。救いにあることを今、確認しつつも、主の御前に完全に従うことのできない自分の姿を確認し、そこにある罪の自覚により、自信が持てありません。

しかし私たちは、弟子たちと同じように、動揺する必要はありません。今、教会に集められ、説教にあずかっているのは、主なる神が、私たち一人ひとりをお招きくださっているからであり、私たちが神の召しに従い、礼拝を通して、御言葉の説教と洗礼と聖餐の礼典・祈祷により、日々、信仰の養いがなされています。それは、まさしく神の民ですからです。

一方にあって、イスカリオテのユダは、裏切り者として、過越の食事を共にしながら、神の救いから外れる者とされました。しかしそれは、ユダ自身の罪の故です（一〇～一一）。ユダが主イエスを売り渡そうと考えたのは、主イエスに指摘される前、自分の意志でです。

たかだか銀貨三〇枚、ナルドの香油の一／一〇に過ぎない金額でです。

ユダは、主イエスの弟子として、主イエスと共に行動し、奇跡と癒しを見、罪の赦しと救いの御言葉を聞いてきていました。そして今、いのちの約束を確認する過越の食事を共にしています。にも関わらずユダは、主イエスを売った。主イエスにある罪の赦しと永遠の生命の約束を信じることができず、僅かばかりの金銭に心が揺さぶられましたのです。

私たちは、一時の欲望に目を奪われ、常に共にいてくださり、私たちの罪を赦し、永遠の生命をお与えくださる方を見失ってはなりません。確かに私たちの信仰は弱く、時としてぐらつく。ペトロは捕まえられました主イエスのことを三度も知らないと語った。トマスは復活されました主イエスについて「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と語った（ヨハネ二一章二五節）。しかし彼らは、共に復活の主イエスと出会い、悔い改めと信仰が新たにされ、初代教会を形成していく者として、立てられました。キリストは、すでに私たちの罪のために十字架の死と死から復活を成し遂げてくださいました。私たちはこの後、主の晩餐に与ります。この礼典を通して、私たちは確かにキリストによる救いに与っていることを確認したい。罪の赦しと永遠の生命にあることを、感謝し喜びたい。

「主の晩餐」　マルコ一四章二二～二六節、エレミヤ三一章三一～三四節　二〇〇三年一月一二日

主の晩餐は、聖餐式として、洗礼式と共に主が制定してくださいました礼典として、私たちの教会では月に一度守っています。回数に関しては、毎週・年に数回・月に一度と、教会によって異なります。いずれにしても私たちは、常にキリストの十字架に架かられました御体、そこで流されました御血を想起し、このキリストの十字架の死によって私たち

自身の罪の赦しが成し遂げられましたことを覚えなければなりません。そのために私は聖餐式のない週の礼拝でも、週報で「聖餐式」を礼拝式に入れ、今日は行わないけれども、次ぎにいつ行うかを記しています。聖餐式は、目で見る説教、五感で味わう説教とも語られ、御言葉の説教と切り離せない関係にあります。

主イエスは「これはわたしの体です」「これは、わたしの血です。」とお語りになられました。ここの解釈を巡り、宗教改革以来、教派間に一致を見ることができません。カトリック教会ではミサにおいて、パンとぶどう酒はキリストの御からだと御血に変化すると語ります。文字通り解釈します。しかしここに大きな落とし穴があります。現在でこそ、カトリック教会で聖書が重視されるようになってきた。しかしかつてはウルガ〜タと呼ばれるラテン語聖書のみが正典として認められ、他の訳語の聖書は認められず、教会でラテン語の聖書が読まれていました。そして説教なされることありませんでした。つまり信徒は、そこで何が語られましたかを知ることなく、ミサにあずかっていました。そのため、ミサにあずかりさえすれば救われるといった信仰がでてきた。ミサにさえあずかれば、霊的に養われ、自然と信仰生活が、功績主義・自己中心になっていった。

カトリックの教理自体は今も変わっていありません。信仰の生命の養いが、ミサによってのみなされ、御言葉を疎かにする生活となっています。

改革派教会の立場は、ウェストミンスター小教理九六で確認できります。

問・主の晩餐とは、何ですか。

答・主の晩餐とは、そこにおいて、キリストの御指示に従ってパンとぶどう酒を与え、また受けることによって、キリストの死が示され、ふさわしい受領者が、身体的・肉的にではなく、信仰によって、キリストの体と血にあずかる者とされ、それに伴い、彼らの霊的養いと恵みにおける成長のために、キリストのあらゆる益が与えられる、そのような聖礼典です。

ポイントは、信仰・霊的養いと恵みです。問九一では「キリストの祝福とキリストの霊

の働きとによって救いに有効とされる」と語られています。キリストの体は、十字架の死と復活の後、天に昇られました。そしてキリストは最後の審判の時に再臨されます。それまでは天に座しておられます。従って聖餐式のパンやぶどう酒がキリストの御体や御血となるとは考えてはなりません。あくまでもパンはパンのままであり、ぶどう酒はぶどう酒のままです。しるしにすぎありません。しかし、聖餐式のパンとぶどう酒にあずかることにより、天に座しておられるキリストの救いに与ります。霊的な繋がり・霊的な養いがあるからです。そして、御言葉の説教で語られましたキリストの十字架による救いを確認することができますのです。

さらに主イエスは言われました。「これは契約の血です。」(二四)旧約の時代、人々は神殿の境内の祭壇で、和解・贖罪の献げ物を行い、動物の血を通して、罪の赦しと命の約束を確認した。それは繰り返し行う必要がありました。しかし主は新しい救いの契約をお与えくださる約束をして下った(エレミヤ三一章三一〜三三節)。それがキリストの十字架です。この一度限りのキリストの血により、私たちの罪の赦しと永遠の生命の契約が結ばれましたのです。これは神からの一方的な恵みであり、破棄されることはありません。私たちはキリストの十字架による救いを信じていればよい。

主イエスは最後に語られました。「神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」(二五)神の国の晩餐に私たちも招かれています。新たに飲むその日の希望を抱いて歩み続けたい。

「ペトロのつまずき」　マルコ一四章二七〜三一節、ゼカリヤ一三章七〜九節

二〇〇三年一月一九日

主イエスと弟子たちは、エルサレムにおいて、過越の食事・主の晩餐の後に、祈られる

ためにオリーブ山に向かった(二六、三二)。つまりここでの出来事は、オリーブ山に向かわれる夜道の途中で語られました会話です。ゲツセマネまでそれ程遠くない道のりですが、真っ暗な夜道の山道であり、危険が付き物であり、石に躓き、怪我をするかも知れありません。従って、十分に注意を払い歩かなければならありませんでした。その様な状況の中、主イエスは弟子たちの離反とペトロの躓きについて、語られましたのです。

「あなたがたは皆わたしにつまずく。・・」(二七)は、ゼカリヤ一三章九節の引用です。羊は、自分で判断して何かを行うことができないため、羊飼いがいなければ、群から離れましたり、獣に襲われましたりすることがあります。だからこそ、常に羊飼いの加護の元になければならず、羊飼いがいなくなれば、羊たちも途方にくれります。同ように、主イエスを牧者とする弟子たちは、主イエスが引き渡され・十字架に架けられることによって、途方に暮れる状態になることを語られています。

しかしペトロは、主イエスの語られました言葉を理解することはできませんでした。そして他の弟子たちはともかく、自分に限ってとの思いがありました。ここにペトロ自身の思い上がりがあったのであり、主イエスを信じている自分に対する自信と過信がここにあったのです。

そして主イエスは「あなたがたは皆わたしにつまずく」と語られました。つまりペトロ一人の問題ではなく、私たちの信仰の問題です。私たちは「私が神を信じる」と語ります。私自身が神を選び、神を信じたのだと考えてしまう。しかし信仰の主体は神です。私たちは主なる神の召しがあり、聖霊の働きによって、私たちの心が改められ、信仰を言い表すものへと変えられます。従って信仰の主体は神なのです。

ウェストミンスター信仰告白第一四章「救いに導く信仰について」は次のように告白します。「選びの民が彼らの魂の救いのために信ずることができるようにされる、信仰という恵みの賜物は、彼らの心の中におけるキリストの霊の御業であり、通常は御言葉の宣教によって生み出されます。信仰は、また、この御言葉の宣教と、聖礼典の執行、ならびに

祈りにより、増し加えられ、強められます。」ここで私たちの持っている弱さ、罪深さを覚えなければなりません。ペトロは「わたしはつまずきません」と宣言したにも関わらず、わずか数時間後に約束を破った。主なる神に対しても、約束・契約を守りきることのできないペトロに対して、主は救いの契約を結んでくださいました。そして、主はペトロを教会の指導者としてお立てくださいました。そして同じように契約を守ることのできない私たちに対して、主は罪の赦しと永遠の生命の契約を結んでくださいました。これは主から与えられました一方的な恵みです。主は一度約束されました契約を破棄されることはありません。それは旧約の歴史を通して示されていることです。

そして主イエスは、「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」(二八)とも語られました。主イエスから離れましたペトロや弟子たちに信仰を与え、教会の指導者として立てるためです。

主は、私たちに対しても契約を結んでくださっています。キリストの十字架により、私たちの持っているすべての罪は赦されました。そしてキリストの死からの復活により、私たちは肉体の死を遂げても、キリストが再臨される時、復活の体が与えられます。そして、神の国へ、私たちも招かれります。

私たちに与えられている罪の赦しと神の国における永遠の生命は、私たち自身が獲得したものではなく、主なる神が私たちにお与えくださいました一方的な恵みです。感謝と喜びをもって、歩み続けていきたい。

「目を覚まして祈れ」　マルコ一四章三二～四二節、イザヤ五三章一～六節

二〇〇三年一月二六日

主イエス最後の晩餐を終え、ゲツセマネにおける祈りを行われました。主イエスはこの

後すぐに逮捕され、裁判にかけられ、十字架に架けられることをご承知の上で、父なる神に対して祈られました。この主イエスの祈られる姿こそ、真の神でありつつも、肉の体を持った人間の祈りであり、私たちキリスト者が神に祈るべき姿が示されています。

主イエスは、人間としての死の恐怖におびえていた(三三)。しかし同行した弟子たちは、そのことを理解しておらず、主イエスとしては理解してほしいとの願いがあった(三四)。

そして主イエスは地面ひれ伏し祈られました(三五)。ここに祈りの本質が示されています。祈りは父なる神になされ、そこには崇敬が求められます。主なる神は私たちの友達ではありません。また私たちの祈りを聞き遂げるだけの召使いでもありません。主なる神は私たちの創造主・統治主であられます。

その一方で、「アッバ、父よ」と呼びかけることを許してくださいます。ウェストミンスター信仰告白第一二章「子とすることについて」では、このように告白します。「義とされました者たちすべてを、神は、その独り子イエス・キリストにおいて、また彼のゆえに、子とする恵みにあずかる者としてくださります。〜」主なる神は神を信じる者を、キリストと同じように受け入れてくださいました。だからこそ私たちは、神による救いを確信することができ、「アッバ、父よ」と親しげに祈ることが許されています。

そしてその祈りは、①全知全能なる神を信じ、すべてを委ねることであり、②自分自身の要求を語ることが許されています。そして同時に、主が御自身の御計画のもと、御自身の御栄光のため、最善の結果を私たちにお示しになられることを信じて祈ることです。祈りは、自己の欲望を果たすために行うものではないことを覚えなければなりません。

主イエスの祈りは、まさしく今、目の前にある十字架の苦しみを取り除けていただきたい人間としての求めがある一方、主なる神の御計画が実行されるために祈り求めています。主イエスは、御自身がお架かりになられる十字架によって、神を信じるすべての者の罪が赦され、神の子とされ、永遠の生命を受け継ぐ者となることをご存じであられ、そのことが成し遂げられることこそ、主なる神の御計画ですことを信じて祈られているのです。

しかし三人の弟子たちは、疲れて眠ってしまった。私たち人間は、非常に弱い存在です。信仰の上でも、ペトロのように、数時間後には主イエスを裏切ってしまう弱さを持っています。さらに肉体的にも弱く、いくら主なる神に従おうとしても、疲れのあまり眠ってしまう。

この弱い私たちに対して、主イエスは常に語りかけ励ましてくださる(三四、三七〜三八)。

四一イエスは三度目に戻って来て言われました。「あなたがたはまだ眠っています。休んでいます。もうこれでいい。」とさえ語られました。主イエスは、眠り続けている弟子たちを、良しとはされていないでしょう。しかしそれでもなお主イエスは、彼らのために、そして弱さを覚える私たちのために、十字架にお架かりくださいました。

主イエス・キリストの十字架により、私たちが信仰的にも肉体的に弱く、祈ることすらろくにできないからダメだとはされありません。その様な弱さがあっても、主は、キリストの十字架の故に、罪の赦しと永遠の生命をお与えくださり、また常にその弱さをも省みてくださっています。

私たちは、主がお与えくださっている恵みに、感謝と喜びを持って、日々仕え、祈り続けていきたい。

「イエスの逮捕」　マルコ一四章四三〜五二節、イザヤ五三章一〜一二節

二〇〇三年二月二日

主イエスは、最後の晩餐を行われ、ゲツセマネにおいて祈っておられました。それを中断するように、ユダが祭司長・律法学者・長老たちを導いて、主イエスを逮捕しに来た。

祭司長たちはサンヘドリンを構成するユダヤ人の指導者たちです。そして彼らは主イエスが宣教を始めた当初から、主イエスに対して敵対心を持っていた(二章六～七節)。さらに主イエスを殺害しようとも思っていた(一一章一八節)。しかし今まではできませんでした。群衆が恐ろしかったからです。そのことが、主イエスの言葉にも表れている(一四章四九節)。彼らは聖職者であり、御言葉に仕える者でありつつ、それを忘れ、世の権力者として、人々の支持を気にして、恐れていたのです。

それは群衆たちも同じです。彼らは主イエスの教えに耳を傾けてきた。祭司長たちは彼らを恐れていたにも関わらず、彼らも祭司長たちを気にして、世の権力者の顔色を伺いながら、自らの保身を行っていました。そのため、主イエスを逮捕することにもついてきたのです。

その一方、主イエスに従って来た弟子たちはどうでしたのか？主イエスに従って来た弟子たちですら、武力に訴えようとしたのです(四七)。ここに、主イエスの御言葉、つまり主イエスの弟子としての姿はありません。群衆や祭司長たちを同じです。つまり、主イエスをイスラエルの王として信じているのは、あくまで政治的にイスラエルをローマから独立させる者としての世の王の姿であり、極端に言えば、ヘロデがイエスに変わったに過ぎないのであり、イスラエルを独立させるには、誰であってもかまわなかったのです。そのため主イエスが逮捕され、自分たちの身に危険が及ぶと知った瞬間に、弟子たちは皆、逃げたのです(五〇)。

聖書は続けて五一～五二節を付け足す。心の中で、主イエスを信じ、従い続けたいと願いつつも、自らに危険が及べば、何もできずただ逃げ出すしかできない私たち自身の弱さが、ここに示されています。ここに私たち自身の肉的・信仰的な弱さがあり、主の御前にある罪があります。結果として、自らの保身しか考えら得ない自分自身の姿があります。

そうした弟子たちやユダヤ人の姿を見ながら、主イエスは逮捕され、十字架に架けられていきます。世的に見るならば、敗北者の姿にしか見えありません。しかしここでは周囲

の人々こそ、主イエスを逮捕するにあたり、周囲の様相を伺い、何が自分にとって最も都合の良いことですのかを判断している罪が浮き彫りにされています。そして同時に主イエスの真理の姿が露わにされています。主イエスは、まさしく周囲の人々や私たちを救うために、逮捕され十字架に架かられましたのです。

そして主イエスは、武力に訴え、自らに勝ち目がないと思えば、すぐに逃げていった弟子たちを、お立てくださり、新約の教会の指導者としてくださいました。これは弟子たちが立派になったからではありません。主なる神が、新約の教会をお建てくださるのに、彼らが必要だったからです。そして、私たちをも、主はお立てくださり、新約の教会の一員としてくださっています。主が私たちをお立てくださるのは、神の子として、神の国における神の御栄光にいれられるためです。主が、私たちを招いてくださっています。私たちは、このことを感謝を持って、受け入れ、主に従って行きたい。

私たちは、今から聖餐式に与ろうとしています。この聖餐式で与えられるパンと杯により、私たちは、十字架に架けられ苦しみ、死を遂げてくださいましたキリストの姿を想記することが許されています。私たちは弱く、神の御言葉とこの聖餐から離れると、たちまち弟子たちの如くに逃げ出してしまう弱い存在だからこそ、主は私たちの信仰を守り、強めるために、聖餐式を制定してくださいましたのです。心からの感謝と救いにある喜びを持って、聖餐に与り、日々、主の御言葉に従って歩み続けていきたい。

「お前はメシアか」　　マルコ一四章五三～六五節、イザヤ五三章一～一二節

二〇〇三年二月九日

主イエスは、イスカリオテのユダの手引きにより、祭司長・律法学者・長老たちに捕らえられました。一方、ペトロは信仰の弱さ故に、遠く離れてイエスに従っていたが、十字

架を見据えられている主イエスから離れていく様子が浮き彫りにされていきます。

そうした中主イエスは、彼らの手によって大祭司の所に連れて行かれました。大祭司は最高法院（サンヘドリン）の最高責任者であり、この最高法院は祭司長・律法学者・長老たち七〇人で組織されていました。そしてその全員が、主イエスを神に対する冒涜罪により（参照レビ二四章一五～一六節）、死刑にすることに賛成した（五五）。彼らは聖職者でありながらも、今ある権威にあぐらをかいていました。主イエスに従えば自分の立場を危うくするからです。こうした自己防衛を行うことは、私たち自身の問題でもあります。

しかもローマの支配下にあったユダヤにあって、彼らは人を死刑にする権威を有しておらず、そのためには、ローマ総督に委ねる必要がありました。彼らが求めていたメシアとはこのローマからユダヤを独立させるものであり、手段を選ばない彼らの罪が露わになってくります。

しかし主イエスを死刑にするための不利な証言は得られなかった（五五）。証言が食い違っていたからです（五六、参照申命一九章一五～一九節）。すると数人の者が、神殿についての偽証を始めた（五七～五九章・参照ヨハネ二章一八～二二節）。しかしこの不利な証言に対して、主イエスは沈黙を保たれました。主の御計画が遂行され、主イエスが罪のない状態で十字架に架けられ、神の子たちの贖いが成し遂げられる必要が合ったからです。そしてこのことによりさらにイスラエル人の罪が露わにされていきます。そしてイザヤ五三章の預言は成就していきます。

しかし大祭司はこの神殿についての証言を問題視し、神に対する冒涜と判断した。それはナタンの預言（サムエル下七章五～一七節）に根拠付けています。つまり神殿を築く者は、神によって堅く立てられましたダビデの子、すなわちメシアですという預言であり、そして大祭司が問題としたのは主イエスが神殿を建てると語ったことが、間接的に自分がメシアですとの発言と見なしたからです。そして大祭司は直接的に「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と問うたのです。そして主イエスの答えを導き出し、大祭司は衣を引き裂

く（六三）。神を汚すものと受け取った証拠を見つけたことを意味します。そして一同は、死刑にすべきだと決議した。彼らは、罪と判断することができずに、自分たちの意見として決議したのです。自己保身を行うためであれば、証拠不十分で成立しない裁判において、自分勝手な決議をしてまで、主イエスを罪に定めた。

しかし主イエスが語られましたのは、ヘロデの神殿に変わる建物としての神殿を建てると語ったのではなく、五八『手で作られない別の神殿を建てて見せる』と語られましたのです。これは主イエス御自身の十字架の死からの復活のことであり、それは同時に、神の国の完成を意味します。

つまり主イエスは、大祭司やユダヤ人たちが求めていた政治的な指導者ではなく、霊的な統治者としてのメシアでした。

そして、今私たちに与えられている地上の教会、終末に完成する神の国を目指す者が集められる場として、主がお立てくださっています。教会は信仰共同体です。主の御前にある信仰者が集められ、共に神の国を目指した歩みをする者が集められています。人間的には肉の欲を求める者が、主にある救いにより、神の国に入ることが許されるものとされています。だからこそ、互いにそれぞれの弱さを覚え、祈り、そして助ける必要があります。それは、まさしくキリストによる罪の赦しが成し遂げられ、救いにあることの喜びと感謝がそうさせるものです。

「イエスと一緒にいたか」　マルコ一四章六六～七二節、エレミヤ五章二〇～二五節

二〇〇三年二月二三日

主イエスは、逮捕され、大祭司の屋敷の中庭にて裁判を受けていました。そして弟子たちは、主イエスを見捨てて逃げてしまった（五〇）。しかしペトロは遠く離れてイエスに従

い、大祭司の屋敷の中庭まで入り、遠巻きに主イエスの後ろを追っていた(五四)。恐らく、「あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」(三一)の言葉が心に残っていたであろう。

そうした中、女中がペトロに気がつき質問するが、ペトロは否定した(六六～六七)。彼は非常に慌てふためいました。尋ねられましたのは律法学者たちではなく、一般の人たちであり、ペトロは油断し不意をつかれましたのです。そして最初の鶏が鳴いたことも、気がつかなかったのです。

私たちの信仰は、日々ペトロの如くに問われ続けています。教会の礼拝を献げている時だけ、主の御前に立っているのではありません。食べるにしろ飲むにしろ何をするにしても、すべて神の栄光を現す(Ⅰコリ一〇章三一節)必要があり、キリストから離れることがあってはならないのです。特に日本では、キリスト者が少数であり、信仰を貫くことに困難を覚えります。しかし、私たちは生活のすべてを通して、救いにある喜びを人々に示していくのであり、キリストから離れました生活はあり得ないのです。

しかしペトロが強いられましたのは、犯罪者として迫害を受ける恐怖です。主イエスは、今裁判を受け、十字架に架けられようとしているのです。日本でも一九三〇年代に美濃ミッション事件がありました。大垣市にある美濃ミッションという宣教団体の信者の子供が、神社参拝を拒否したことがきっかけです。偶像崇拝の戦いです。しかし周囲にある他のキリスト教会では、信仰の戦いを行わず、神社参拝を行ったのです。特に、旧日本キリスト教会の牧師は、新聞投稿も行い、美濃ミッションの排斥を積極的に行ったのです。自分たちが彼らとは違うことを人々に受け入れられ、迫害を逃れることに必死になったのです。まさしく突然訪れました恐怖に、主の御前にある自分自身を顧みることなく、自己防衛を行い、犯罪人として自分が見られないようにしたのです。

そしてペトロは、呪いの言葉を口にして、誓い始めた(七一)。恐らく、自らの保身の故に、神を呪い、人々に対して「自分は嘘をついていない」と誓ったのではないかと考えら

れます。ここには、キリストの弟子としての姿はありません。しかしキリストによる救いの喜びを忘れました時、ふと私たちはこのような過ちを犯す危険にさらされているのです。

しかし主はなおもペトロを捉えていてくださいました。そして再び鶏が鳴くことでそれに気付かせてくださいました(七二)。主イエスがペトロを愛し、捉えてくださっていたからこそ、ペトロは立ち返る時が与えられましたのです。そして罪を認め、悔い改めへと導かれましたのです。そしてペトロは、主イエスが昇天されました後の新約の教会の指導者として立てられていった。

美濃ミッションの事件のように、日本の多くの教会で同様の罪を犯し、戦後も無反省・悔い改めのないまま、長い間過ごしてきた。しかし日本の教会もまた悔い改めと謝罪が求められています。美濃ミッションを攻撃した日本キリスト教会大垣教会は、今年二月一一日、正式に美濃ミッションに対して、悔い改めと謝罪を行なった。私たちは、クリスチャンでありながら、罪を繰り返し犯し続けります。そしてそのことにより、主なる神に対して、また人に対して、大きな傷も負わせてしまう存在でります。しかし、主はそれでもなお、私たちを愛していてくださり、主なる神に対して、そして人々に対して、罪を認め、謝罪し、主なる神への悔い改めと信仰を確かにする時をお与えくださっています。

私たちがキリストの教会を形成していくことは、まさしく、こうした弱さのあるキリスト者ですことを互いに認め合いつつ、許し合いつつ、互いにキリストへの信仰を確かめ、キリストにある罪の赦しと救いに感謝をしつつ歩んでいくことです。

「死刑判決」　マルコ一五章一～一五節、イザヤ五三章一～一二節

二〇〇三年三月二日

主イエスは、ユダヤ人たちに逮捕され、最高法院での裁判の結果、死刑の判決がくださ

れました（一四章六〇～六四節）。律法（レビ一九章六節）に照らし合わし、主の御名を呪う者として判断したからです。しかし彼らには、イエスを死刑に処することはできません。ローマの属国であり、彼らの自治は制限されていたからです（ヨハネ一八章三一節）。だからこそ彼らは、自分たちの欲望を達成するために、ローマ総督ピラトに、イエスを連れて行き、裁判にかけるように、要求したのです。

しかしローマ総督における裁判では、イスラエルの宗教的な事柄における裁判ではなく、国家反乱罪として裁こうとしたのです（ルカ二三章二節）。つまり、目的達成のためには、彼らは手段を選ばなかったのです。

現在、グローバル化の中、激しい競争社会です。社会的に不条理なことも多々なされてきています。そうした中、私たちも知らず知らずのうちにそうした環境に流されるのであり、彼らの行いを人ごととして見ていてはなりません。

一方ピラトは、表面的に見れば、ユダヤ人たちに押し切られて、主イエスを十字架に架けた様であり、同情する余地があるように見える（ルカ二三章四～五節、一四～一五節、マルコ一五章九、一四節）。しかし使徒信条では、二世紀から今日に至る教会において、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と語り、主イエスの十字架の責任を、すべてピラトに背負わせています。

それはなぜか？もちろん、最終的な決定者だからです。しかし同時に、我々の代表としてのピラトの罪を見なければなりません。ピラトは、AD二六～三六年の間、ユダヤの総督でした。彼は権力者として、権力に固着し、貪欲・残虐（ルカ一三章一節）でした。そのためには何でも行うのであり、祭りの度に囚人を一人釈放していた（一五章六節）のも、人々の機嫌をとり、この地で長期間統治するためでした。本来裁判権は、権力者の権威の一つであり、権力者の名の下に裁判を行い、権力者の名の下に恩赦が行われます。しかしこの恩赦を、ピラトはユダヤ人たちにも与えた。彼もまた、権力を固持するためには、手段を選ばなかったのです。そのため、自分自身の判断では罪に定めることのできなかった主

イエスに対しても、群衆の叫びに答えて、十字架に架ける決断をしたのです。ここに彼自身の持っている問題が浮き彫りにされてくります。キリスト者であっても、為政者や企業などで人の上に立つ方々あるでしょう。また社会のリーダーとして立って頂きたいと思う。しかしそこで貫かなければならないことは、群衆や下につく者たちの顔色を伺いつつ、自らの地位の安泰の為に働くことではなく、上に立てられている権威、つまり主なる神のご計画、真理に頭を垂れ、従うことです。

さらに群衆の姿を見なければなりません。群衆は、私たちの姿そのものです。群衆は一週間前、熱烈に主イエスがエルサレムに入城されることを歓迎したのです（一一章八節）。しかし最終的に主イエスを十字架に架ける叫びを行ったのが群衆です（一五章一三節）。つまり主イエスを十字架に架けた群衆は私たちでもあります。

主イエスは、この裁判の過程でピラトが驚くほどに自己弁護をまったくされず無言を貫かれました。無罪を主張すれば、正当性のあるお方です。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」（一四章三六節）との祈りが貫かれています。まさしくキリストは、私たちの罪の故に、私たちの罪を赦すがために、十字架にお架かりくださいましたのです。だからこそ、私たちは罪人でありながらも、義とされ、神の国に受け入れられるものとされています。この後私たちは聖餐式にあずかります。この聖餐式のパンと杯により、キリストの裂かれました体、キリストの流されました血を覚え、そしてキリストの十字架の故の罪の赦しと救いに、心からの感謝と喜びをもって、日々歩み続けていきたい。

「イエスの十字架」　マルコ一五章一六～三二節、詩編二二編一～三二節

二〇〇三年三月九日

イエス・キリストの十字架はキリスト教信仰の中心です。この十字架がどれ程残酷なものでしたかを御言葉は語ります。主イエスは、ピラトによって十字架刑が宣告されました。十字架刑は最も重たい刑です。そのため兵士たちも高圧的に主イエスに対して接します。紫の服を着せ(一七)、「ユダヤ人の王、万歳」と叫んだ(一八)のは、主イエスがユダヤの王としてローマ帝国を転覆させる罪で刑を受けたことに対する無辱的な態度です。力の失った権力者に対して自分たちが勝利をおさめた態度です。

十字架に架けられました主イエスを見て、通りかかった人々がののしり(二九～三〇)、祭司長・律法学者たちも侮辱した(三一)。さらに一緒に十字架に付けられました者たちもです(三二)。まさしく主イエスは、ただ一人にされ、精神的・肉体的苦しみにあります。十字架に架けられる犯罪者は、十字架の横木を処刑場まで運ぶことになっていたが、その体力すら残っていなかったのです(二一)。

そこで主イエスの代わりにシモンというキレネ人が無理矢理十字架を担ぐ羽目になった(二一)。どの様な人物でしたかは定かではありません。しかしただ一つはっきりしていることは、アレクサンドロとルフォスの父でした(二一)。アレクサンドロ(使徒一九章三三節、Ⅰテモテ一章二〇節、Ⅱテモテ四章一四節)、ルフォス(ローマ一六章一三節)は他の箇所に名が記されていますが同一人物かどうかは定かではありません。しかしマルコは彼らを何の紹介もなしに語ります。つまり当時のローマでは彼らはよく知られていたのです。従って彼らはローマ教会の信徒でしたと考えられています。そして、シモンもまた、後にキリスト者とされ、キリストの十字架を証言していたとされています。言ってみれば、ただその場に居合わせただけです。しかし、聖書は彼の名を記す。彼は、罵声を浴びせる人々と共にあったが、彼は別の者とされましたのです。主なる神は、彼をキリストの十字架の証言者とされましたのです。ここにはペトロもヨハネも他の弟子たちもいありませんでした。彼は、主なる神から必然的に、キリストの十字架を証しする者として、立てられまし

したのです。

私たちの周囲にいる多くの人々が、神を知らず、また否定します。しかしその中から、私たちはキリストの十字架を信じる者とされました。偶然のように見えても、主により必然的です。

主イエスは、肉体的にも、精神的にも、極限に追い込まれました状態です。十字架に架けられる時、手首と足首に釘が打ち付けられ、痛みが走る中、ジリジリと苦しみ、苦しみながら死んでいった。シモンはキリストの死の間近で見る証言者とされましたのです。

して私たちもまた、キリストの十字架を証しする者として今立てられています。キリストの十字架を証しする者は、キリストの十字架こそが、本来、自分自身が背負わなければならなかった十字架ですことを認める者です。キリストには「罪に定める所がなかった」とピラトも認めた。しかしピラトも兵士もユダヤ人たちも群衆も、キリストと十字架に架けまた罵倒した。人ごとだからです。しかし、このキリストの十字架が、私たち自身の姿ですことが示されれば、もうその様な傍観者ではあり得ありません。私たちはもう十字架を背負う必要はありません。キリストがすでに私たちの代わりに背負ってくださいましたからです。十字架を背負わなくても、キリストが背負い、私の罪の償いをすでに成してくださいました。そして私たちは罪が赦され、救われましたと言えります。だからこそキリストの十字架に対する感謝と喜びが生じてくります。心の安らぎがあります。

キリストの十字架に、心から感謝と喜びをもって歩み続けていきたい。

「主イエスの死」　マルコ一五章三三～四七節、出エジプト二五章一～九節　二〇〇三年三月一六日

今、私たちは、宮澤胆雅くんの幼児洗礼式を行うことが許されました。教会にとっても

心からの喜びです。洗礼を授かることは、神の子とされることを意味し、肉体の死を遂げても、永遠の生命と神の国における祝福に与ることができます。これは、私たちが死ななければならなかった罪の刑罰を、イエス・キリストが十字架で負ってくださいましたからです。

主イエスが逮捕されて以来、弟子たちは皆、逃げ去ってしまった。一番弟子と言われるペトロは、怖さの故に、三度も主イエスを否定した。誰からも見捨てられ主イエスが十字架で死を遂げようとされています。主イエスは肉体的にも苦しみを覚えています。釘が手の甲に足首に打ち付けられています。この手足にある釘に全体重がかかっています。私たちはこのキリストの姿から目をそらしてはなりません。私たちの負わなければならない罪の刑罰の姿がここにあります。

三時間、闇が世を包んだ。神の御業です。ここに私たちの罪の姿があります。この闇にある私たちの罪を背負い、キリストは死と遂げられました。

午後三時に主イエスは「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）」（三四）と叫ばれ息を引き取られました。使徒信条では「陰府に下る」と語ります。本来罪に定められました死者が入る場所です。そこにキリストは入られました。まさしく父なる神に捨てられました状態にあります。本来罪人たる私たちが行かなければならない所です。キリストが私たちに代わって陰府に下られましたことにより、神を信じている私たちは、もう陰府に下る必要はありません。

続けて聖書は、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けたと語る（三八節）。モーセの時代に幕屋が建てられ（出エジプト記）、至聖所に神が臨在されてきた。しかし幕により、神と人々との間には隔たりがありました。しかしキリストが死を遂げられました時、この垂れ幕が二つに裂け、神と神の民が自由に行き来することができますようになった。私たちは聖霊により神と繋がり、礼拝により、祈りにより、深い交わることができます。

今私たちがこれらのことを真実として受け入れることができますのは、聖霊の働きがあ

るのです。それと同時に証人が立てられましたからです。第一に百人隊長です。彼は「本当に、この人は神の子だった」（三九）と告白した。彼はローマ人であり、この発言により皇帝侮辱罪に問われかねありません。しかしこうした政治的な判断抜きの純粋な信仰の告白です。

次に主イエスに従ってきた婦人たちです（四〇～四一）。ペトロをはじめ、男の弟子たちは皆逃げ去っていました。しかし彼女たちは、キリストの十字架と復活の証人として立てられましたのです。女性には人権のない時代、しかし主は彼女たちを重要な証人としてお立てくださいましたのです。

最後に議員のヨセフです。彼はサンヘドリンの構成員であり、イエスの十字架に反対する声すら挙げられなかった者です。しかし主は彼に信仰を告白する者として、主イエスの墓を提供する者としてお立てくださいました。

信仰とは、まさしく彼らの如く、それぞれに抱えている問題・束縛から解放され、真の罪の赦しと救いを見据えて、キリストの十字架を受け入れ、告白することです。キリストの十字架の死と復活によって与えられる罪の赦しと永遠の生命の喜びは、私たちを自由にしているのです。私たちの罪はすでにキリストの十字架により、償われましたのです。社会の束縛から解き放たれ、真実と真の救いを求め、歩み続けていきたいものです。

「主イエスの復活」　マルコ一六章一～八節、詩編一六編一～一一節

二〇〇三年三月二三日

福音書は、イエス・キリストの伝記ではなく、主イエス・キリストの十字架物語です。この主イエスは、十字架に架けられ、肉体的にも精神的にも孤独と苦しみの中、息を引き取られました。一つの物語として読むのなら、二〇〇〇年前になされました残酷な処刑に

対する物語で済んでしまう。しかしキリストの十字架は、現在に生きる私たちの生に繋がるものであり、私たちはキリストの十字架を過去のものとして考えるのではなく、今に生きる私たちとの関係を見据えつつ読み進まなければなりません。

主イエスは、十字架の上で、死を遂げられました。現在で言います金曜日の夕方であり、当時は日が暮れると同時に次の日（つまり土曜日）が始まります。そして土曜日は安息日であり、働くことは禁じられていました。そのため日が暮れる前に議員のヨセフは慌てて主イエスの遺体を墓に収めた（一五章四六節）。そしてその状況を、最後まで主イエスに従ってきていた女性たちが見つめていた（一五章四七節）。なんとか主イエスの遺体を丁重に葬りたいとの願いがあってのことだろう。彼女たちは、安息日が終わると早速香料を買いに行き、早朝に墓に行ったのです（二）。

彼女たちが墓に行くと、石が転がしてあり、若者が座っているのを見て、彼女たちはひどく驚いた（三～五）。彼女たちは、主イエスに最後まで従ってきていたが、主イエスが語っていた復活については信じていなかったのです。「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていました。そして、だれにも何も言わありませんでした。恐ろしかったからです。」（八）。すべてのことを見届けてきた彼女たちが信じることができなかった事柄を、二〇〇〇年後の私たちが、ただ福音書を読んだだけでは決して信じることはできません。

そしてこの福音書はこの一六章八節ですべてを語り終えります。九節以降は二世紀に書き加えられましたことがほぼ確定しています。「恐ろしかったからです」で語り終えるのは不思議です。しかし私は、マルコが「神の子、イエス・キリストの福音の初め」と語り始めた福音書を、「恐ろしかったからです」で書き終えたのだと思う。福音とは、この福音書を読んでいる私自身が、神によって罪が赦され、救われ、永遠の生命に与っているかが示されることです。神の御子イエス・キリストの十字架と復活は切り離すことはできません。しかし福音書を砕いて読んだから、福音を理解できますかと言えばそうではありま

せん。聖書を文学的に、研究している人は多くおられるが、神を信じていない人たちもおられます。

ここに聖霊の働きがなければ、信仰は生じてこありません。そして神の御言葉を受け入れる私たち自身の心を整えることも必要です。だからこそ震え上がっていた婦人たちに対して、聖霊の働きが豊かにあったことを私たちはここで読み取らなければなりません。キリストの十字架と復活は、目撃しても信じることができません。ここに聖霊の働きがあるからこそ、信仰が生じたのです。そしてこのキリストの十字架と復活こそ、私たちの罪の赦しと救いのために必要なことであり、欠かすことができないことは、御言葉と共に聖霊の働きによって示されるのです。私たちはもう十字架を背負う必要はありません。主イエスが私たちの身代わりに十字架を背負われ、苦しまれましたからです。キリストの十字架による救いに、感謝と喜びを持って、歩み続けたい。

「復活のイエス」　マルコ一六章九～二〇節

二〇〇三年三月三〇日

このテキストはマルコ自身が書いたものではないことは確かです。初期の写本にはなく、マルコの文体とはかなり異なっています。聖書写本をしてきた人々は、そのことに気が付いていたことでしょう。しかし教会はここを聖書の一部としてきました。ウェストミンスター信仰告白では、「御自身の栄光、ならびに人間の救いと信仰と生活に必要なすべての事柄に関する神の計らいの全体は、聖書の中にはっきりと書き記されているか、それとも、正しく必然的な帰結により聖書から導き出されるか、のいずれかです。従って聖書には、御霊の新しい啓示「と言われるもの」によっても、人間の伝承によっても、いかなるときにも、何も付け加えられてはなりません。」（一章六節）と告白しているにも関わらずです。

それは、「恐ろしかったからです」で書き終えていることが不自然ですことが、誰しも理解できたからです。また「結び」と記されている後日談にも、神の真理が示されているからです。また初代教会の時代には、旧新約聖書が一冊に纏まっておらず、マルコ福音書のみで読まれていたことにも原因があるでしょう。

そしてここに結論として、主イエスが三日目に復活されましたことと、復活の主イエスに出会った弟子たちの証言を聞いた他の弟子たちはそれを信じなかったことが記されます（一二～一三）。裁判では三人の証人があれば証拠となります。しかし弟子たちは信じなかったのです。戯言としか思わなかったのです。人は「見たら信じる」と語ります。しかしキリストの復活は見ても信じることができないのです。ただのマジックとしか見ないのです。信仰は、見たからではなく、聖霊の働きにより、悔い改めと主への信頼が与えられなければ生じてこないのです。だからこそ、トマスに対して復活のイエスは、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」（ヨハネ二〇章二七節）と語られましたのです。信仰とは、御霊の働きにより、十字架のキリストと出会うことです。自分自身の罪が示されなければ、キリストの十字架が我がこととして信じることなどできないのです。

ところでキリストは、十字架の死と復活によって、何に勝利されましたのでしょうか？単に十字架に架けたユダヤ人に勝利されましたのであれば、復讐があったはずです。私たちは不信仰とかたくななな心の故に、滅びの宣告を受ける者でした。しかしキリストの十字架の死と復活により、それを信じる者に救いが与えられましたのです。キリストの勝利とは、滅びに対する勝利です。だからこそキリストの十字架と復活は、不信仰な弟子たち・私たちに、語りかけられています。十字架のキリストを信じることにより、滅びからの救いと永遠の生命が与えられるのです。私たちの罪の刑罰は、主イエスがあの十字架で担ってくださり、私たちはもうあの十字架を背負う必要もなく、滅びの宣告も受けない者とされましたのです。これこそ福音の真理です。そしてキリストは、不信仰で頑なな心を持っている弟子たちを伝道者としてお立てくださいました（一五）。信仰を告白する時、「私は

まだまだ理解していありません。信仰が薄い」と語られる方がおられます。しかし主はそうした者をお立てくださり、主の働き人としてくださるのです。信仰の主体はあなた自身ではなく、主なる神なのです。主を受け入れましたことにより、自らの口で信仰を告白する者であって頂きたいと思います。

そして救いを信じる者は、福音を宣べ伝える者とされます。救われました者は、皆が新しい言葉を語るようにされるのです。それは、自分を中心の生活してきた者が、神の真理を求めるものと変えられていくことです。神の真理です御言葉に耳を傾け、そして神の律法に従って生き、福音に満たされて生きていく事へと変えられていくのです。宣教・伝道ということは、まさしく私たち自身がキリストの十字架による救いに満たされ、心を弾ませ、主に感謝と救いに対する喜びをもって生活することから始まります。そのことにより、人々は、私たちの言葉に耳を傾ける者へと変えられていくのです。そして私たちが福音に満ちた歩みから出てくる言葉は、主を証しするものとなるのです。自分自身で行うのではなく、主にすべてが満たされ、主の御霊に従えばよいのです。それが伝道です。

キリストの教会は、キリストによって集められました様々な個性の人たちが集っています。一人では何もできないかも知れません。しかし、主は様々な賜物をお与えくださっています。キリストによる信仰の一致があり、互いに助け合いつつ歩み続けることにより、キリストの教会は必ず成長します。主にある確信を持って、確信をもって歩み続けていきましょう。

私は、今日で、上諏訪湖畔教会の働きを終えます。しかし救いに関する福音は、牧師が交代しようが、一時期、定住の牧師がいなかろうが、そこに神の民ですクリスチャンがいる限り、福音は広まっていくのです。これは主の働きであり、この教会にも、大牧者であられるキリストが御霊を通して働いてくださっています。だからこそ、様々な不安や不足な点も出てくるかと思いますが、主を信頼し、また必要を主に祈りつつ、信仰生活を歩み続けて頂きたいと思います。